増補 俳諧歳時記栞草

江戸 曲亭主人纂輔
藍亭青藍増補

夏

漢書律暦志 太陽者南方、南任也、陽氣任養物於時為夏、夏假也、物假大乃宣平、

炎帝 淮南子 南方火也、其帝炎帝、其佐朱明、執衡而治夏、

祝融 神 禮月令 夏月其帝炎帝、其神祝融、祝融顓頊氏之子、曰黎、為火官、正者、

昊天 墓要 天曰昊天、言氣浩汗、

朱明 尔雅 夏為朱明、一曰長贏、註氣赤而光明、故曰朱明、

蒸炒 韓文 自從五月困暑湿如坐深甑、曹蒸炒、説文 湯之時大旱七年、雒拆川竭、煎沙爛石、

四月

仲呂 律 月令 律仲呂、高誘註曰、陽散在外、陰実在中、所謂旅陽成功、

立夏 孝経緯 穀雨後十五日斗指巽為立夏、

蹎躓 通俗志作蹎躓 廣義

月名也、**小満** 月令廣義 立夏後十五日斗指巳為小満、四月中、小満者物長于此少得盈満也、

余月 尔雅疏釈 四月為余、

乾月 月令廣義 四月卦乾、

正陽月 西京雜記 陽德用事和氣皆陽而為純陽、乾天也、

己月 晋書樂志 夏正建寅為平月、故四月為巳、

首夏、初陽月 元帝纂要

卯月 卯月 釈名 皮流花

夏、孟夏 故云、又八月と云、暑して、卯月ともも、

花残月 蔵玉 くさくさし春のおくりや山ふゝ志けさがをとろ

得鳥羽月 花のゝう月 後鳥羽院 蔵玉 ふちの花夏おくれる山の下ゝやまん えゝうれの月 有家

五月

蕤賓 律 律暦志 蕤繼也、賓導也、言陽始導陰氣使繼養物也、位于午在五月

芒種 月令廣義 孝經緯云、小満後十五日斗指酉為芒種、五月節、言有芒之穀可播種也、

夏至 中同上 芒種後十五日斗指午為夏至、言万物于此假大而極至也、

仲夏 仲、同、中、五月、夏中也、

茂林、蔚林 纂要 木曰蔚林茂林

皐月 尔雅疏釈 五月為皐月、五月得戌曰厲皐、之氣也、五月建焉而辰有鶉首、

鶉月 周礼注 蕤賓午鶉首者星名、鶉首月之畧乎、

橘月 蔵玉 たが代

月えぬ月 蔵玉 晴るもみえぬ

早苗月 五月八農人方苗と捕む故ゝ早苗月と云、今畧して早月と云、

六月

林鍾 律 律暦志 林、君也、言陰氣受任助蕤賓君主種物使長揪盛也、位於未在六月、月令六月、律中林鍾注林衆鍾聚也、白虎通言、万物成熟種類多也、云云

小暑 節 月令廣義 孝經緯云、夏至後十五日、斗指丁為小暑六月節、

暑 中 同上 小暑後十五日、斗指未為大暑、六月中、日在柳、宇彙 九、季夏 礼記 季夏之月、末月曰季月、瓜期 左傳 齊侯使連稱管至父戍葵丘瓜時而往、及瓜代 且月 尓雅 六月為且、疏云、六月得己則曰則且、且子余切、遯月 易 本義 遯退避也、為卦二陰浸長陽當退避、故為遯、六月之卦也、朔月 年浪草 云、季吟 増山井 六月の異名とす、礼記 曰、朔月少牢五俎四簋、云、此月朔の義之、未詳其義、仍てこれを闕く、陽 年浪草 云、増山井 疑らくは誤り、按、陽、暘の作べし 月令廣義 暘氷石季童于氷臺、蔵氷三伏之日、以暘太廟、又林氷滋暘氷の賦あり、風待月 蔵玉 松ヶ下床居とつてくさ小ハきや風待月の夜の ささよ 顕昭 鳴神月 同上 夕立ハあれども雷のなる夏やくもん 定家 常夏月 同上 ちりはてゝ妹ゝ咲むこゝろ夏の月もちそる花のさかりと 後鳥羽院

夏 い

三伏月 輿儀抄 農事ゑもこゝろもつきたるゆゑ、みなしづきとよ、○一説に、此月暑熱烈しく、水泉滴尽くるゆゑ、水無月とも、なづくるなり、又荷田東麿呂、雷鳴ある月の上下と略して、三伏月とも云ふ、此説ゑ姑くこゝに、

四月 虎杖競 朔日 蕓薹抽 貴布禰の御神事、此日加茂の氏人、騎馬にて詣で帰る時、市原野の連理の芝にて、虎杖と争ひ、其大小多少を論ず、稲荷祭 中卯日○山城国紀伊郡にあり、例のごとみて甚奥、紀事 四月卯日、二ッあるに初の卯日を用ふ、新御供、社家松本氏調進す、神輿五基に供ずるの刻、ぶうゐ神輿五基、御旅所の西より出ず、東寺の南門の内に入る、此所に於て床をもうけ、五社の神輿もゝ南ゐむいて、其上に安置す、寺僧もの〳〵御供所に侍すゝゐ、於て、東寺の役人甲冑を着し、左手に長刀を横ゝ、右手に御供餅をゝげ、東寺地人の妻四人、寺中頭屋院より雑品供物を唐櫃に盛り、頭上にのゝ来ゝ、神輿毎に供ゝ、寺僧一人擅上に進出ゝ奉幣を、又護摩を修す、一座終りて後、社家并に氏子供

奉り、北の方大宮通りと経て、五条松原
五条の橋を過ぎ、大和大路を本山に入、○ 龍頭太 俳諧歳時記云羽倉家譜 垣武天皇御宇の人荷田氏の祖、山城国稲荷祭の時、神輿のさきに行る面を龍頭太と云、この外の祭の假面八王の鼻と称す、龍頭太八田中の社の神職、この面則ち龍頭太が作ると云、ちの名づけ云

伊勢神衣祭 十四日 公事根源 神衣祭八神祇令の中の四月、神服部潔齋して、三河の赤引の神調の糸を以て、神衣を織り、又麻績連と云氏人、麻をうみ、和妙荒妙を織り、神明に奉る、神衣の祭と云

忌さす 祭の条 部、神

岩梨 和漢三才画会 江刄三井寺の山中に生、苗の高サ二三寸、葉の大サ新樹の葉の如し、失ず、地に揺て生ず、二月小白花を開く、虎耳草花に似て、三月実を結ぶ、青大豆の如し、初め円く、数顆攢り生ず、揚梅の揉しく、葉の交ひに裏る、外色青く内紫黒色、小児皮を剥て食ふ、味微酸く甘、

覆盆子 本草 蔓に鉤刺あり、一枝五葉、葉小にして面背皆青く光、薄く毛あり、白花を開く、四五月実の子を成す、蓬蘽よりも小く稀疎に生ず、熟すれば烏赤

に、本草附注子覆盆の形に似たり、故に名之、○ 蓬蘽 覆盆子、蔗、樹苺、蛇苺 和漢三才図会 莞花 俗云以波不知 花葉並に藤に似て小に、三月花と開く、紫色、或は白花、云、又草藤上の説のごとく、紫花白花の二種あり、三月より四月に至て花開く、又一種夏藤あり、黄白色、蔓葉花ともに紫藤に似て小に、山州山科の近道に往て有り、四月花を開く、

馬蓼 大和本草 本草九物の大ちるとの馬と以て名づけ、日本にては相似て、蓼のごとく大きく、犬蓼、犬山椒、犬黄楊、犬ふいぬ蓼は葉に黒点あり、

芋植る 芋の注秋部

紫羅傘 本草 嘉經 紫羅傘、鳶尾と名づく、葉射干に似て、花の色紫碧、抽でず、其根を式鳥頭と云、茎二尺、○式鳥尾は燕子花の類なり、花早く開く、一の説

石解花 或は石斛に作る、本草西上に白花も有て、叢生して其根糾結して甚繁し、莖葉生じて皆青色、乾くときは黄色、紅花を開く、節の上に自ら根鬚を生じ、亦折下して砂石と以て栽之、或は物と

以て盛り屋下に掛、頻りに洗ふ水と以て寸、年と経て死す、俗に称して

千年潤石蔚

蘭花

本草 虎鬚草、一名燈心草、即竜の鬚のごとし、但し竜の鬚は堅小にして蠶実す、此草は稍粗にして蠶虚なり、白し、呉人栽之時、蠶を取て燈炷とす、艸を以て席及び蓑と織る、和名抄 蘭、和名岩菖、花色立成云、鷺屁刺、

五月

卯地打

世諺問答 今日、童の小弓を持ていんちとてすること、何の故ぞや、答ひし左右の馬場に、馬に騎て弓射ること、の侍るこそとこしの日なれもなるや是ぞや始とはんべるこそ、紀事 児童、柳の木を以て大小の刀と作て、こまを菖蒲刀と、男児は耳と腰に横へ、頭巾と着て、山伏の体をなして、暁に及て、鴨河の辺に出て、左右に列て、礫を擲て相戦ふ、是を卯地打と云、

守宮を搗

武帝記 端午の日、守宮を取て飼ひ、丹砂を以て体を赤く画き、次の歳此日搗之人の臂に塗る、犯すこと有ればバ消ぬ、故に守宮と云

生玉の流鏑馬

五月 神社啓蒙 生玉神社は摂津国東生郡、天王寺の辺にあり、祭る処の神一座、天生玉神なり、社家註進 明応年中、本願寺の僧、この所に来りて寺院とし、神地を掠めて境内に接し、神を其の不潔と思ひ、かの僧を罰す、僧おそれて、神殿造替の宿禱といざき、神主藤原吉勝に乞て、願辞を告く、数日ありて僧の病愈ぬ、遂に神殿を今の旅店の廻りに遷し奉る、其後信長の兵火に焼て、こと〳〵く灰燼となる、こゝに終に神釜を別所に遷す、慶長年中、秀吉城廓を築の刻、今の地に遷す、紀事追加 今日午の刻、流鏑馬を門外より、鳥居の方へ馳す、其装束、腹帯陳羽織と着て、尺一さんかりて止む、

今宮祭

九日に今 ○山城国愛宕郡紫野に在、十五日用 祭る所牛頭天皇 諸神記 正暦五年六月廿七日、疫神と船岡山に安置せらる、長保三年五月九日、疫神と紫野に遷座せらる、夢の告にて、京師の疫厄、御霊会と行ふ、紀事 午時神輿二基、相殿の宮各、旅所に出て相殿の宮は一説愛宕の宮、古へ愛宕権現鷹峯に在り、此社と今の愛宕山に移す、条院御宇勧請す、愛宕卒社地主神、故に号社と寸、神幸の日、鉾十二本あり、凡

鉾を出す町所々より別當供奉し氏子相従ふ神幸小川通りより元誓願寺大宮通りを過ぎ船岡山の北の麓を過て本山へ入る、

六月

忌火御飯

江次第 忌火御飯 六月十一月十二月一日早旦供之 以御臺盤一脚供之次供御飯

御菜四種和布御汁一坏下累

公事根源 内膳司より奉る、大床子の御座にて供すること景行天皇の御時よりはじまる、忌火とて火を忌むなり、神事などの時ハ不浄の火を[illegible]ふるきこととや、これハ月次神今食の御神事を今日より始めらるゝなるべし

嚴島祭

十五日 藝州佐伯郡宮島にあり祭る所の神三座、市杵島姫神、田心姫神、湍津姫神○或書云推古天皇の御宇播广国の住人内舎人佐伯の鞍職、當国ニ左近ス恩賀の島にあり、時に紅帆の船来る、船の中に瓶あり、瓶の中に鉾と立赤幣を着たり、三女あり、容粧端正告て曰我皇祚守護の為来現すと、よりて宝殿を恩賀の島に造るといへり、云々時に推古天皇二十二年十二月、叡聞に達し、社と崇め嚴島大明神と号す、始め名ハ恩賀の島後に市杵島の神号を用ひてまつると呼、或ハ地景の美をもて称す、當社後ハ深山前ハ蒼海左ハ原野右ハ松原その野に水あり御洗井と名く、蓋し當社ハ山上にあり廻廊ハ平地にありて、海潮のみちくる時ハ廻廊ともにさす、乾るときハ干潟五十町ばかりあらはる、無双の絶景なり、今通して宮島と号す○池の御前ハ同国安藝郡にあり嚴島と同じ神体也、毎年六月十七日の夜よりしまの神輿船舞楽を奏し、此に渡ることを清會と云、平相国清盛、霊験をかうむりしことを建立す、其後弘治二年、陶晴賢滅亡の時、兵火にかゝりて回禄す、ここに於て毛利大膳大夫元就再興す、廻廊周百十八間ありと云、例祭六月十五日より十七日、至るに先ヅ神前御池にて管絃の船を組む、舸三艘を舫ひて座を張渡し藻と結ひ竹にて楼を作り花と灯籠を釣し前後挑灯数多つけて飾る、十七日御船濫申の刻件の舟を大島居の正面より乗出し、管絃を奏す夫より外宮に押渡り、酉刻より管絃並供僧伽陀并舞楽畢て御船を嚴島へ漕戻し、長濱の沖にて奏楽並亥刻頃大島居のうちに漕入る、六月上旬に諸方の商人あつまり十五日より群集すること町人といへども多くハ嚴島道芝記に出

伊勢祭禮

十六日 十七日

延喜神祭式 六月十六日度会宮を祭十七日太神宮を祭る、其儀十五日黄昏以後、祢宜諸内人物忌を率

みく神の御雑物と陳列し、祝詞、亥時夕膳と供し、翌時朝膳を供す、祢宜内人ホ、歌舞と奏す、十七日太神宮ホ参ス其儀一度会ホ同し、○外宮十六日内宮十七日ニ参と行ハる、京師より御奉納の神宝と、神主神殿、棒ゝとき、官殿の御戸と開く、是と拜せんとて、諸人群参す、十人の祢宜其外、廣前ニて松明ともして、祝詞を捧く、今日出家円頂の者と許るし、参詣おさ

泉 京雅 水の本と源とらば、源と泉と云 釈名 泉 いづぐの ハいづる水、ぐるのるとぐのつと略せて、ぐ

泉殿 瀧殿、○泉水の辺、滝の辺ホ造る殿舎とす、嵯峨の大覚寺 栖霞寺ホ、滝殿ホ、神泉苑ニ滝殿ホ 源氏松風巻

井戸替 井、 漢音 さい 井、 礼伐 志 夏至井と浚へ水と改め、冬至ホ鑽て火と改む、瘟疫と去べし、○さし井ハ六月井と浚ふと云、 夫木 松が根 ホさけ、さし井とまゐらせ、

蘭苅 此草、備後国ホ多し、 定家 もの外の秋とすゝ苅、苅く席とす、変ぐハ閏月、

白麻苅 和漢三才図会 商麻 日向薩摩ホ多し、

九州の土の産、其葉微し、胡麻葉ホ似て、大く鋸歯ニもつる、ホ本草 倆目ホ、桐葉ホ似て、大く鋸歯ニもつる、齋曰予遠州の種と得て、こゝ植ると一年ハ其葉胡麻の葉、或ハ棣棠花の葉のごとし、花黄ニして、其実苺ホ似て、又翌年その子と種まバ則生じて葉桐の葉の如し、黄花と開く、扶ち揺の花の如し、実ハ半磨形の如し、是雄雌ホ、本草及び和三の説、ともホ証とすべし、其名と撫といふハ一種ハ実と結ぶ、其名と翔といふ、其実を椽とも其葉櫧の葉の如くして文理あり、皆斜ホ匂る、四五月花と開く栗の花の如し、黄色 天和本草 今按 櫧の木ハ櫧ホ似て同類異物あり、其木の高サ二三丈、実を櫧ホ似う、

櫟の花 時珍云、二種あり、一種ハ実と結ぶ、

ろ

六月 公事根源 ニ是ハ傳教大師の忌日、勅使登山の儀ニ

六月會 或ハ傳教会 長講会 六月四日ニ是を行

○山家説云、六月会ハ、弘仁十四年始て行ふ、建暦三年ホ、勅して御齋会ホ准ぜらるゝ、宣命使あり、○釈最澄姓八三津氏、近江滋賀郡の人なり、神護景雲元年ホ生る、弘

仁十三年六月四日寂す、年五十六、貞観八年八月、勅して傳教大師と謚す、此会八、叡山の谷々論義を、会場一院で年番あり、十月天台会も同事〻

は

四月

鼻高祭 八日 [大和名所記] 毎年四月八日、南都興福寺中門わきに、仏生会とおこなふ、伶人舞楽あり、其舞の中、陵王の舞と奏するは、其面の鼻高をとして、俗に此法会を呼ぶ、鼻高 ふの部、仏生会の条に注す、

花御堂 か部、戒祖堂開帳の条に注す、

花摘

花供 高野の花供 こ部にて見べし、

梅天 [杜甫詩] 南京西浦道、四月熟黄梅、湛〻長江去、冥〻細雨来、

潜確 [嚴維詩] 梅天一雨清、則蜀中に、梅雨乃ち四月に在り、是四月の梅雨なり、南京より、又熟梅天、黄梅天、黄梅雨、

葉抑 [本草] 春初発黄花と開く、春晩に至れば、葉櫻と春花と生じ、即ち黄蕊く葉長成す、

葉櫻 支子呂一汛ゆるに、葉櫻と春とす、蕉門諸流に、四月とせ、首夏の新緑を賞する多し、

ちゝ見草 如花の異名、[蔵玉] ちゝみ草を賞する多し、[詩] 鳥立田の山の里

花柚 [大和本草] 一種花柚、其実小にして多くなる、酒ゆうべ羹に加ふ、故に名づく、味大柚に劣れども又賞すべし、

白丁花 [和漢三才図会] 花白く微に丁香の氣あり、故に谷に名づく、小樹、高さ二三尺、枝茎動く、葉は狗黄楊に似て、四月小白花を開く、大サ三分ばかり、一種千葉のものは長茎を所々に挿之、活して叢生す、墻籬際限の為に、人家檐滴の下に植ゑ、

北日草

花王 牡丹 [白氏文集] 牡丹芳、花開花落二十日、一城之人皆如狂 [詞花集] 咲しらぬ故ぞ忠通公 ○ [欧陽脩花叙] みしらぬ花のうゝみて九日へかうり忠通公 ○ [欧陽脩花叙] 名 銭魯公嘗て曰、人牡丹と謂て花王とす、今姚黄は真に其王たり、魏紫は乃其后也、

花宰相 芍薬と云、[本草] 群花品中、牡丹を以て第一とす、芍薬と云、故に牡丹を謂て花王、芍薬を花相とす、

蓮の蕊 [同上] 蕊は藕芽泥を穿て白鶉を成す、即ち蕊、嫩弱、竹の行鞭の如し、長さ、その丈余に至る、五六月嫩を時、水に没して取之、蔬として

茹ゐぐ〜俗ニ藕絲菜と呼ぶ

和名抄 蓮 翠波知須之波比、**蓮の浮葉** 荷葉清明の後初て水ニ貼

て、是と浮葉と、**飛蟻** 和漢三才畜会 蟻ハ、羽ある蟻と人家の舌き

松の柱の間ニ蟻生ず其蛾細ゐ白く、嬰粟子の如く、黒点ある処頭と、尋て黄赤ゐ変じ、翼と生じ、再び黒く変じて群飛す、奈何ともすることあたゐず相傳ふ呪いの哥と書て、其柱ゐ粘るときハ蟹こぐ〜く除去るもの〜試ゐ験ゐ、其哥誰人の詠ゐることもたゞ、もあるとハ山ゐ住べきものあるこゝ里へ出ることおのゐあやまり、**初松魚** 東医宝鑑 松魚、性平〜く味甘く毒ゐ、肉肥、色赤くして鮮明ゐること、松の節のごゝ、故ゐ松魚と云、東北江海の中ゐ生ず、大和本草 相州鎌倉、或ハ小田原の辺ゐ多くと釣る江府ゐ送るこの早く出るこのを初鰹と称し、賞味す、○烏帽子魚、鰹と、え部ゐ多くみるゞ〜、

兼三夏物

麥 和漢三才畜会 麥と炒磨て細末カし、飛羅て冷水ゐ浸して、是を噀る砂糖ゐ和して愈佳し、○

早鮎 是又一夜鮎と云ふ、俗ニ麥こぐ〜と云、奥貝の数種と細く截て醞醸す故ゐ柿鮒と云、其熟すること〜、依て早鮒、一夜鮒と云ふ、

もろく鮎 毛吹草 羽州秋田のもろく鮎、是鱚ゐ似る魚、

蠅 本草 夏出る冬蟄ス、腹と喜び寒と悪む、其蛆と胎く蛆と生ず、灰中ゐ入て蛻化して蠅となる、**蚤蝎の蛾ゐ化** 同上 八蟻蛛ゐ、専らすること如し、水ニ溺て死し、灰を得て活く、

蠅虎 蠅と捕へて喰之、是と蠅虎と云ふ、

方目鳥 和漢三才畜会 大さ鳩の如し、黒色、短き尾、尖る嘴、本紅ゐ赤黄ゐ、脚長くして正青し、常ニ田沢ゐ鳴、夏月鶴と以て上饌と、味美ゐ、又大鶴ハ形ち鶴ゐ似て大ゐ、形色少し異ゐ、爾雅集註 鳩ハ、即ち護田鳥ゐ、人と云る時ハ鳴く、主の官と守るゐ似ることあり、故ゐ名之、

苕草 蘓頌曰、根叢生と作す、窠毎ニ三十茎を生ゐ、赤色ゐ黄ゐ、七月黄花と開く、陶弘景曰、茎苗と取て掃帚と、

水馬 部競渡の条ゐ注す、

梅雨 部、五月雨の条ゐ注す、

半夏生 本草 半夏、一名守田、礼、月令曰、五月半夏生、蓋當夏之半故名守田、月令廣

義半夏ハ藥草ニ、夏の半ニ居て生ず、
○五月中ゝり土日ヒ半夏生ゝ云、

反舌無声 月令

礼記疏ニ反舌を蝦蟇ゝ云、

博多百合 和漢三才畜会 花黄白色ニて、背ニ赤き斑の文理あり、云ゝ

花菖蒲 白菖の屬ゝ、其葉水菖蒲ニ似く、色淡青、水陸共ニ叢生す、五月一莖と抽で、莖端ニ花を生ず、形状燕子花の如く、紫淡紅白ニ数色あり、最も愛観すべし、水菖蒲ニ似く花とむらく故ニ花菖蒲と云

紫羅襴花 本草 白菖二種あり、一種ハ池沢ニ生じ、根大ニ俗ニ是を泥菖蒲と云、一種ハ溪間ニ生ず、根瘦赤節稍密なるものハ溪孫と、俗是を水菖蒲と云、和漢三才畜会 白菖ハ葉花皆燕子花ニ似く、瘦小く、其花紫色、又白花あるあり、淡紅あるもあり云、

花ぐつゝ 此ものの古来浅論多し、但し八雲御抄 童蒙抄 其外 頭注密勘ニの諸出ニ、菰のもと食るニ姑くゝ〳〵、又田字草のこと云説も也、物の絵様ニ四出の花とゆゑ多くさと云是ハ田字草のこと也、

初蟬 七部蟬の条ニて可見

羽抜鳥、羽抜鴨 凡諸鳥、五月羽毛脱落あるもの、禿頭のごとし、羽抜鳥と云、

新六 夏草の野沢ゝ孔の羽ぬけ鳥 家

六月博多祭 十五日

あらしみとあるべあるらゞ身多

○博田撫田の神社ハ筑前国那珂郡ニあり、祭る所の神、中殿ハ撫飾田姫命、或説ニ大若子命、勧請ハ天平宝字元年、右殿ハ祇園牛頭天皇、勧請ハ天慶五年、左殿ハ天照皇太神宮、勧請年月詳ならず、件の三神相殿ニ、正月八日正大般若を修す、六月十五日祇園会、十一月二ノ卯日新嘗会、今六月十五日祭礼と行ふ、古八十六日十七日、永享四年六月十五日始て祭之、作り山六基、太平京師祇園会の山ニ四倍と云、右山次第ニ上張りニ組上げて、階上凡百人と居らしむべし、一基と引ものハ九千人ゝ、木偶人ニ鎧を着せて、階上ニ立て、其甲冑ニ皆姓名と書あるハすゝが故ニ、領主の家臣、我おとゝ〳〵と美を尽して着用の鎧と出すこと、此祭礼のあらまとす、

橋立祭 神輿三基、供奉の行装又厳重なり、

廿五日 風土記 丹後国与佐郡艮の方ニ速石里あり、里中ニ長き大崎あり、長廿二十二百二十九丈、廣廿九丈二尺、是と天

橋立と名づく、又八久志濱、又八久志之渡と名づく、

拾芥抄 智恩寺八是切戸文殊安置の道場なり、天竜六奈灯明と供ス、

紀事追加 六月廿五日、丹後切戸の文殊会、同橋立祭礼、文殊会、橋立祭同事ニ、○天橋山智恩寺ハ延喜四年開基勅願ニて山号寺号とたまへり、荘田と賜ふこと凡四百余年と、嘉暦年中、嵩山禅師住持ス、是禅刹の始ニ、夫より三百余年、住侶詳ならず、寛永年中、国主京極高廣、別源禅師を請ずして住持ス、是より洛の妙心寺ニ属ス、寺領五十石余、文殊堂ハ巽向ニ明暦年中改造、堂内ニ延喜の勅額あり、○橋立明神、本社豊受太神と祭る、左ハ大河大明神、右ハ大竜王と祭 ○伊祢浦名所ニ、伊祢ハ惣名なり、凡日出より亀島まで、入江の裏向ニ、丹後鯨ハ此所なり、鯨あり、○天橋立ハ与佐の海中なる長洲ニ、長サ三十六町、土人浮島と誤る、松樹並木のやうなり連なり、碧海中央六里松と作る、詩人六里松と称ス、社の近処樹の茂りなる所と濃松、なほ濃なる所と淡松と称ス、俗ニ三保ハ捐ル、橋立ハ、枝ル、

あり、二町ばかりの舟渡あり、是と九世渡と、世ハ切渡の文殊とも是ニ、又ハ内外濱、子日の嘗、萬代の濱、此橋立の別名なり、○竜灯松ハ、洞ガ磯の辺にあり、松樹蓋のごとし、

半夏草

半夏、二月

蘊頌曰紅苗と生ず、一莖、その端ニ三ツ葉を、浅緑色、頗る竹の葉ニ似たり、この此その和産と相同じ、花ハ夏のおわり秋ニ及ぶ、

余雅 荷ハ芙蓉ニ、其蕖ニ、其莖ハ茄、其葉ハ荷、その花ハ菡萏、其実ハ蓮、其根ハ藕、其中ハ菂、その中ハ薏ニ、注ニ曰、芙渠ハ總名ニ、別名芙蓉、蓋ハ蓮花ニ、

蓮花

○愛蓮説 蓮、花之君子者也、○池見艸、露堪草、水堪草、

蓮実

貞徳曰、蓮ハ花ニ実と具してある故ニ、蓮の実も夏ニ、蓮の実飛ニ秋ちる、蓮の異名なり、

草

あ部、麻の葉の条ニ生ス、

○十六日例幣使野州日光山へ赤向、拝礼の儀あり、申の刻神輿三基、御宮と止ニ奉り、新宮の拝殿ニ遷幸ニ、ことまと宵宮ニ、三仏堂の前ニ於て、例年の舞と奏ス、翌十七日巳刻ニ榊と御依所ニ渡ニ奉る、次ニ御祭礼供奉の行装あり、新

四月

日光祭

十七日

宮より御旅所へ至るの間、凡十五町ばかり、兵士烏兎鉾を持、職士赤面の大鉾ハ猿田彦命と表ス、獅子頭、田楽法師、神楽男八乙女、三綱馬上素襖裳袴、社家馬上束帯、御神馬、御弓、御鉄炮、甲冑童子、御翳太鼓鉦、鼓、猿公、宮仕、神人、伶人奏楽ホ有之、鷹匠御祭礼奉行諸武家駕輿丁素襖、御本社神輿白張百人素襖廿人、山王(一説ニ日光権現とも云)の神輿、白張百人、社祢廿人、麻多羅神神輿、白張百人、社祢廿人、行者山伏群行ス、御旅所ニ於て献供の間、東遊奏楽ホ了て、神輿還幸、御本社ニ納り奉る、日光三社とハ新宮大己貴尊、滝尾田心姫命、本宮味耜高彦根命、外ニ家光権現、こまと下照姫なり、三社の祭礼ハ三月三日なり、

煮酒

東医宝鑑 煮酒ハ、味ひ殊ニ佳之く夏月のむニ宜しきこ是本邦の煮酒ニ似たる名目と挙るし、本邦ニてハ夏日酒の氣味と失はざる為ニ煮酒の法を用ふ、京師ニて是と酒煮と称し、此日酒肆、親き跡をとぶらふす、慣としべ、恣ニ酒とのましむ、是と酒煮の祝といふとぞ、

兼三夏物

煮冷

の条ニ注ス

ひの部、冷汁

煮取

和漢三才図会 鰹節を造る時、其汁の滞るものを取て、こまとと収む、黒紫色、味甘美○ 煮取とく爰でもお憎愚し　嵐雪

五月

入梅

○部五月雨の条ニ注す、

忍冬花

金銀花○弘景曰、此草藤生ス、冬しこ凌く凋まず、故ニ忍冬と名づく○時珍曰、木ニ附く蔓延す、茎微し紫色く節ニ對て葉と生ず、葉蕾薪ニ似く青く、濇毛あり、三四月花とひらく、長サ寸ばかり、一蒂ニ両花、二瓣、一ッハ大、一ッハ小、半辺の状の如し、長鬚、花初てひらくものハ蘂瓣ともニ白色、二三日とふれバ色黄ニ変じ、新旧相やしりて、相映ず、故ニ金銀花と呼ぶ、氣甚ぐ芬芳し 和名抄 忍冬(和名須比加豆良)

鳰の浮巣

大和本草 鳰ハ、字彙云、好入水食、似鳧而小、鸊鷉もういつぶりなるべし、俗ニ鳰の字と用ふ、万葉以下の古哥ニ、鳰鳥とよめる是也、水上ニ浮巣と構へ、風ニ随てたゞよふ、無名抄 祐盛法師曰、鳰の浮巣ハ、えいはぬことぞ、かの浮巣ハ、ゆるまあるべきものにあらず、海の潮ハみちひるとあるべバ、そをとしつりて、鳰の巣とならぬ芦のくきくと中ニこめく、例も枯穂とぞ、くりあげてめぐりふくいされバ、潮ニみちぞ上れバ、汝もまたバあがりてくだる也、幻住庵記 今年湖水の波ニ、ただよふ鳰の浮巣の、ながれとゞまるべき、芦のひともとと

の蔭にのをしくもと

貞享式 鴫ちどり 鷸 鷸ハ水鳥の用ゐ来ル事ハ夏と決すべし 鳥の浮巣 いつぐ古式ニ雜ゝ為せることなれ水中の草ゐ巣と掛ぐ水の増減る浮こそ沈こそ四季ゝ共ゝ捨おく故ゐ道理とつけく雜とハあらぬこと鳥の古巣ハ大くさるものゆゑ其巣と名ゝる時ハ夏ゐ来ル浮巣ハ決して夏と定むべきゆゑ、巣ゝ用ゐることハ勿作ゐるべし

六月

蒜根 **本草** 葫蒜 夏月根と食ふ時ハ冬風癰面加ふることあるべし ○和俗土用入る日蒜及小豆と食すゝハ瘟疫と辟んが為ゝ

四月

佛の産湯 ふつ部 仏生会の条に出

厚朴花 **本草** 厚朴 其木質朴ゆゑ皮厚し故ゐ名づく

和漢三才図会 按ゐ厚朴葉大きゝこの八尺ゆ近し 擂の葉ゐ似ゝ刻歯あゝ色淺緑ゝ冬凋て春嫩葉を生ず 夏花を結ゝ形牡丹花ゐゝ色淺紫 大サ一尺七ゝ隨ゝ実と結ぶ冬ゝ青子ゐ似ゝ熟すゝ殼自ら裂ゝ裏赤ゝ中の子黑し 老木の皮ゐて鱗の皺ゐ剥て苦用ゐ

牡丹 **事物紀原** 隋煬帝の世始て牡丹と傳ふ 唐人も亦水芍薬と云 開元の時宮中及び民間競ゝ尚之 今品極て多し

貞享式 牡丹 杜若 この二名ハ和漢の遠ひゝ故ゝ詩ニハ牡丹を春ゝ歌ニハ杜若を春ゝ中古ゐ俳諧の加減より二名を夏ゐ用ゐ来ル 初夏ゐハ花の出る故ゝ ○木芍薬 花の王 ふゝ草 北日草 富貴艸 ようひ草 夜白艸 名取草 以上牡丹の異名 ○艸部の部ゐ出せるとゝ ○年浪草ゐハ雪御抄と引く 山橘と牡丹の異名とせるハ雲の誤を傳へしゝ ○万葉ゐ云ふ山橘ハ藪柑子のゝ 又先代旧事紀と引く 豊橘と牡丹のことゝ 此先代旧事紀ハ偽書ゆゑ専ら取用ひず 此二の名 牡丹ゐ用ふ

蠶鐸花 **本艸** 鬼臼の一種 ゆう葉数層を ゆ子 莖麻ゐて面青く背紫ゝ 細もゝ葉下ニ莖を付く 一花と結ぶ 状鈴鐸のごく倒ふゝ青白色ゐて黄蕊中空 黄ゐる実と結ぶ 風吹ば動ぐ 瓜ゐ似 自ら搖ぐ云 和産のこの形状相似ゝ異 **つくぼうこと** この草園史艸史ゐ載ス 俗ニ狐の挑灯と云もの是 莖の高さ一尺ばかり 葉ハ野車ゐ似ゝ細 白花ゐ開く 内ニ青き

彩豎ゐ三條ばうあり花無咲さくゆゑ
宝鐸ゐ似しう、江東原野ゐ多し、

杜鵑

和漢三才 啣会 杜

鵑の形ハ雀鷂ゐるゐ、色灰黑腹白し、鷹の髭あり、翅
も羽も白き斑あり、口中赤く、頭ゐ小冠毛ゐ、睦学馨色、其
前の指二ツ、連膜ゐ、後の趾二ツ諸鳥ゐ異く、季春鳴き、ほ
とんかけこうとなどとし、夏ゐ至て、最多し、初秋ゐ至て、未ゐ
む、冬月ハ深山ゐ蟄ス、○杜鵑の一名、和漢ともゐさゝぐ
多し、杜宇、子規、蜀魂、郭公、霍公鳥、姑婦、蜀魂、
不如帰、冥途鳥、四手の田長、沓手鳥、俱伎羅、謝豹、
樞鳥、時の鳥、憲し鳥、三月過鳥、細鳥、童子鳥、
賤鳥、勸農鳥、以上各頭字の部ゐ入て注ス、○杜鵑ハ
鶯の巣の中ゐ生育ゐ、古ゐ、

方兼 鶯之生卵乃中尔霍公鳥独所生而已父尔似而者不鳴已母尔似而者不鳴 下略、又

續世継物語

このこと、其時頼政哥、

ほとゝぎすの音ゐ、

わ〳〵鶯の巣ゐ生じ、

見るゐ、

兼三夏物子子

和漢

夏 任

三才啣会 俗ニ云棒ゐ、ゐ、溝泥の中、温熱相感じて小蟲
を生ず、長さ二三分、灰黑色微し、科斗の形ゐ似く、常ゐ一曲
一直し〳〵、棒と振る状のごとし、

蛍

月令 腐草化為蛍 和漢三才啣会

蛍大抵大サ三四分、黑色ゐ、両額ニ赤
点ゐ、臭気ゐり、其尻銀色の処、夜光と出ス、紙ゐ裹めゐ、亦
光り外ゐ微ゐ麥稈と用く、搗碎けバ銀砂のごとし、○窓の
蛍、蒙求 晉の車胤家貧くして常ニ油を得ず、夏月ハ
練の嚢ゐ數十の蛍火と盛く書と照らし、夜と以て日し
繼ぐ、こゝ、忘の蛍とハ、○近世、哥学家の説、俗ゐ
ほたるびとハ、漢字ゐ蛍火と書けくとゐ、
本邦古く、ほたるびとゐ、実ゐ後世の
俗言ゐ、但し和泉式部家集ゐ、用ゐる俳諧のとゐ、
要ニ、ゐれ、ゐ、漢語俗言とゐ、

猿蓑集 蛍火や吹とばされて鳴の声

五月

蒲人

金門記 午日、菖蒲を刻こ、人或ハ葫蘆諸物をつくり、茅ゐ戴く、以て邪を辟く、

火串

和漢三才啣会 新凡

和部、駆狩の条ゐ注ス、

六月

乾瓜

と用し、綴ゐ八ツゐ切劈

鰍と去り、塩ふ擦り、暑熱の石上ふ晒乾し、六七日ゝ〳〵能く乾さるゝと磁器ふ収め、用ふるとき、鹹汁を洗ひ去り、切子ぎ酒ふ浸し、て食ふ、

乾飯 引飯 同上 糯ハ乾飯ゝ糯を用ひ飯ふ煮て晒乾し、粗く磨り、頭去と去り、中芽のものと取る、夏月冷水ふ漬し、饌ゝ、奥州仙臺道明寺ふ作る最も佳し。○常に道明寺と

三夏物

蛇 蛇の種類最多し、委くハ本草ゝ詳る、多識

蟲

蛇 蔕 金蛇 古加祢、倍義 銀蛇 志ロカネ、祢倍美 水蛇 義豆、祢倍美 蝮蛇 久知、波美。○此外書つくしがたし、

五月

蛇衣脱 本草 蛇皮、蛇殼、竜子衣、ふの名あり、別録五五月十五日ゝ取ると取てふ、

蘊頌曰 南中木石の上、及び人家墻屋ふ多くゝ見あり、蛇蛻時ふ、但し不淨と着ゝバ即ち蛻く、或ハ大飽し、

紅藍花 未摘花 同上 紅藍、其花紅色、葉ハ藍ゝ似たり、故ニ藍と亦脱ゝ、

の名あり、人家の場圃ふ種る処、冬ゝ月、熟地ふ子と布く、春ふ至て苗と生ず、夏花あり、花の下ふ球蕾ゝ如して刺多し、花球上ゝ出ゝ、圃人ゝ摘と米る、米りやむゝバ復出ゝ尽るふ至て止む、梂中に実と結ぶ、白顆小豆の大サの如し、その花を曝し乾して、真紅と染、又胭脂と作る、和訓栞 紅花、初の末ゝ開く頃、次第に本ふ咲ゝ咲ふ随ゝ摘ると故ニ未摘花と云ふ、

六月

土塔會 十五日○拝加東生郡四天王寺南大門の下ふ卒塔婆の前、と塔の宮を祭る神牛頭天王ゝ古ハ毎年四月十五日大祭礼と行ふ今他領ふ移りしゆゑ、大祭礼絶ゝ、ちゝ共今ニ於て、天王寺の僧堂司ふ人催ふ仕、神事と行ふ、四月 法用、仁王経、法則、舞ふ是と土塔会、

常磐木の落葉 四時潤ざ。諸木の、新葉生じて後、古葉の落るを、年浪草、多くハ松のこと常磐木ニ寄ふ、松の落葉ハ秋と雖、裏ニハ松の外の冬木ゝ見へ泥ふ、まゝて松枯其外四時不凋の木ゝ、○

青淹や波ゝ寄る辺青松葉 芭蕉

常夏 部撫子 の条ふ注す、

時の鳥 杜鵑ゝ云、時鳥と云、字のまゝふ訓る、こゝる時の鳥ゝ云ふ、卯月ゝ見ゝ初音鳴らん 俊成 名ふ 紀貫之 東京名

通鴨 大和本草 日光山中禅寺の湖ふ真鴨ゝ住む、黒色ニ種ゝ沙黒ゝ常ふ居ゝ北ゝ帰る、○凡水鳥、秋冬ニ渡ると春月ゝ帰る、常居するものゝ中ふ鵜ふ池中ゝ常居するものゝ、芦葦の間ふ巣と営て雛と生あり

四月

糸瓜の花 秋部

こゝと通し鴨とも、

五月

桃印符 続漢書 桃印ハ本漢の制以て悪氣を止む、今の世端午ハ綵幡篆符を以て相問遺ふ、以て屍帳の間に置く、

本草 風俗通云、東陽度朔山ハ大桃あり、十里ハ蟠屈、其北ニ鬼門あり、二神是を守り、悪鬼を禦ぐ、

蟐蜋生 月令 小暑至螳蜋生

虎が雨 紀事 毎年五月廿八日多く雨ふる、俗ハ云、大磯の虎娘子、曽我祐成ハ相別る涙変じて雨と為る、故ハ今の雨ハ虎御前の涙ゝゝゝ、○虎ハ祐成討死の後尼となり、所の翁を案内者として、井手の屋形の跡、祐成の最後の跡とゝゝゝ、歎ハ「露とのみ消ヘ跡と来てみきゞ尾花がすゑハ秋ぞふく」此哥曽我物語ゝゝゝ、

照射 延部聰狩の条ハ出ス、

六月

土用 月令 中央土其日戊巳、注ニ土ハ四時ハ寄旺すゝゝ、各十八日、共ニ七十二日、此を除くゝゝハ木火金水もまた各七十二日、土四時ハ分てあらざるゝゝ、故ニ定ニ位ハ、専気ハ了く、辰戌丑未の末小寄旺ハ末の月火金の間ニ在、又一歳の中ハ居故ハ中央土一令を此ハ掲く以て五行の序とす、

土用干 むし部、虫干の条ハ出ス、

虎尾草 大和本草 虎尾艸ハ葉の如くして長く尖り、又徐長卿ハ以て蓋の長さ二尺余、夏秋白花を結ぶゝゝゝ、穂と為す、形ち獸の尾の如く、花紅白の二種あり、此ハ中華ハ所説ふ、

時計草 かつらハ似て細き蔓出、竹木ハ攀てのぼる、葉切ハ長くして葉のゝゝ、花形てつせん風車ハ似たり、朝四ツ時ハ開き暮六時萎む、その次の蒼又明日ひらく、花八日もあれども相続て盛久し、花ひらくときの様子倶倶と操るハ如く、回るゝゝゝ、駅年長崎より初来る

東陵瓜 結蒙求 邵平ハ故秦の東陵侯、秦亡びて布衣となり、家貧くして瓜と長安城の東ハ種、瓜五色あり甚美、世ハ是を東陵瓜と云、○又支那の瓜ハ東門青門等の名あり、邵平ハ故事ゝゝ、

蘭突 和漢三才会 蘭膠ハ鳥と蘭所以のものあり、其樹数種あり、深山ハあり、無大小して子を結ぶゝゝゝ、子と結ぶゝゝゝ、蘭と為て少あり、其色もろ〳〵、木葉ハ貝ハ似て薄く光沢あり、四時凋ず、

とらんとも、尺二三分落葉す、四五月細き白花を開くなり、子と結ぶ、正円なり、熟すれバ紅色、攢り生る、其木の皮を剥て水に浸し煎らるゝ、是と流水に濾し皮渣を去れバ麥芽の如くなり、甚稠粘る人用ゐる鳥雀を粘す、是を黐と云、

心太 和名抄 大凝菜、和名古留毛波、俗ニ用心太ノ字ヲ云古古ロガトト古ロブトト止○本艸 稲枝 本朝式 凝海藻 閩書 石花菜ハ海石上に生ず、性寒、夏月ニ菜と煮て凍とす、

四月 地主祭

九日 庚富記 文安四年四月九日庚午、清水地主権現祭、神輿午刻還向ス、其後獅子舞ス、田楽ホの舞ス、○雍州府志 地主、古ハ旅所白山通五条の北にあり、今石地蔵の存る所、祭日暫し神輿を経書堂の前に居、是旅所の義を表すなり、清水縁起 祭る神田村将軍の霊、清水寺の鎮守とす、

菖蒲 弘仁三年四月延鎮奏して、清水寺の鎮守とす、

薑 田圃家園に多く栽、三四月薑を起し、薑肥中空、相重りて又と多つ、四五月黄花を開く、葉毎に薑と抱へ脆し、折れバ白汁あり、葉を薑と抱へ、初て従る野菊のごとし、一花子をむすぶ、鶴蝨の子のごとし、

茶挽草 和漢三才画会 雀麥 茶挽草 田野に多のつゝ生ず、穂粒を爪の上に載れバ旋回す、故に名とす、

五月 重五 月令廣義 五

粽 菰粽、角黍、錐粽、茭粽、秤重五と云、鎚粽、九子粽、芦粽、笹粽、飴粽、飾粽、字彙 粽 粽同一名、角黍、風土記 端午に かさゝ粽、鶩を烹、筒粽を進る、一名角黍、菰の葉を以て粘米栗棗を裹み、灰を以て煮て熟す、蓋し陰陽包裹して未だ散ぜざるの象あり、月令廣義 九子粽ハ角黍、唐の時、歳節端午、粽の名甚多し、形制も一ならず、角粽、錐粽、茭粽、筒粽、秤錘粽、或ハ秤錘粽ニ或ハ百索粽、九子粽あり、続斉諧記 屈原、五月五日汨羅に投ず、楚人これを哀む、此日に至るごとに竹の筒と以て米を貯へ、水に投じて祭る、漢の建武中、長沙の歐回白昼二人と称し、自ら三閭大夫と称し、回に謂て曰、祭る所の甚し、但し蛟竜に竊まれんことを苦しむ、今もし惠まるゝ楝の葉と以て其上を塞ぎ、五綵の糸を以て之を縛る、この二物、蛟

竜の畏るゝ所なり、今の人粽とつくり、絲糸及び楝の葉と帶ぶ、蓋その遺風なり、本草 古人菰蒲の葉を以て黍米を煮、角尖にして、捲掬の葉の心の形の如し、故に粽と名づ、角黍と云、近世多く糯米と用ふ、今俗五月五日節物とす、相伝ふ、或云、屈原を祭るが為にと作りて、江に投ずと、

本朝食鑑 飴粽は糯米と用ひ、蒸熟して搗て餅となし、稲艸にて、外と稲艸と以て薄て、甑の中に蒸熟して出す、稲艸を剥さるときは、黄白の色にして、飴の色の如しと、故に名づく、味美にして、微に香あり、もつぱら粽の類、市人道喜と云者、巧にこれを造る、故に道喜粽と云、今京師の市上、専ら此粽を以て、贈送の物とす、○飾粽、かざりの粽は、天福本伊勢物語に、かざりの粽を注す、五月五日、粽といろ〳〵の糸にて結ひ、拾遺集十八の詞書に、かざりちまきに結ひ付て、今も大内にては五色の糸にて飾る粽とさゞめく、○今按に、伊勢物語、かざりちまきとある本は、かざり粽の写誤とつくるべし、此段は大和物語にも出て、かざり粽とあり、又伊勢物語大ていの本に、かざり粽とあるべし、此ていなり粽と名目は、削て去べし、塩嚢抄 粽の形は蛇に似たる、巻く、是を服して毒虫を殺すことを表す、

長命縷

續命縷、辟兵繒、五絲、絲、朱索

條達 風俗通 五月五日絲縷を以て臂に繫ぐ、鬼及び兵を辟ける人なり、瘟と病をしむ、一名長命縷、一名辟兵繒、一名五色縷、一名朱索、初学記 北人端午に雜絲を以て、合歓索と結び手の臂に纏ふ、一名條達、又條脫と云、雜物を織組て相贈遺る、及び日月星辰鳥獸の形、文繡金縷帖画を以て贈る、是本邦の糸玉に同じく、部茅玉の条通りなり、

竹醉日

九部、竹植る日の条に出す、

六月

竹生島祭

十五日 神社 故蒙 竹生島の神社は宇賀御魂神、聖武天皇天平三年辛未、竹生島の神現形す、神社考 竹生島は江州の湖中にあり、其巖石水精宝珠多し、本朝五奇異の其一なり、傳に、孝霊天皇四年、江州の地漸て湖水始て湛ふ、駿州富士山忽に出、景行天皇十年、湖中に竹生島初て涌出る、昔行基菩薩此島に来りしとき、神女現形す、行基ためて寺を建て、辯才天の像を置、紀事 例祭六月十日、四日十五日、是を法華会と云、湖上に舟を浮べ音楽を奏す、神輿の船湖上に浮ぶ、毎年正月十日、社僧の中にて頭人を撰む、

○社僧説曰、此祭八、江州浅井郡の中ゆく、豪富の人と撰て、頭人を定む、旧記に、神亀三丙寅年、天照皇太神宮、祭主廣見ゆ神勅ありて、岩倉山太神宮寺と云額と送りゆふ、札所観音と宝厳寺と云、同年六月十五日、聖武天皇、橘諸兄、房前大臣、両勅使と以て、蓮花会と修せしめ給ふ、それ今ゆ至て祭祠絶ず、毎歳頭人両人と定め、神事を司らむ、浅井郡捻式神ある故、四民共ゆ差定す、往古八、近江国中へ差定せしむ、按ずるに、この島、叡山ゆ属す、山門由緒あるの霊場なれば、近江一国ゆ預ること疑へなし、此祭八、先ず六月朔日に尊天と、頭人の家ゆ神幸し奉る、天女の新像是と、假屋に安置し、十四日迄と御旅と称す、此日島ゆ於て舞乗あり、児四人舞之、十五日新造の天女の尊像と、神輿に迎へ、還幸と催し、頭人供奉して、神輿と、早崎の一の華表へ立、供物と参詣の人ゆ施し与ふ、夫より島へ渡御、神輿船と鳥船と、金翅鳥と粧ふ故ゆ名く、笛太鼓ふく囃し、大船二艘と舫ひて、大竹ゆ五色の幣として、幕と張、神輿船を飾り、頭人夫婦供奉す、管絃船、警固船ホ、大船十艘潜列ゆく島渡ゆ、是と法華会と云、神事の法会、多く蓮花と用ふ故に名づと云、又三月三日、心経会と修す、俗に是と島繋と云、別に記す、

竹生島妙覚院登翁記

茅輪

菅貫、神社考、素盞烏尊、児童の時、牛頭天王と号す、又武塔天神と云、或時、南海の女子と通じ、日の暮ゆ会ぬ宿と路の傍ゆ借る、二人あり、兄と蘇民将来と、弟を巨旦将来と云、兄八貧しく弟八富り、神宿を巨旦ゆ乞ふ、聴ずして、宿を蘇民ゆ借る、蘇民ゆ許す、粟箕を坐として、粟飯と献ず、其後八年ゆく、神其八子と将て、蘇民が家ゆ来り、その徳と報ぜんと欲し、蘇民ゆ教へて、茅の輪と作らむ、其夜天下疫病大ゆ行り、人民死ること其数と云へば、唯蘇民が家のみ免れて、得たり、是ゆ於て、武塔天神告て曰、我八是速須佐雄能神なり、今ゆ已後、疫を起らば、必蘇民将来が子孫ゆ、茅の輪と作て、其災と脱るべし、御湯殿記

晦日、夜ゆ入て、輪ゆ入へて、チガヤみな調る、輪、入へやうのこと麻の葉と長サ一尺斗ゆ二三本紙ゆて作て、持て、左の足より入、右の足より出る、以上三度、此時の哥、和泉式部

ゆて麻の葉とさゝゆて作る孔、輪のつゝ

さゝ、輪一つとすべし、今八中と四つ、もゝ、

上と杉原ゆて包、ヒキサキゆくるゆ、七月朔日の朝、荒神河原

挂川へもてる、蔵人所、小舎人山科家紀氏調進○菅貫と茅輪も同物と加茂神事次第あり、次入菅貫之論に、菅茅を以て製し、

竹夫人

竹奴 青奴 和漢 抱篭

○名越後の条に、夏月の夜こゝを抱く涼を取 刘熙釈名 抱篭、俗に竹几、夏月の夜こゝを抱く涼を取 刘熙釈名 竹几又竹夫人、

三才図会

山谷詩 趙子充示竹夫人詩、蓋涼寢竹器、憩臂休膝、以非夫人之職、予為曰、青奴 雜談抄 和倍竹を以て篭を作る、二間ゆ、長サ五六尺、短こゝの三四尺、圓も又小こゝの時、身に抱て涼をとる、名づけて抱篭と称す、

月 龍頭太 り

い部、稲荷ふ部、仏生会の条出、

四 五 月 龍華会

祭の条に出、

月 両社祭

廿三日○江州下坂本に社あり、下坂本より唐崎に至る路傍に両社あり、南は若宮権現、北は酒井大明神、例祭五月廿三日、神輿に基遊行す、土人産土神とす、山門悦蔵坊、代々両社の事を預る、両社修造のこゝは因縁あるを以て、藝州の国主より営むなり、

六月 抹擒で

和漢三才図会 其実窪溝を、縄の痕の如し、徐く熟し、半青半紅、味ひ淡く甘し、微酸く脆く美あり、俗みな、頻婆果あり、

兼三夏物 蓴

去部、蒓菜の条に出す、

五月 鴟鴞の舌を去

零陵記 鴟鴞は人多く養之、五月五日其舌の尖りを去れば、語をよくす、色尤清越し、鸚鵡の如し、過ること

四月 大神祭

上卯 神社啟蒙 大神社、大和国城上郡に在、祭る所一座、大巳貴命 公事根源 先丑日に使を遣す、大原野の如し、此祭は冬は寅日使を遣す、其故は夏は卯日の暁、冬は夕に祭る故なり、大神とは、大三輪の神なり、大物主神の御事なり、三輪本縁は、この大物主神、活玉依姫に女のとき、夜のみ来りて、妊を懐て、その女懐妊して及びて、父母ふかしこの子なりとて、女をとがめて、神人の来りし時、糸の針を付て、衣の裾に差けしむ、その糸くりて、げに尋ねしかば、三輪山にぞ至る、

大津祭

上丑○四官神社は江州大津の四の宮にあり、

【神社啓蒙】小日枝、大日枝、氣比、小禅師、右四座同社にまします、故に四宮と云、○社説云祭る所五座、中ハ彦火々出見尊（小禅師）左ハ地主神、大国主神（大日枝）右ハ塩土老翁（日吉神）国常立尊（小日枝）氣比神（仲哀）とうとうに五社の中、彦火々出見尊を以て本社とす、故に四の宮と云、○此祭も日吉祭と日吉祭の榊伐ともいひてあり、三月中に近江一国の中より何方なくも切出して、其榊を飯室道の廣芝と云所の相生の松に立掛て置き、四月朔日の頃日吉大宮の拝殿に移す、同三日大津四宮より濱成磯成と云との、（是ハ大宮鎮座の時、粟津に居ける人にて、大宮の神にかしこく宿りを奉りて、今の山王の社地橋殿のことを告奉りし人也、粟津の神と崇む故に今に其名を仮に称して、榊迎の魁首と成り、大宮へ粟の飯を供しける人なれバ舟にて唐崎迄大宮の供奉す）今日も衣冠なして、笠鉾をさゝせ、日吉の大宮へ来り、拝殿の榊を取て帰るに、其体石の鳥居までハ無言にて、ものびやかなる体也、鳥居を越きバ取得たる形勢なして、太鼓を打、囃子をもして、八ッ柳に至る（俗に七本柳と云所）此所より舟にて大津へ着岸し、四宮の拝殿に移す、此日ゟ坂本山王祭まで、此処の神事也、申日山王祭にすゝ坂本へ榊を帰し渡すべし（其次ぎ山王祭の条にしるす）

老鶯

【枕草紙】夏秋のまで老でなに鳴くと云【十論為弁抄】（支考）あるもき、故翁のとのぶろに、此ぞで白氏文集とえて、老鶯といひ病蚕となる、此詞のおこりをたづねれバ、鶯や竹の子藪に老を啼く、さみだれや蚕わづらふ桑の畑、かく此二句とつくりて侍りしが、鶯を筍藪といひて、老若の余情もいみじくかなひて侍らん【貞享式】漢家の老鶯ての名ハ全く新撰にあられども、老鶯といふ詩に出て、或ハ狂鶯とも乱鶯ともいひて、暮春の物なれども、例に今式の加減より、残鶯ハ勿論なく、老鶯も夏の名とするさバ、鶯に老の感情ありて、風雅ハ例のさびみといひん、此名ハ衆議によるべし、

大矢数

や、部、矢数の条にみるべし、

躍草

【和漢三才図会】高さ二三尺、茎微赤色、葉小葵に似て、両々對生す、三四月葉のもとに小花をむすびて、白色に微赤ミを帯、人の笠を着て躍るに似たり、故に俗人躍花といふ、又續断を以て踊草とす、

五月 大

大原志

（北谷）【神社啓蒙】大原神社、丹後国桑田郡に在、祭る神一座、伊弉冉尊、【社家記】春秋両度の祭典ハ遠近の国郡群をなすなり、其祭儀饗を事とせず、禮姿糧を以て礼とし、謙道を天下に示すとの也、【紀事追加】世俗参詣の地向に山ありて、さくサスと云ありとせり、是ハ丹後国大原の社へ詣づるに、昔におぼろさりしと云、蚕飼を守護しまふとて、蚕飼するもの別して

崇敬すと云、三月廿三日八春さ〜とて参詣し、此時、社内の小石と申請く持帰て、飼屋の棚に置くときハ、鼠の害なしとて、この石を猫と称す、九月廿三日八秋さ〜とて、同じく参詣の時、右の石を〜納むと云〜○此祭八禮と釀して、神に供ぐ、客乃饗応と、又店家の商物を鬼百合時珍曰、卷丹、この葉山丹に似て

する故、世俗甘酒祭と云ふ、

稍長大し、紅花黄と帯く、六瓣ニして面上に黒斑の点あり、その子先結く、枝葉の間に多くこれ、是卷丹、多識篇卷丹、今俗に赤小田里

六月

大祓

公事根源 大祓〜と云八、百官こぞく朱雀門に集まりて、祓とし、仏ゝ、六月十二月二度、鮮除八鯛鐵などの時もこれ、神の天武天皇の御時かとトもの、事なり行ふこと八臨時にして常にもあるべ、この大祓八、百官一同にあつまりて、祓とするなり、又ふハ、家こゝ輪とこゝ、こゝあり、○是六月晦日、朱雀門の前耳敏川にあることなり、こゝ八百官の祓し、節折荒和の祓八天子御身の御祓なり、

大山祭

六月廿八日か江戸及いづれも六月十二月両度晦日にあるなり、近国の僧俗、相州大山石尊大権現に参詣し、初山と云、又七月盆中に登山すると盆山と云、志願あるものハ大小の木太刀と勢行て、こゝと納む、その木太刀に必大願成就の四字と書てこゝと納む、その木太刀に、

温風

月令季夏之月、温風始至 文選 朱夏振炎氣、溽暑扇温風、○朱氏曰、温風八温厚の極り、涼風八厳凝の始也、○小暑温風至、六月節也、

鷺鴨涼

水鳥の類也、及び連俳に冬季とす、さ是ども鷺鳥の類、涼しと云ときハ夏季とす、

慈姑

和漢三才会図 その苗と俗にもだ単葉の小白花を開く、○時珍曰、慈姑、一名燕尾艸と云、葉燕の尾の如く、前尖りて、後に岐あり、

沖膾

セゴと膾 貞享式 此名八俗習、或八海辺の別荘、或八船遊の時に、魚のあるこゝ〜こゝと称すれバ、決して極暑の名目なこゝ、こゝ〜例の賞玩と云べき、○青藍曰、沖こゝ漁のこゝる魚と直に醋に和して食ふと、沖膾と云、○セゴとハ、鯊の大きなるものを骨のまゝにして切こゝと、南海にこゝ、せゴ〜なまゝといふ、是ちゝ、

綿抜

更衣に布子の綿と抜去て、袷とするなり、

四月

和哥祭

十七日○祀る和哥山の神、東照宮の御祭と、一名雑賀祭と云、

元和七年紀伊頼宣卿の勧請ありし所に山鉾其外相撲流鏑馬ありし又城下の士人太刀を佩さらしを摺て躍踊となす。これを雑賀踊といふ今日神事に用の食みな蒟蒻を剃刀の如く切りて一方は常の如く味噌を用ひ一方へは大豆の粉を付るなど家ごとにこれを製す

和清天 【白氏文集】四月天気和且清 緑槐陰合沙堤平 又同詩に 孟夏清和月東都閑散官 ○和清清和ともにおなじ

若葉の花 【貞享式】古式に木の若葉は夏とあり。草の若葉は春となし。青葉は夏とすべく雑とかせるもあり。或抄には花と若葉の二所に若葉に花を結びては春とせり。夏とせしは何故に決せぬにや。今按ずるに月花は風雅二巻の飾なれば賓なるものは加減しなく四季を自由に配るべきなれば若葉に花を結びては決して夏と定むべし

若葉 **新樹** 【和哥題林抄】新樹は四方の梢青くなりて木々の色もこれ薄くなりにみえ、まだ山本もいとくらくなりて月も漏らず、村雨も音ばかりして露を落すなどよむべし

若葉の楓 【徒然草】卯月ばかりの若かへでと云【和名抄】雞冠木 加倍天乃木 赤色になる鶏頭木 加比留提乃木 今案に木の名也【和訓義解】其葉岐ありて蝦の手に似たる故かへでと略するなり

わくら葉 病葉と云、夏山に紅葉の如く赤くなりて又は黄白色なるも朽るをもいふなり

綿蒔 【和漢三才図会】相傳ふ往昔蚕綿の外は穀木をもて衣服とす是を木綿といふ中古に草綿始ることは本朝桓武の朝也即ち類聚国史に載る中華は宋の末中華に先だつこと九二百年ばかりと云 此れの種を下すこと早晩あり早きものは八十八夜以後麦苗の際におりてこれを撒し晩きものは四月麦を苅て株の傍を攪てこれをまく大底枝葉花黄蜀葵に似たり花は六月の節へ

五月

早瓜供 【延喜内膳式】五月五日山科の園早瓜一棒を進る若実のなりしは花根と献ず

若苗 大部田植の余りたるなし

若竹 この部今年竹の条に見るべし

忘草 萱艸とも云く部にてみるべし

和布苅 【和漢三才図会】石蓴海藻、和名逆米、俗に和布の字を用ゆ今云和加米、麁布に対してこれを弱布と云【本草】南海に生ず石に附て生ず紫苔に似たり色青し桜るに今云和布也○海人鎌を以

六月

綿花

[和漢三才畫会] 四月種と下す、草弱く蔓の如し、高さ一丈の四五尺葉に三尖あり、楓の葉の如し、秋に入て花を開く、葵の花の如くしく小し、紅紫のものあり、実と結ぶ、○此の種と下すに早晩あり、花も又同じ、夏の末に花開くものあり、大底黄芎葵に似て浅黄色に、四月綿とくの条見へ

月堅田祭

上巳日○或説に祭の日上の巳祭う神詳あらず、淡海志に、堅田むりに柳田の庄下云、又開が演ふも云、北と今堅田と云、出来島、この地伊豆の三島の風景に似る故、伊豆権現と勧請すと云れば伊豆権現の祭あるべし、今土人もこれを云ふ、今土人本居神もこれを云ふ、今土人本居神もこれを云ふ、天文六酉年九月廿五日、江州観音山の城主、衣川に勧請せし天神の社是に、四月子の日祭あらし、今上巳日に祭る所也、神田明神に堅田の城主一代江戸に誕生す、故に神田明神を此所に勧請さるか、

戒壇堂開帳

花摘 ○江州比叡山に、八日

[帝王編年記] 弘仁十三年六月、参議左大弁藤家業戒壇堂を建ごとし、宣旨と帯く登山す、傳教喜悦ふ〻ず、閏六月十一日殊に勅詔を下して創て戒壇と築、十四年四月十四日、修禅和尚義真、始て受戒と行ふ云〻

[紀事] 四月八日諸人参詣、女人も常に叡山に登ることを禁ず、今日許〻に東坂本の花摘の社に詣し、こと〻と花摘と云、花堂と作て小釈迦の銅像を安置す、○此に於て傳教大師の御母堂、妙徳婦人と祭るとて、婦人存生の時、大師御對面の為此処に登山し、今日女人の参詣とゆるす、此遺意とて、

賀茂祭

葵祭、御形日、

[公事根源] 来日、先上卿陣に着く、六府とめ〻〻警固のことく御す、当日、使は近衛の中将つとむ、昔夢の御告に、桂の髪髪と云〻、賀茂松尾の社司、前の日参ること所〻〻〻〻、欽明天皇の御宇より、此祭は下鴨の御祖、上賀茂の別雷二の神祭、この御祖とは玉依姫とす、賀茂の建角身命の女、ある時、せゝの小川のほとりに川上り丹塗の矢一すぢあり、是下る、玉依姫この矢を取て我家の屋根に〻〻〻て程なくして懐妊して、男子どもむ、もし父とせんもしらずと、或ときに酒をもりて、今の児に盃とすゝめ、世々父あるべしとて、児その盃

葵桂、諸髪、中酉日之酉一アレバ下酉日

警固のことく御す、当

とバ虚空にあげらく、我ハ天神の御子なりとて、天上とのぼりてのがれける、則別雷の命是也、いまの丹塗の矢ハ松尾明神と、後にあらハれ給ふとかや、[紀事]上賀茂中酉日、葵祭、貴船もおなじ、修之、酉の前午日、西賀茂黄衣のもの、榊を伐り、松に並らく、御生所の假宮并斎宮の幄の垂、及び大宮假宮と構ふ、黄衣五十人ばかり結番とあし、未ノ日假宮迁宮、申ノ日古ハ関白詣あり、當日音楽あり、翌日社司葵鬘并桂枝と、禁裡仙洞及び高貴の家に献ズ、則御簾に懸く賀茂地人悉く門戸に掛く、むかしよりきたるハ夏天霹靂の災を避く、祭の日、官家の人おのおの葵桂と衣領にかざらる、賀茂の地人各これを頭髪に挿む、今日葵鬘桂枝、これを諸鬘と称ス、葵ハ静原より取来り、桂ハ松尾より伐来る、凡葵ハ當社の神草なり、桂ハ日吉神木也と云、[illegible]御生とハ玉依姫の別雷命を産のふ日と云儀にて、実ハ申ノ日生れ給ひ、酉ノ日ハ神の生れのふを祝奉る儀なりとも云、御形祭御影祭と、同祭なりと云人あり、別の祭也、御影祭ハ三日以前午ノ日にあり、御影社ハ、洛北高野川の東、御蔭山に社あり、即ち下鴨の末社也、[康富記]嘉吉三年四月廿一日丙午、鴨御蔭山祭也と云てき酉ノ日にあらず、

午の日之別祭となるべし、[河海抄]賀茂祭の前日斎院の石上に於て神事を御形と号ス、今本宮の北一町ばかりに在て御旅所也、道の西に御みあり、是を御生所の館と云、祭の日假殿との所に建る

神祭

忌さす

榊取

榊さす

是加茂祭ともいへ○或説に云、抑出して祭ふなり云ハ加茂祭のこと也、加茂によりて無名の祭と夏にす、故に祭に加茂連寄に付合せ嫌あり[貞享式][illegible]四季に用らるものハ祭と鷹の類なりといへつまたハ其季の名目とるべし、四季の差別を知せへなりさまざど、祭の一字にても御祭といへバ秋なり、御祭とのみいへバ冬にあらんなりとく諸社の臨時の如きハ名目ありてとまず季をもとめらんかなし、つべし、祭の用ひ、貴賤にかかハらず、寒暑によらず、礼をいたし知に通ぜ、節供節日の式なりとも、俳諧にハ多用あるべき是らハ一世の衆議に及バず、其時其句の季あるべきと決して四季に用べし、中暮祭ならび鷹と云類ハ一句によりてすることハ夏と冬との名目なく今式とこしも其通也、○忌さす[荻枝折]卯月の忌さすとハ、賀茂の神事なれバ竹ましと祭て、春の帰ると先まさ心にかかる、神事におもむる人暑とるる、松竹なども忌めもかりて門にしこれをりかかるべし、○榊取[後拾遺]榊とる卯

月みるまゝに神山のあらの墨ぐろ　貞好草　和漢三才画会　苟葉の一名
をしらぬもあり、神山八賀茂の神山
花の容姿約なる故ゆ、和俗、貞好草と名づく、　垣見草　卯花の異名　蔵玉　時鳥
こゝぐゝ花咲ゆ　要の花　和漢三才画会　扇骨木、高サ二三丈、葉ハ海石榴の葉の似て狹く
小〻、細なる鋸歯あり、白滑しく、四月小白花を開く、細子
と結び殺とあり、八九月赤く熟ス、其木最も堅く扇骨と
するゆゑ堪ふ、故ゆ名づく、　柳の花　猿蓑集　注、秋の初部ゆく〻ぐ、洗濯や衣ゆとゝ迄　材の花　蕣之
燕子花　和漢三才画会　燕子花、其葉白菖ゆ似て
大〻、色深く、其花実ともゆ白菖ゆ似て肥大
なり、紫色を正とす、近ごろ戎紅なるゝとの白色なるものと出ス、多
変種ゝ、五月と盛とす、又四時ゆ花と称ゝくるものゝ、参加ハツ橋の
産、名と得たり、○貞ら花　蔵玉　ものゝ多き中ゆ
花ゆ袖ゆとゝ紫ゆる、○貞花　仙覚万葉抄　卯花ハ杜若ゝ、
丸鳥の啼とき咲ハ卯花ゆ、万葉ニ貞花とあるハ、ゝ
とゝ定めがたし、姑く仙覚の説ゝ載之○かゝるゝ

杜若の字と用ゆ、実ハ誤ゝ、杜若ハヤブカンゾウ、燕子花
と書ゝ、又和名抄ハ鳳草とゝ、　風車の花　花彙　纏枝牡丹、蔓艸、葉莖鉄線の類ゝ、花ハ
色あゝ、三四月　かんこ鳥　和漢三才画会　加豆古宇鳥、
花と紅ゝ、　正字未詳、疑ゝハ是郭公
あゝ、狀ハ杜鵑及び虫食鳥ゆ似ゝ、微赤色と帯ひ、腹白
くしく黒斑あゝ、脚の指も亦二ツ前二ツ後ゝ、偽ゝ杜鵑と
あゝ、責之、仲夏の後声あり、秋後色とゝ、其色大ゆく
円亮、加豆古宇とゝ、毎山林ゆとゝて人家ゆ近
づく、○真淵翁ハ俗ニ云かんこ鳥ハ、喚子鳥　月令　蠶蛹　孟夏
の字音ゝ唱ヘ誤ゝ、
月、蠶事畢后妃獻繭　和漢三才画会　繭を作らんと
すゝ、蔑簾を用ゆ、棚とす、こゝ多ふ放つふ素と食ひし
く、身白色ニ透明、その繭を擇取ゝ、櫓の中ゆ投ス、先ヅ
稍あひ、枯菁草と用ゆ、蜷ぶふ内ゝ、蚕の寓居ゝ、
数千の蚕ものゝ〻ものと作て蠶るゝ、○原蚕　周礼註ニ、
原ハ再也、○一名晩蚕、ゝ、二番蚕ゝ、春部ゆ生ゝ、

○蚕簿、え　蟹類之、今人以て食

部ゐ注せり、

蟹子

羅須斎経　品とす、隹味之、　和漢三才斎会

擁劔蟹ハ江海ニ生ず、大なるもの味美く、塩水を以て煮熟する時ハ、純赤色ゐ変ス甲と脱し〳〵白肉と取り食ふ、其黄なるもの最甘美ス、山易和易溪澗ゐ有之、十月丑日毎ニ必群出ス、土人其日と候ひ多く捕ふ、亦一異ス、　大和本草　蝦魁

領表録云、前両脚大ゐ人の指の如し、長尺余、上ニ芒刺あり、鉦くして手と砍、鰐〳〵す、　和名抄　擁劔、和名加散

多識篇　蟹

蜂、加佐美

兼三夏物　翡翠

時珍曰、大さ燕の如く、啄尖りて長し、足紅ふして短し、背の色翠色、碧と帯ぶ、翅毛黒色、青と揚らり、女人の首物と飾る、　和漢三才斎会　鳩、俗云

川世比　形小く、池川ゐ在る奥と捕る、翡翠、俗云山世比　形大く山溪ゐ在る魚と捕、世比と、ハ、虫微の假名相通ずるなり、其穴ゐ窠つくる、横ニ入ること一尺もの、其中ニ雛す、　庖厨本草

鳩、和名曽比、○此鳥、魚と害する故ニ、鳩天狗、水狗、魚虎、魚師、

多識篇　蟹、加仁比志古　和漢三才斎会

の名あるなり、

解蟹

蟹ハ塩蔵のものを、　三代実録　元慶三年正月三日癸酉、摂津国、蟹脊、陸奥国、鹿腊以て贄と為す、御膳ニ奉ること有りしなり、

蚊

蚊　社　事文類聚

後集　秦ハ、ろきと、蚋よりハ、蟹ハ夏と、蚊ニ云、或云、蚊ハ文也、人の肌膚ゐ文まるの義ス、○時珍曰、木の葉及び爛灰の中ニ生じ、子と水中ゐ産ス、子多く虫と為る、仍て変じて蚊と為る、　五元集　蚊柱ゐ蟲の浮橋かゝるなり　其角

月令廣義　蚊、蠶の骨と煙ゐ焼けバ蚊と祛ぐ〳〵、又浮萍、羌活、諸魚の骨と煙ゐ焼けバ蚊と祛ぐ〳〵、又浮萍、羌活、同く焼く、○拙と追ハらふと遣ス、鬼ゐ同じ、　詞、さるきバ蚊やらふ　活用〳〵

蚊遣火　又蚊火云、

蝸牛

紀事　此月より五月ニ至る　霖雨　ある時ハ、蝸牛多く生じ、或ハ床ゐ登り、又壁ゐ黏く、高く登る時ハ、其涎隨て落ち、其貝ゐ有りて、人と見ること、蝸縮ス、児童聚りて出出虫と云ふ、出ざるときハ釜と打破らむと云ふ、此虫の貝と、俗ニ釜と称ス、　夫木　牛の子ゐふ

ふねとべの蝸牛、角あるきバとて身と乱たのゝそ　寂蓮、　五元集　文七ゐふまるゝ乱庭のゝつぶり　其角、○文七ハ髻結師ゐ、

蝙蝠 時珍曰、蝙蝠、肩人呼て仙鼠と云、形鼠に似て、灰黑色、薄き肉翅あり、四足及び尾に連合て一のごとし、夏生て冬蟄す、日に伏し夜に飛て、蚊蛤を食ふ、自生育す、○又紙扇とかはぶりとも云、

幬 玄 説文 **幬**ハ帳也

荊葱 本朝食鑑 久葱春葱の二種あり、春葱ハ初生て針の如し、俗に羹に煮て食ふ、醋味噌に和すること、ハなはだ美なり、

五月

賀茂の足揃 朔日 紀事 五月朔日旧例に依て、京兆尹、馬一疋を出さる、其外武家、願ひあるの人も亦假て、其騎者上賀茂の氏人歩きとの、壮年の人と撰びて、各禄をのふ、又端午の日、騎ることのとの、壮年の人、どえびて、各禄どのふ、凡馬負壮疋、騎者ハ烏帽子浄衣を着す、社司各埒の外に坐、先一人毎に馬に乗り、馳駆して、その遅速を考ふ、執筆をして是とする、さて、後馬の遅速同じくば、則二人をして乗らしむ、故に足掛とは、いそゆる荒手結、馬場に本来樹あり、この内に於て勝負を決せ、撰見のこの鐘を撃て、執筆これを記、この樹を勝負の木と云、馬場の木、勝負の木の南に攫あり、是を出馬の木と云、又其次に一株あり、是を三鞭木と称す、騎人て、互に声を揚げ鞭を挙ぐ、見物の貴賤群集して、埒の外に並居る、

艾虎、艾人 蒲人 天師を畫 荆楚歳時記 艾虎、艾を以て虎の形をつくり、或ハ絲を剪て小虎を作り、以て艾の葉に帖て、内人争て是を相戴く、○ 月上 五月五日、人ふる百草を竭て艾を採り、人を作り、戸上に懸て以て毒気を禳ふ、○蒲人 金門記 午日菖蒲と刻て人或ハ葫蘆諸物をつくり、并に戴て以て邪を倖く、○画天師 歳時雑記 端午に都人、天師を画て以て賣る、又泥塑天師を作り、艾を以て髪とし、蒜を以て拳とし、門上に置て邪を辟く、

飾冑 幟 和漢三才図会 五月五日、家毎に幟及び甲冑に武の兵器を立、俗呼て冑人形と云、其時記に、艾をとり人をつくり、門上にかけて毒気を禳ふと、是冑人形と趣相似たり、相傳に、光仁天皇天應元年、蒙古の賊来る、早良親王をして之を討しむ、親王、勝社の社に幣を出て陣したまふ時、五月五日、忽ち神風吹て敵船を覆し、立どころに皆敗走す、戦ひ勝て、此因縁を以て今に至る、

五月五日の祭に武兵器を用ふ民家も又もろ〻藤森社八山州
他伊郡に舎人親王の祠を弓矢政所と称す是く蓋其てら蒙
古の襲来ることゝ国史にみえ、

○藤森社祭の条見合すべし、

撫餅 歳事拾遺 五月五日米の粉をこね編笠の形の如し撫の
稲て泥こめ中に餡と入く合すること
葉と以くつゝ蒸しゝまこと撫餅ゝ鐵内こ入てこの用ひ
ゆうあり、

賀茂競馬 五日 詞林采葉 或記云祭初の日に
馬に乗る人志貴島の宮欽明
天皇の御宇天下世挙て風吹雨零時に卜部伊吉若日
子命に勅して卜ハしむ乃チ卜ひて奏すく賀茂の神の
祟と仍て四月吉日をえらび馬に鈴とつけ人猪影と蒙
りて駈馳て以て祭祀をなすべし能祷祀せば因て五穀成
就天下豊年に乗馬する始まる 注進略記 五月五日の競
馬八七十二代堀川院寛治七年五穀成就天下泰平のため
えらびて十番廿疋の馬料を寄らる例年是と行ふ終
紀事 この日音楽あり午の時競馬あり近衛院康治年中
始て行はる古へ其始八臨時の執行く後世五月五日式日と
あしみや古へ諸社毎に多く競馬あ今漸く絶て存する

処のこの稀に当社競馬の料ある故に今に至て断絶せず人
今日乗る処の人人北人各冠の纓を巻き縷を付け左の方八
赤袍を着し右の方八黒袍を着て各南の一の鳥居の外に
於て馬に乗り馬場の末より馬場本に至て先一番
ともびひ左右一疋毎に馳す是を空走とゝその後各お
らく馳て遅速を争ひ勝負を決す古へいはゆる真手結
あり 支昌雅録 軍中端午を踏抑と云 和漢三才図会
馬を走ることを用の衣九帷子と名づく端午に着る浅黄色を用ふ
七夕八閑に白帷子を用ふ近代に殘入の通例に按和名抄帷
和名加太比良

鹿子百合 花律 白花紫点あり其花横に向て開く
紫点あるゆゑに鹿子百合と名づく
河原撫子、唐撫子 本草 部瞿麥 葉に芋に似て厚く光あり莖つゝ水上にうちのびる葉も
水面に浮び根大に夏月黄花を開き秋の末迄咲一莖一花
とゝのゝ賞 蘇頌嘉祐 酸醬草嫩時小児喜て食之初て○時珍曰一名
すゝめる堪とす

酢漿草花

夏 か

酸母此三葉酸し、其味ハ醋のごとし、苗高さ一二寸、叢生して地ふ布く、極く繁衍すし、一枝三葉両尖、晩ゆ至りて自ら合帖(がつてふ)し、整(ととのは)ること〻一の如し、四月ハ黄花を開き小角を結ぶ長さ一二分内に細子あり、冬も亦凋まず、

蚊幬釣草

和漢三才画会 桑穂

ともゆ績根草ハ異あることなし、但し根細き髭のごとく子あり、引ハ抜ヤすし、其莖二稜を小児中間と裂て引擴げ、以て かるの蚊帳を釣ハ比し〻戯るす、蓋し香附子艸の雄、

輕鳧子、鴨の子

本朝食鑑 車鴨、輕鴨、芦鴨、この三ハ四五月ハ至りてあやさしぶ、或ハ秋去り冬来り、或ハ夏秋さしずきく、歳ごとるるもあり、ともゆ野水田溝もあり、或ハ夏秋さしずきく、歳ごとるるもあり、ともゆ野水田溝ふ栖て、或ハ孕ミ、或ハ孕ざるもあり、〇凡鴨の子、初生其毛黄白色、卵と出るごとく水上に游ぶ、藻塩草 かりの子ハ、鴨のかひでく、御今 古哥ハかりの子ともよまるハ、雁ゑハあ〻ず、鴨の子のことなり、

鹿の子

紀事 毎年五月の時節、南都春日山に麋鹿の子漸く成長す、

ゑるごとく足らず、鹿子市ゆある若狂犬ある時ハ、噛てゆくことを免ハ死ゆ至る、この故ゆこの節、興福寺の下僧又町奉行の小吏相随ひ、市中と徑廻り、若顔犬あるバ、ゑるごとく、その脚の筋と断く、其犬をして、横行せしむ、

六月

掛鯛おろす

朝日〇春部の掛鯛の条注ス

嘉定喰

世諺問答 六月十六日嘉祥ハ、仁

吉始定銭、かつ〻、

〇十六日 明天皇二年六月十六日、豊後国ゆ白亀を献ず、以て吉兆とす〻、祝之、是かてのごと嘉祥の伐を、このことを更ゆ本説ゆ、只彼銭の銘ゆ嘉定通宝とすれバ、勝ゑ名詮を賞翫すべし、〇長明四季物語 仁明帝義和のころ、御代の衆ゑを祈らせ給ハ、賀茂の上の社ゆ奉て、御祓を修し、六月十日ハ六日あん吉日ゑ、御占の人〻考申上ゑ、其日行ゑ、年号を嘉祥と改元ゑ、社司の日記に、〇一説に嘉定喰ゑ、ゑ、ゑ、ゑ、ゑ、室町殿の大樹のゑ、六月納涼の遊びゆ、揚弓と射ゆ、賭として、まゑ〻たくゑの嘉定通宝の銭十六銅を出して、何ゆ〻ゆ喰物と買、ゑ〻ゑ〻ゑのことゑ〻、故に嘉定食と号せゑ〻、此銭ハ宋の寧宗の年号ゑて、十七年ゑ、其年毎に鋳させゑ銭元年より十六年迄の印あると擬て、其

日のまさ取しその代ゟ定まりぬらし、御湯殿記ニ女房詞ゟよく
かつうとらつうしさえとうゟ、かつうしましハ、嘉定通宝を中略して
のことなり、紀事 今日公家武家同じく嘉定の祝義とし、所謂
嘉定通宝十六枚を以て食物をかひことを服されバ其家ゟ
福ありとハ、故ニ今ニ至て其例ゟならふ、又嘉通と、勝の和語相近
し、故ニ武家吉兆銭とす、此日五色の饅頭并ニ諸品を土器
二枚ゟ盛て、各白紙を以て裹之、水引を以て結之、群臣ゟ
たまふゟの儀なし、是十六銭を以て求得るの遺意也、諸家も又
此儀あり、或ハ孔方兄十六枚、或ハ米一升六合、家臣ゟあたふ、つまさ
を以て雑品諸物をとゝのへてまさと献ず、又土器ゟ杉の葉をしき
き、其上ニ大饅頭三ツを盛り、杉原紙を以て是を包み、凡物
毎ニ十六の数を用ふ、今夜諸家の中、十六歳の人、振袖を切
て詰袖とし、是を月見といふ、その式ハ土器ゟもる処の大饅
頭の真中ニ穴をうがち、其穴より月光をみる、是今宵袖
をとむる
の式也、

上難波御祓

摂州東生郡大坂 高津の宮ニ
ま、此社ハ生玉の北ゟあり、祭
神比賣古曽の神、本名ハ下照姫命、大国主命女 天稚彦命妻 始て天の磐
船ゟのりて地ゟ降りたまふ、高津ニ始む 其船祠など、磐船大明神と号す、

仁徳帝、都とまふ近し、高津宮と号しかば当社神傳紛
失ス、当社を仁徳天皇の宮とするハ非也、社司木津川ゟ出て
禊を
修す、

賀茂六月能

晦日 紀事 六月晦日の夜、上賀茂
の神事、音楽あり、祓を修す、地ハ
各茅の輪と脱出ス、又枯麻の條を以て、木偶人を作り、是を
川水ニ撤ス、今日六月の能、丹波矢田太夫これをつとむ、これを
御手代会と云、社司真家氏十ケ酒錫一双、楽屋ニおくる、
よきて始る是旧例也、此能一番役者七人なるゆへ、其藝を
つとむ、故ニ世ニ七人猿楽といふ、神事次第 六月廿九日小月廿八日
御手代会、兼日仮幄を儲、夜遊神前ゟおいて乱舞、中古ゟ
猿楽女田楽の風流あり、○今宵名越の神事をとりおこな
社司神人おのおの是を修し、後陰し、菅貫の輪に入る、これ

唐崎祭

晦日 淡海志 唐崎大明神ハ女別当 山王大宮初
願の地也、紀事 相傳ふ、此神日吉の末社也といへ
社家樹下生源寺の祖神也、一説ニハ是住吉明神なりといふ、天智天
皇の御宇六月祓を修せし処也、今日参詣、平日の千度あるさ
る、故ゟ千日参と称す、祈願ある人ハ
木を以て小鳥居を作り、社ゟ供ず、

形代

撫物

[狀日本紀] 人形ハ所謂素盞烏尊の鹽鰐手足の爪を拔其罪と贖ふ身の代の義、[神祇式] 大祓御贖物鐵人形二枚、○形代ハ人形ゝ撫物ゝゝハ人形と撫こ吾身ゝ[illegible]の災殃を移ーゝく流もとのゝ贖物ハ罪を贖ふもの[illegible]

則人形のごゝし、

川社

[式部] 夏神楽の条に出、

雷鳴陣

[西宮抄] 六月雷鳴陣、大声三度以上、大将以下帯弓箭候御前、孫庇額間、左右兵衛立南庭、敷雷鳴御座、鳴盛時分陣遣右殿、外衛督佐候殿上者、帯弓箭、簾中候解陣、

風薰

[唐太宗詩] 薰風日南来、殿閣生微涼、[呂氏春秋] 東南之風曰薰風、

掛香

薰衣香

[礼記内則] 衿帶皆佩容臭、[註] 容臭ハ香物也、形容の飾と助ス、故容臭と云、櫻と云こゝと佩ぶ、後世の香囊即ち其遺制ゝ、[源氏梅枝] くのゝ[illegible]の[illegible]ハ[illegible]又百歩香[illegible]方あるゝ、[花鳥余情] 百歩の方ゝゝハ凡香気の遠く聞ゆゝども、百歩と云べゝ、○薰衣香、名黒方、ゝゝ薰衣香もたきもの方より出ゝ[illegible]ゝ、俗に白い袋と云其方数種あり、[紀事] 五月禁裡より白袋と諸家ゝ[illegible]、是夏日汗穢の臭気を除んが為ゝ、[雍州府志] 懸香ハ香剤各兼抹ゝく調合ス、各軽重多少の謂也、ゝゝと滚合ーて[illegible]盛り、俗の両角に緒と着て衣の領に繫、

川狩

[紀事] 此月賀茂川、高野川ハ瀬川、嵯峨大井川、梅津桂川、吉祥院村、鳥羽、淀川、宇治川、所ゝみて良賤川狩ス、押網、或ハ扇網と以く、抵之、或ハ簗を設ス夜入ゝく炬と燃ー、魚と驚ーて抵之、是と夜振ゝ云、或ハ鵜と放ゝく執之、是と鵜川ゝ云、[illegible]川狩ゝ云、

射干

時珍曰、射干、其葉最生ー、横に鋪ゝて一面、鳥の翅及び扇の形の如ー、鳥扇、烏翣ホの名ゝ、[介雅翼] 射干春生ズ苗の高ゝ二三尺、葉蚕蚕ホ似ゝく狹く長ー横ホ張ゝて翅羽の形のごゝし、葉中莖と抽ゝく、萱艸ホ似ゝて強く硬ー、六月花と結ゝく、黄紅色、瓣上ホ細文あり、秋実と結び房となス、中子黑色、根鬚多ー、

干瓢剥

[和漢三才図会] 乾瓢、土用の中ゝ[illegible]ゝる、横ホ切ゝ、皮おゝび瓢を去り、白肉と用ゝく、薄く剥ゝ連ゝ[illegible]ゝ一二丈、紙紐のごゝし、架ホ[illegible]ゝく晒乾す、ゝゝ両ゝ連ふゝゝゝゝ色と変ゝゝ佳あゝず、

眼皮

同上 眼皮と剪羅と一類異種、春苗と生び、柔うして、吉縁の葉、剪羅より厚くして、円く尖る、六七月花を開く、剪羅花に似て、刻歯浅く、其色肉赤色、俗説云、達磨大師九年面壁の時、眠らざらんことを欲し、自ら上下の眶を剪りて、地に棄てしと、此草と生ず、其花肉赤色にして、眶に似たり、肉を眼皮と名く、

楮花 紙漉草

時珍曰、楮、杵を作る、其皮績ぎて紵とすべきの故なり、按に、許慎説文曰、楮穀、乃ち一種にして、雌雄と共に生ずるなり、雄は皮班なり、葉に捶あり、三月花を開く、柳花のごとし、実を結ぶ、揚花なし、雌は皮白くして葉捶又なし、碎花を開く、実を結ぶ、揚梅のごとし、南人皮を剥ぎ持きて煮て紙を作る、又緝練して布とす、堅韌なり、朽ちず、

和漢三才画会 楮皮今多く紙に造る、○楮は、時珍が説の如く、三月花あり、六月の説なし、故に雑説、抄に、花と云へるは楮とは、別なり、季子、紙は常に漉く、季子、殊に夏漉は紙臭気ありて下品なり、楮も種類あり、大和本艸に、山楮、一名ガンピ、又山カゴと云、其木も皮も櫻に似て、葉は桑に似て小さく、四月に葉と生じ、枝長く高数尺に過ぎず、深山中に花は桑の花に似て黄色、夏の末に咲く、その皮を剥ぎて、楮の如く水に煮て紙を漉くこと、以之夏とす、

蒲の穂

和漢三才画会 香蒲の花の状、頗る鉾に似たり、故に蒲鉾と云、又蝋燭に似たり、

和名抄 芧、和名加良毎之、

○あ、部麻の条に委し、

芧 韓

是香蒲の穂なり、

瓜

甜瓜に似て大きく、皮に斑あり、味劣る、通俗志に、熟瓜と訓ず、

四月

浴佛

ふ部、仏生会の条に出ず、

吉田祭 中子

延元年十一月廿五日中の申、今年始て祭礼、誓願寺にて、公家の御沙汰と云、

江次第 四月中の子、十一月中の申、裏書に吉田祭永延元年始之、山蔭中納言一家、これを祭る、○吉田乃春日八中納言山蔭卿の建立、祭日、幣帛使、内侍の使に立つ、倭舞、

餘花

次第に変し、

題林抄 余花は春の終りに、山深き所に、独咲くことを云、

夏の来るを、ちらしめぐる、青葉の中に咲るなり、

よろひ草 牡丹

きんぎょ

夜白艸の異言なり、

夜白

九 社註式或人曰、六十六代一條院永

草

[開元遺事] 明皇沈香亭の前の牡丹、一枝二朶、朝ハ深碧、暮ハ深黄、夜ハ彩白なり、香艶各異、帝曰、こゝ花木の妖なり、楊国忠なる小人、百金を以て買て、○天津人今やぐらを詠むもこれなり

芦原雀、葭剖き部の条をてらべし

[歳時記] 端午ハ菖蒲と刻み、小人子或ハ葫蘆のごとくつくりて、これを帯ぶれバ邪を辟く

[荆楚歳時記] 五月五日雞いまだ鳴ざる時、艾の人の形を作るものを採て悉く取収て、病を灸す、甚験あり、○是らの記より屋檐にも菖蒲を懸る

五月

蓬菖

六月

吉野の蛙飛 九日 當山の蓮花会 吉野郡の内、蓮池と云処より、毎年蓮花を蔵王権現へ奉る、その花を管に植て輦を作り、九日の旦旦ハ神輿を舁ぎ出して山中を持わたり、つゝがなく在家のその子供ハ母衣を負て物と渡す、夜に入て、當山の僧徒、蔵王堂の前にて行法あり、其刻下づゝのものハ、蛙の形を作らせ、堂の後ハ入れ、その形典に蝦蟇のごとく、行法をなして、その僧四人拾扇にて

先の蛙とよ孤けバ、堂後より飛出て、四人の僧の膝をとゝめぐり飛ぶ、是を強く祈て責る事、次第ハせめ来て、堂内を廻るとくと、終に祈て殺す、其後ハ被ハせて堂外へ舁出し、湯水をかけ、ようやく蘇生すと云、

節折

晦日 [公事根源] 竹の節を庭中席の上に置く、節折の余婦、竹をもて参て、御けをとゝめて、灰この寸法をとり、果て官主ハ取て、御祓をつとむる、なり、なをこれを二度あて、二度まで禄をとる、これハ主上の御けがの寸法をとり、其程をうあるべきよをとゝ節折の節ハ竹のよし、和名抄両節間俗云世○是即ち荒和祓の御贖物なり、

七月

多賀祭 二ノ午 [社説] 江家次第上郡、多賀の大社ハ伊弉諾尊、本地ハ毎量寿仏、鏡座年歴詳ならず、例祭四月二ノ午日、祭祀當日、神輿本宮より民の方一里ばかり小栗栖村の大宮所へ渡御、供奉行装、鉾士二本、神馬三疋、祢宜四人、神子二人、随身六人、神主三人、馬上其外氏子村ごとに種々の造花を出す、凡六十本ばかり、遂物八年に思ふ所なきをば定

らず、神輿三基渡御、坤の方、賓墓の社まで、大社の御使ら

て殿一人健児一人奏向、行列先途掛十二人、すつて六人黄
の直垂三十人、調度懸六人、神事の發言は彦根の城主より八
物頭二人つきと出さる、[雑談抄]此ことの頭人を定る、八正月三日
より氏子の中豪富のものを撰みて、夜に入て神慮をとひて定む、其頭にあたる家に神官榊を立る、其頭人神供米
幾許ことごとく捧ぐ、祭の日四位に準じて、衣冠を着し社
へ参詣、一族一門風流と尽して送りぶる、

當麻祭 上申 ○俗にたへまと云 ○大和国葛下郡當麻都比古社二座、磨子王子命、比賣命、

龍田祭 ひ部 廣瀬

[公事根源]大和国に侍る社也、午日使をたつ、祭の条に見へたり、

鷹の塒入

[和漢三才圖会]四月羽毛を易んとするとき、韋緡を解去て、鳥屋の内に放つ、餌食意に任す、日を逐て脱落る、さて新毛を生じて、七月中旬に舊のごとし○片鳥屋 初年 両片鶴 二歳

[鷹百首抄]四月八日鷹を鳥屋へ入て、毛をかへさするなり、此時羽虫の業を飼く、さて又餌をとを飼く、是をこそ札飼と云ぐ、或ハ鳥屋踏、鳥屋でせう、鳥屋鷹、毛をかふる鷹などいふ、夏へ又むろ山、どろ板あれば、皆此時のうちなり、夏あるべし[同三百首抄]鳥屋へ入るとて、動氣の業と羽虫の業に飼之、此業ハ榎木の朕になする水とどうけの業に用るへ、其水取て置べきやうあくて、紙にむくして置て後に用の時、わらぞうして、つるべ竹のとぐひに溜る水も同じにむと、小壷の水と云○ひむろ山とハ同抄に云、むし鳥屋とて土にて塗まわしたると、氷室山と云、其中へ樋とうけて水と入るくを下行水と云、○どろ板 同抄に、鳥屋の内に水と流しく、古き飼を洗ひあぐさんためなり、

盧橘

[日本紀]垂仁帝九十年の春、田道間守に命じて、常世の国へつかはし、非時の香果を求しむ、今橘と云是也、同九十九年の春、非時の香果八竿八縵を得て還来る、[本草]樹の高さ丈余、其葉両頭に尖りて、緑色光面、四月小花を開く、色白く甚香ばし[古今]五月まつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする、○古へ賞ぜしところの橘、其種詳ならず、源氏物語、枕草子などにも、花も実も共に具してよめり、去年の実の今年花さくまで落ずして、黄熟しけるより、漢土にても、橘の種類あまたありて八説あるを、よくみて○かれこれかもかもよくよくあそて、只橘とのみ

ひるくも、夕の云、夏もゞ、

猶春の花部、橘の条、僥せ、

抄 王ゝく葛と八、葛ゞの丸王のやうに巻まもくれべいゆも、

萩枝折 葛の手と巻ゝと、王ゝく葛とられ

王巻芭蕉

時珍曰、蕉葉と落さず、一葉舒ゝ巻八、一葉枯る故ゆゑと蕉と云、○初夏中心

新葉と生ゞ、ゝゞ冠ゞる、是と巻葉と云、王ゝく芭蕉と称ゝの八是を、

筍

時珍曰、筍、俗筆に作る八非、竹筍と筆と同性滑利、多食

ハ人と浮せむ、凡竹筍八淡竹と上と、苦竹次之 紀事

凡筆、康猪甚好し食ふ故三夜と人ゝ

追りむ 和名抄 筆 和名太加毛奈 源氏横笛 たかうな

橘鳥

杜鵑と云、万葉 橘の林とゝもむ、常ふ冬ゝ

ゝ、ゝゞふ、古今 ゆゝ花ゝもむ、ゝ

ゝど、ゝゞ、ゝ声

蕪三夏物

ゝえゝゝん 大和千里

蓼

和漢三才画会抄 小青蓼、三月ハ

苗と生ゞ四五月繁茂ス、秋ゝ至ゝ穂とゝす、

蓼喰

播磨津田、毎ゝ穂蓼と出ス、年中穂ゝ、亦一異ゝ

虫

孔叢 有蓼虫賦言、是虫幼長新蓼、不以為辛○

世俗に蓼食虫も好ゝ、是ゝ

五月

端午

五月五日端午の節、端八初ゝ午八古ゝ

五字と通用す、ゝゝ八五月初の

五日の謂、珊瑚鈎詩話 端五の号、重九ゝ同ゝ、後世五ノ

字と以ゝ午と字ゝ八誤ゝ、風土記 仲夏の五日と端午と云、

竹植日

竹醉日 晉咎 五月十三日と竹醉日ゝ、亦竹迷

日と云、是日竹と栽ゝ必活、竹譜

竹と種ゝ八雌と以ゝ、根ゝ上一節発ゝ

雌と子、変日記 降ゝ子ゝ竹植ゝ日八簑と笠 和名 五元集

五月十三日 雨雲や竹ゝ

醉日の人ゝ沈め其角

田植、田植歌

若苗、犯事 九五月の尾ゝ六月の首ゝ至ゝ、苗種生長ゝ

玉苗、民間ゝ苗代と云、農民男女混雑ゝ再び苗と挿む、是と田

早苗取と云、農民男女混雑ゝ再び苗と挿む、是と田

植と云、女子苗と種ゝ、各音と揚ゝ

是と田哥と云、或八児童太鼓とゝ、ゝと勧む、凡苗と

種ゝ、半裏生の前ゝ、○若苗八ゝゞ長ゝ、○

早水女 早苗取

玉苗八、玉八秋美詞、小山田ヨリ玉苗植て、ととめがこと千そぬきて出るゆゑ、世

秋百合 和漢三才 花正白、艶厚く大きく上ヨリ向フ或ハ横ヲ向く最愛すべし、

壽会 深山溪谷の間に出、苗を得がたし、繩ヲ纏フ下ノ方ヲ

ふ一株秋ヲ入くふこと能上る故ヲ秋百合と名づく、もと珍重す、

六月 **鷹鳥習と学ふ** 月令 季夏鷹乃学習、注学習ハ雛の、もゝ〳〵飛ぶを習ふなり、

滝殿 泉殿

の条

竹皮脱 本艸集解 時珍曰、土中苞筍各時を以て出、旬日籜を落〳〵竹となる、

籜、和名筍乃宇波加波、

田草取 本朝食鑑 種〳〵後、二日前後、田の雜草を除き去、以て其根と固く寸、蠶く田草を除くことを再び除くの労あり、○夏ヲ秋ヲ至迫、三度田間の蓼と取、是を一番艸、二番艸、三番艸、

簟 説文 簟ハ竹席、竹を以て席とす、和漢三才 簟ハ竹莖、暑ニ用ふ、

鋪

抱篭 篭ハ竹夫人の条ニ出、

紈の納涼 艸部、御手洗の条ヲ出、

四月 **鷹鳥爪** 和漢三才 小細氣條と出、緑色畧鳧茨の豆ヲ似く繁く莢と結ぶ、録豆ヲ似く、

大和本艸 二種と云、一種木の偽、是と鷹鳥爪と云、一種草の偽と云、

閑昏 花浅黄色、末鋭ヲ鷹の爪ヲ似たり、

五月 **蠶豆引** 時珍曰、豆莢の状老蚕の如し、故ヲ名づく、王禎ヲ農昏ニ謂ふ、其蚕時始く熟ス故ヲ名づく、八月種と下す、苗葉を生ず食ふべし、方ある豆中空ヲ、葉の状匙の頭の如し、二月花と開く城の形のごとし、紫白色、角を結ぶ連綴す、大豆の如し、頗る蚕の形ヲ似たり、

和漢三才壽会 其莢上ニ向フ故ヲ空豆莢と取り食ふ、五月熟す、○俗ニこの麥熟く豆と取ると引く、

六月 **相国寺懺法** 紀事六 十七日 月十七日、洛の相国寺閣と号す、懺法と修す、世閣と懺法所、松風の鈸小狐の鐃、當寺の珍宝、是古、佐木氏寄附する所、○寺中ニ定家卿の墓あり、但禅宗也、

初午日ニ、神社啓蒙　祭所御食津神、文徳実録曰、仁寿二年三月甲戌、近江国筑摩神ニ従五位下を授く、按ニ、筑摩の庄ハ大膳職の御厨の地ニ、故ニ当職祭所の神と以て、此地ニ祠る、蓋この神ハ稲食を掌るゆ依て、里女婚を求ムるとき、祭礼ニ必釜鍋を戴て神ニ奉ず、不幸ニして少壮の間ニ孀となるときハ、やむことを得ずして、改て嫁し、再び嫁する者ハ、二枚と用ひ、三たび嫁するときハ三枚と用ひ、神幸の後ニ候する、中世、業平の花詞ニ、里婦笑靨と霑きて数枚と重ね、艶態の故の為ニ、固ニ芦胡麻、

雑和集　俊頼曰、近江国つまの明神ハ神おろすゆ、其神の御誓ニ、女の男ニ、男ハ女ニ、数ニ応じて、鍋とつくりて、その祭の日奉る、男ハ女ニ、女ハ男ニ、ともに、ハ地のあるこ、やまゐ、おしてかれば、牧のごとくしていまだ、ものを、奉るとかの委くハ春部、恭

王孫花　名医別録　王孫ハ海西、川谷及び、汝南の城廓の垣下に生

○伍膳曰、王孫、和名ニ、ハ、生昔本朝ニ、ハ、明らけし、今識ることの多し　惜哉、特ニ毒の甲ニ、療病の功最大なり、○今本邦の里俗、王孫花と称するものハ、誤ともぐさし、

薫三夏物　津波須　和漢三才図会　鯽の小ものを、と名づく、西国ニ、和加奈と号、九月尺許ニ、眼白と名く、十月二尺ニ近きものと、鰤と名く、江東ニ、伊奈太と称す、仲冬ニ長三四尺ニ、ものを、鰤と名づく、

鈎瓶鮨　毛吹艸　和名抄吉野のつべ鮨、曲物ニ入、慈ヤ、手を付る、其形鈎瓶の如し、故ニ呼ん、一説、此鮨ハ、鮎を取て、鮨、この曲物ニ入て、吉野川の水中ニ、沈め置て、熟する期、坐すゆ、

月夜　雍州府志　飯ず、の一名と月夜と、六条ニ家ニ、製之、○異名を月夜と、ハ其飯の精白と、

五月　徽雨、墜栗花穴　さ、部、五月雨の余ニ注、辻ごの

花　貞徳曰、つゝじが花と、犬追物秘伝抄　後土御門院寛正六年八月、将軍慈照

院殿犬追物見物、射手、後東日記云、紅八ざる
辻ゞ花の白帷子、ゞゞ、ゞゞ、拘八ゞざるゞ、

六月

月次祭 十一日

公事根源云、六月十二月、年二度諸社へ御幣を奉らせらるゝ、弘仁年中

津島祭 十四日十五日

始る、

記 欽明天皇元年、こゝに崇め祭る、天王始め西海の對馬部郡、門間の庄、藤波の里に降る、後に尾張の海部に移る、仍て其旧地の名を表して津島と号す、嵯峨天皇の御宇、其初を立つ、始の初八、拍森に在、後居森の地に移し、更に初と仝の地に移す、

神祭

記 當社夏祭八、その神島に鎮座の後、神民の夏日に堪ざると暗に知るべきなり、避暑の為として、宵祭り、三論、をもつて、船の上の楽、八殊に重楽一成の舞曲、妙音の笛声、別調と神製し、この楽の一成と車楽舞、津島笛と唱初り、世に車楽の説、堂尾大隅とものと、十一黨の武士、計策を以て討取ると起る、いまだ社説と否、前説と用ふ、六月二日試示あり、八日に町毎の車屋に調手、十三日江口に出て暗の試弊を、十四日の宵祭、十五日の朝祭、こゝを里俗打舞、こゝ、車楽船上の挑灯、こゝ、三百六十箇八一歳の日数に象り、真柱の挑灯十二箇八月の数、高擡四方の灯篭三十箇八月の数、宵祭を花寺観とて、又翌日の昧爽の祭もあり、この時市腋車を先とし、津島の車楽山車、その前後塘塙、五村前後と論ず、五村八米座、塘下筏場今市場、下塘是、社地前に大河あり、岐阻川の末に、其中数町に及ぶ大河に大船を浮べ、数千の挑灯と釣る、其影水に映じ、恰も星の如し、○芦の神輿八、

社家注進記 毎年御葦の神事、こゝ、国中の疫疾変異をとゝ、社説に御芦の神事あり、毎年六月十五日の夜、神主、行に、拙て、深秘とす、その為る処、六月後の余風に、牛頭天王の修法あり、ずと、ある物に、旧記に、神翁一人、葦の葉に乗て浮来、その名、後に馬津の居森の窟と掘る、その神縁に、芦の神輿と称する、

夏

露涼 露八秋花多し故に連俳通じ

秋とすれども夏も又あり故に
蔕海〜とのべく夏季とす、

釣鐘草

[こくがせう] 花紫色、下ゝ垂て鐘と釣るに似たり、又白花
洛紫のことのあり、葉も牡丹のごとし、

四月

練供養

[紀事] 十三日より十四日に至りて、大和国當麻寺にて
法会を修す十四日練供養を、僕射拱佩の女、
中将姫の忌日に、中将姫尼となりて、善心尼法如と云、練供
[養縁起] この来迎引接の法事は、恵心僧都の物なるこの
僧都は、和州の良福寺村の人、羅漢の後、永観中、叡山にて
この法会をもてはじめ、其後當寺護念院、本は紫雲菴
とて、法如尼草庵の旧跡、寛弘元年の比、僧都并に寛印と
ともに此処に来り、本尊と廿五菩薩の假面とを彫て、同二
年四月十四日、法如の往生の日と以て、迎接会を修しはじめ、
是則横川の花臺院にうつして処なり、○一説に、四月十四日は
恵心僧都なくなりて法会
と修しはじめ日なりと云、

兼三夏物

根芋

[和漢三才図会] 載、和名伊毛加良、一云、伊毛之俗云、
須伊木、○俗に根芋と称するはずいきなり、

五月

合歓の

花

[神農経] 合歓、鋸、忿、萱草、忘憂、○蔵器曰、其葉
暮に至て即ち合ふ故に合昏と云、[和漢三才図会] 五月
花ひらく、其花、上半は白、下半は肉紅、散蕊ゝ糸の如
し、云々 [和名抄] 祢布里乃木、[万葉] あじきなぶこもしめ
ま、又 [新六帖] かるかの花ゝもうみゝ、

鹿狩

[照射、大串、] [こくがせう] 鹿狩、
獣狩なり、夏季に、どうして鹿を射るに、岡あるに夜山の木
うげを篝と焼、或は小炬と串ふつけて、是を火串と
ふ、是、鹿、火影をつきて寄り来る、牝牡目いとへ合、
火をとりて、鹿の目のごとくにして、的にて射取
るなり、哥にも、足合す鹿とよめり、又さら男の袖ふれしも
まさるものの待とかもて
ともを法師なりと云、云々

六月

練雲雀

[雲雀鷹]
○九六月毛とかはる、旧毛おちむ、俗呼て練雲雀と称す、
毛とかはるとき、其飛こと速なるゆゑ故に鷹鳥と故に
と捕ふ事と雲雀鷹と云、○定家卿の鷹三百首の内、
河内女が手引の糸の絡う雲雀一とう鷹とあの世とかも
○或説に、練雲雀とは、音入雲雀の異名なり、云々

夏 四月

中酉日 **神社啟蒙** 京三条猪熊の辺に祭る神、豊石曛、奇石曛命、**明徳記** 今六角堂の南、猪熊の東に遷座あり、石上寺と云、**兼邦百首抄** 二条大宮岩神、付き云ふ、中山大明神とは、是三井寺北の院にまつる歟、新羅明神素戔嗚尊 **公事根源** 永祿五年六月十六日、神社を建立し、同六年十月八日、従三位の神位を授らる、後冷泉院天喜元年四月ようゐめて宮幣を奉らる、云々 是四月の中の酉日、三井寺において、五月吾新宮祭と修す、是新羅明神の祭なり、

夏木立、夏草

元帝纂要 夏草、曰、茂草、木曰蔚林、茂林、いづれも、新緑をひしげたるさまを寄せたるなり、

名取草

牡丹の一名なり **藻塩抄** 昔、ある女、この花を愛し、多くうゑおきて、食ハ終日あるべ、夜ハ寝もすがら風に撓ふぐきことをあぐきくるみよりて、男、他の心ありて、離別しぬ、とぞ、

中山祭

近来の俗服し、

織

仍て、元のごとく、すなはち、名取草花、

藏玉 打人の

生節

常陸国誌 土人塩水を用ひ、蒸乾し、脯とす、味生よりも美し、俗に鰹節、毒助、○鰹節の、

茄子花

時珍曰、夏の○江戸にハ、秋に至る紫花、五瓣相連り五稜縷の如し、黄蕊緑蔕其茄と包む、云々

說文 附蠡ハ、皆殼を負ふ、蝸牛より、殼なくして蛞蝓、云々、

夏月

明やすき、涼しきさまなり、

夏の霜

余惜ふ、

朗詠 月照平砂夏夜霜、云々

この詩に、夏の月影を霜みたるなり、

夏雨

五月雨も夕立も、かてらいとゞ夏の雨哥、

夏の雨、云々、

夏野

百草の茂きさまを専要とし、○秣刈人ともとりの夏野、翁

夏夜

夏の雨の趣ふ、夏季のあ、一種の景物、あるべし、

夏山

常の

［郭熈書譜］夏山ハ蒼翠如滴

夏虫 身をこがすといへ、即火蛾のこと也、又蛍とも、古哥ニ夏むしといへり、

夏野の鹿 ［宗祇抄］夏野の鹿ハ角生初て、短くして一束にもたらぬゆゑに、つかの間といふ、

［万葉］夏野去小牡鹿之角乃束間毛妹之心手忘而念哉　柿本人麿

五月　永

根 和哥ニ、あやめ草によみならへるハ、あやめのねなし、根の永きことのよく、永承六年五月五日ニ、あやめの根合ことを、甚式哥合の儀のごとし、左の根一丈一尺、右の根一丈二尺のよし、古今著聞集にみえたり、是ハ後冷泉院の御時也、又郁芳門院の根合なども、ことに八雲御抄にもみえたり、

苗 大部、田穂の条に出ス、

南天花 ［和漢三才図会］画譜ニ、闌天竹と名く、其葉儼として竹に似たり、子を生じ穂をなす、紅なること丹砂の如し、久しく経るといへども脱ず、時珍曰五月小白花をひらく、庭中に植れバ火災を避べし、甚験あり、近頃白子の南天燭を出す、以て珍しとす、凡此樹長じがたしといへども、山陽の地ニ大木あり、作州土州の山ニ、長さ二丈余、周り一尺二三寸あるものあり、枕ニ作る、俗ニ耶鄲の枕と云、

［本艸綱目］南燭ハ文燭と名づく、

瞿麦 常夏

［和名抄］瞿麦 和名奈天之古、一名止古奈豆

［草花譜］瞿麦、単午あるものを石竹と名づく、千弁あるものを洛陽花と名づく、

［蘊頌］苗高サ一尺ハ、葉尖りて小く青く、根ハ紫黒色、形ち細蔓菁の如し、花紅紫赤色、五月ニ至て開き、七月ニ実を結ぶ○大和撫子、唐撫子、川原撫子、鷺撫子、藤撫子ホの種あり

［栄雅抄］花の姿ちひさやかにうつくしく、色ことに咲けれバ、ひとさかりを名子になぞらへて、撫子とぞ云、又盛久しく咲けれバ常夏とぞいへり、唐撫子ハ色ことの品あり、大和撫子ハ紅梅色也と云、鷺撫子ハ花の形ちになぞらへて名とし、藤撫子ハ色ゆゑその名あるべし○石竹

［和漢三才図会］瞿麦即ち石竹也、今以て二種とす、共ニ葩の周囲ニ刻歯ありて切又あり、剪紅紗ニ似たるものを瞿麦とし、切又なきものを石竹とす○なでしこの花のしぼまざることハいつまでもすめる、いはむかしのおくにおける　後頼

夏菊 ［本草］菊ニ夏菊、秋菊、冬菊の分ちあり、

［菊譜］引花史曰、四月ニ咲くものあり、五月ニ咲くものあり、陳張孝祥嘗て詩あり、六月ニ咲く者、符離王常詞あり、秋冬ニ

冠くとのを竪て貴くとまぶ、夏望くとのを次手、云

生胡桃

博物志 張騫西域ゆ使しくく

むくるふ、胡桃の種を得くふ、

本草 此果外青皮肉あくく、こまと包む、其形ち桃の如し胡桃ハすおハち其枝く樹の高サ丈許、春初て葉と生ず、長四五寸両く相對す、三月花と発く、葉の花の如し、実と結、

茄子

釈氏切韻 茄一名紫瓜子、杜宝拾遺録 隋煬帝、茄と改て崑崙紫瓜

云、多識篇 水茄 今按奈加 ○谷茄、黄山谷曰、茄の老くるもの子堅し、谷の如し、穀子茄と名く、谷穀音通

○白茄子、時珍曰、銀茄と名づく、云云

物

かの部、形代の条に出す、

名越祓

神祇令 名越祓と八名八、夏の

六月 撫

畧語ゆて、夏越の祓と言て

ろハ不祥と解除、夏と越し、千秋小至らんとするの意あり、

八雲御抄 名越とゑを八あくゆる邪神とあぐむる故し、此説

みちぐづくし、神と和す祓とゑ弐く、○荒和祓 荒節 同じ

こくく、

公事根源部折式 晦日の夜御贖物まゐる、あくよ

和節 ゆの御裳束ゑ、此次第

江次第 ゆ部、節折

の条、見合よ、○夏祓、名越祓とゑハ惣名く、荒和の祓

節折ハ天子の御祓ゆえ、大祓ハ百官の祓くと部、大祓の条ゆ、ゆとし、○御祓、大祓、形代、小蠅声神、茅の輪、麻巣流祓、草ゆ、ちの〜頭字の部ゆ分ち入るとこ

古今六帖 ことゆ月のあくしの祓もくる人ハ千と年の命のゆと

しあり、

夏祓

夕祓 夏祓 夏祓夕祓と八其時節時刻

後人云初

ものゆ、夏祓とゑて季と定め夕祓も、夏の夕方

涼風と得て修する体、和哥くくと読こくく、

夏神

樂

川社 奥俄抄 川社のとさもくふゆめゆで皆こ

こくく、是ハ夏神ゆのとこ、神ゆハ冬十くくと、

ちのづくく俄あるとゆく、夏ゆまでとする時ハきくくく川のゆく

みてするく、河の瀬ゆ榊一本と立こゆとと拄ゆ、篠竹と栅

みくくとてゑ神供と備ふ是と川社とゑ○俊頼朝臣曰、河

社のとく知へゆ〜ちぐちくくあくぐ〜人のゆハ水の上ゆ社と

祝ひて、夏ハ神ゆする、

川社

河社ゆあぐ〜夏神ゆて、昔ゆ

此道の先達ゆちぐゆとくくく、只古きとのと見て心得ゆ、

貫之集ゆ四、夏ゆ〜〜川社ゆのゆあくくゆす、衣ゆこゆ世ゆ

あぬくひぐくん、又云天慶四年三月くくの御屏風のゆこくの歌

夏かぐら、「行水の上にいはへる川やしろかはなみたかくあそぶなる
哉、初の哥、新古今集神祇の部に八延喜の御時、屏風に夏かぐらの
こゝろをよみ侍りけるとて、今ハ時代ハかはりたれども此屏風の
哥にて夏神楽とせるハ此哥によりて見れバ、夏かぐらへの絵、神楽の
絵のやうに川社とよめることを見れバ、三家六月祓の時のこと、又右二首ともに
六帖冬の部、神楽の哥に載る、八四季の題月の哥どもとも冬にのつけ
たる如く、類をとりて神楽に入れしも、冬の哥とするにハあらずかの
六帖にも見えて八河社夏祓八にて神楽之、忠見集にも、御屏風に六月
河辺に神楽する処をよめる「さかきばのかみがきにて行水にひとぐ
あそびしの神楽おもしろうてありもあかしのそらへと、よみて夏神楽と
よめるハ河社と八延喜式六月大祓祝詞によるに天神地祇こまらむ
ことどもをうけ給ひ、河の瀬におはす瀬織津姫といふ神、もろもろの
と、大海原にもち出でて放ちすてつかはしてくこの故に河原にて祓を
するハ河をもやむて河社とおもひ、是をやむやし八川中にわざもめに社の
かたを引結ひ神供などを備へて祝詞よみて後別に神楽とも
あそぶることや、又匡房の六月祓の哥に「川やしろ秋とあすをぞ
おもへども波のしめゆふ風の涼しさ」、又中将資成朝臣の家の
哥合に、俊成の哥「五月雨の雲るもあとと川社いつよ衣をも
のにほすらん」、風雅集兵部成実「川やしろあさのに波こす五月雨
に衣ほすてふひまやなからん」ときさらぎとちよふにかざりあるべ
き事なり、晦日にハすゞしき私の家
なくハ便りある日にするなるべし

夏瘦(なつやせ)

【万葉】石广呂尓吾物申す夏瘦尓吉跡云物曽武奈伎取食

【続猿蓑】夏やせを縫ひのかつのむさつ家　如真

夏引(なつびき)の糸

【枝折萩】夏引の糸とハ麻をいふなりぞ同前、夏引の白糸ハ夏蚕の糸なるといへり

神馬藻(なのりそ)

【下学集】神功皇后異国を攻たまふとき、船中馬秣つきて、海中の藻を取て馬を飼ふ故に神馬草と名く、神馬藻となのりそとハ神馬にハのることなかれの義、【いくがせる】濱藻(はまも)ハ是ホダハラなり、名乗菜とかきてハホダハラといふとき八正月の飾物なく春の物論なし○今按に濱藻とかのりそといふとそのことにて、日本紀允恭天皇の紀にみえたり、【童之集】ちハやぶるかみの宮の神のこまゆめなのりそよたてりもぞする是莫鳴菜とよめるなし、

菜瓜(なうり)

【和漢三才図会】本草に菜瓜とよむもの八越瓜、菜瓜ハ越瓜に似て小く、背に微毛あり、六七月瓜を結ぶ、胡瓜に似て皮厚く、深青色、縦に白文ある、

内ハ越瓜に似て、煮食になりがたし、糟及び糠に蔵む、硬く脆く美し、上品なりとす、一種、菜瓜に似てふとく、鵞の卵の如きものありて、小瓜と名づく、糟につけて食ふ、

奈良漬製す

[同上] 糟漬の法、六月土用の中に越瓜の青き物を採て、これを破り、蛤貝を以て瓤子を刮去り、舴艋の形とし、灰を盛ること一時ばかり、水湿を去り、灰を拭ひ去り、塩を盛り、凡十二瓶とす、酒糟三十斤を用て、瓜を包み蔵む、各指碑しめず、固く封ず、大抵七十五日ばかりにして成る、

納豆造る

[同上] 納豆数種あり、大抵豉の法より出づ、以て酒肴とす、僧家これを重んず、

夏切茶

[紀事] 六月の始、宇治の茶人新茶を新壺に盛りて、常に茶を賣ところの良賤の家に贈る、是を夏切壺と云、凡壺の蓋紙にて糊しく堅くこれを張り、風湿をして、壺の内へ入しめず、茶用ることあるときハ、小刀を以て、壺の蓋合縫の糊紙を截て茶を出す、これを壺の口を切と云、冬口を切くの壺、盛夏の間處々の山林清涼の地におく、故に夏中用る所の茶、先これを贈る、故にこれを

と夏切茶と云、

夏ぶし

[千梅らくがき] に誤て、鰹の生節とす、[雑談抄] に髪沸瘡とす、暑中に發する小児の頭瘡也、江戸の俗訛て夏ぶしと云

夏深し、夏の別、夏に後るゝ、夏の限、夏過て、夏を追、夏の果、何れも別義なし、

ら

[五月] 蘭湯に浴す

[大戴礼] 五月五日に蘭を畜へて沐浴す、

[詞] 浴蘭湯兮沐芳草 [本草] 蘭ハ名ハ沢蘭の香草也、今の勾蘭花にあらざるなり

む

[四月] 向日明神祭

[神社啓蒙] 向日の神社ハ山城国乙訓郡西岡の辺に在、[名勝志] 当社の額正一位向日大明神と篆二行に書す、道風の筆なりと云、西岡の民家の側に花表あり、[雍州府志] 一説に日に向ふとの八月にもあるときハ八月読余を祭ることの [illegible] 八日向大明神なり、本朝人皇の祖神、神武天皇なりといへり、今日是なることをもちふず、○当社祭礼の以前、社人先づ岩倉山三重院へ行て垢離をなし、又祭日に必神馬を此滝に引て、是出現の地なれバ、出現のことハ西岩倉金剛寺縁起にくはしくえらべり、今これを畧す

結葉 [金葉集] 応徳元年四月、三条内裏ゐく、庭樹結葉と
いふことをよませたまひける、院御製、おほ山ゐこず
をとは葉ゐるゐるこゆるまハ松のこずゑもこゆるまざりけり、

麥秋

○諸木の葉と葉と相交り結ぶを云ふ、

[礼月令] 孟夏月麥秋至、註、秋八百穀成熟の期、此時
於こハ夏ととなれども、麥ゐ秋ハ秋と故に麥秋と云、[蔡邕月令章
句] 穀ハ其初生を以て春と、熟するを以て秋とす、故ゐ孟夏を以て麥秋とす、

麥の秋風 [夫木] 御園

生ゐ麥の秋風そよめきて
山時鳥ちのびゆく、 俊秋

麥苅

[和漢三才圖会] 大小麥ともゐ九十月種と
下し、皆四月黄熟す、其刈ること八立春ゐ百二十日に至ると旬とす、
故に諺に云、麥ハ百日の中に蒔べし、三日の中に苅べしと、但し小麥
ハ苅収るとき、大麥より遅きこと十日むかう、麥ハ五穀の貴と
す、○二年草、年越草、ともゐ麥の異名、麥ハ年を隔て種る
故に名づくるゐ、

麥藁笛 [同上] 小麥稈厚く硬し、小児用て笛と作りて吹くことを麥こゆ笛と
云、[夫木] うゐゐこがすきびゆるゐ麥笛の
声ゐふくゆく夏の日ぐらし、 西行

五月 六日菖蒲

京師屋檐ゐ菖蒲と取て、六日に菖蒲湯とゐす、是五日の夜の露を受る物と用ゐる、彼金門記云ふ、

神水の説

室明神祭 十三日○摂州室の津ゐ大社ゐる祭、
ふるゐる、 神、上賀茂に同ト、例祭五月
十三日、是ゐ先、浴の上賀茂の氏人西人播州ゐ下向して、神事に司
るゐ云、其次ゐ先、辰刻装束束帯す、己の刻の撞と撞て神主以
下出仕、即拝殿の座につく、御鑰と祝ゐ、社家に役す、
次、神主祝の氏人賀茂御戸を開く、氏子素襖烏帽子ゐ、唐ハ
の表神前の左右につく、次に神饌神酒と供ず、此間事長神子神示と
奏し、次に室津の旋女棹の哥を発す、次に神主祝祝詞を申す、是
とゐ、さて出、黄船、太田、若宮の社の御饌を献拝ゐ、神主祝内
陣入て、御饌を撤ス、内陣の御幣榊を出す、祝御ゐと閉ゐ、
神幸、先ゐ神船着岸の後、神主祝頭宮の拝殿の座ゐつく、西社人
御幣榊を捧て、大床に候ず、次に渡御ゐ、遊女十二人三日潔斎し
て、神事出内五人ハ男子の姿をゐり、髪を剃り男髷ゐして、金
襴の社衣を着、笛二人、鼓二人、大鼓一人、残り七人、髪残一人天
冠を戴きて、萠黄の水干を着して、七人
ゐとゐ幣を採るゐ棹哥の役ゐる、

六月 虫干、

虫拂 土用干

紫月土用中、諸神社、諸仏寺、美宝の虫拂とす、和俗六月土用中、天日の晴るを俟て衣服并書画の類を曝す、是を涼を取るといふ土用干といふ、書画衣服の蠹虫を蝕葉こゝろみるべし、

四月 卯花衣

挑花御諺 表白裡青、卯に同じ

○四月こゝろと著すべし

梅宮祭

上ノ申 神社啓蒙 梅の宮八山城国葛野郡、王城とさゝやき二里ばかりあり、祭る神四座、相殿の神四座酒解の神大若子の神、小若子の神、酒解子の神○祭祭今絶えたり、土人ふつふこゝと祭るのみ、祭の式江次第にもれ、橘氏の祖廟なり、世俗姙娠の婦女、當社の砂とりて、帯襟に佩べし、足檀林皇后嘉智子の遺風

卯花

和漢三才圖会 按ニ楊櫨数種あり、山空木、管根卯木、唐空木、三ツ葉卯木、ゝ山中に、人籬根に植ゝるの八山空木、ゝ中空なる形に空虚木と名く、高サ丈ばかり皮白く、肌深青、空ありて、其葉円く長く、四月小白花を開く、簇とりて愛すべし、俗に卯花こゝと、○十姉妹、管根空木と訓ず、花蕚に六十姉妹似て同じ、ゝ京畿に多し、是も卯花諸哥、うの花よりでゝ、ぐしかけ島のあまもさらすてゝ岩とゝ、○異名、ゝ草、垣見草、雪見草、ゝ頭の假字の部に入て注す、

卯花くたし

八雲御抄 うの花くたし 四五月の雨

茨花

和漢三才圖会 金櫻子、山林の間に叢生ず大に蕾薇に類し、刺あり、四月白花を開く、夏秋実を結ぶ、黄赤色、ゝちふさ拓猫 時珍曰、原野に多し、苗みゝ似く長く、高サ一二尺ばかり、其葉微方ゝ葉節に對生ず、細歯あり、背白く莖の端に穗と作す、長一二寸、穗の中に淡紫の小花を開く、三四月花ゝ実を結ぶ、赤穗と作す、五月便ち拓、和漢三才圖会 夏枯草、穗の形矢筒の靫のごとし、故に俗字豆保草、和名字流木是なり、

夏枯草

時珍曰、原野に多し、苗の高サ一二尺ばかり、其葉微方ゝ葉節に對生ず、細歯あり、背白く茎の端に穗と作す、長一二寸、穗の中に淡紫の小花を開く、三四月花ゝ実を結ぶ、赤穗と作す、五月便ち拓、和漢三才圖会 夏枯草、穗の形矢筒の靫のごとし、故に俗字豆保草、和名字流木是なり、

鸚実

和名抄鸚 実 和名阿字之智、三字久比須乃岐乃美、今案所出未詳

久比すゝらに、所々山林に多し、小木に、葉に山躑躅に似く

両〻相對ス臘月より諸木みな花ぐちて生ズ三月ホ小花さき四月ホ実熟す、両〻相對しく、葉の茎より内ホを、葉の茎の本より実の茎生ズ異物〻覚の始て鳴ときふ此花さく故名せり、京畿ホ多く臼の木〻ここの実の形臼のごとく上ホ窪こもり、百菓の先ばけ、秋ハ紅葉しく落ツ立花の下草ホなる、

童子鳥 この鳥冬ハ深山の木のうつろの住、からの毛ホ落く、小童の髪のごとし、

兼三夏物

團扇 五雜組 大明以前摺扇なし、多く團扇を用ふ 和漢三才図会 方扇 俗云唐宇知波 翳ホ似く物と打べし、故ホ宇知波と称 和漢文操 支考著 團賛の序ホ云ハ和訓ハ団扇なる故ホ

宇治丸 毛吹草 城及宇治の鱣鮎 ちりかくさると俳諧の書ホハ、団の一字をとり用ひ来ると云 是と宇治丸といふ

鵜飼、鵜舟、鵜縄、鵜遣鵜 和漢三才図会 鸕鷀 和名之方 今云宇乃止利 按和名抄云大なるを鸕鷀 日本紀私記、小なるを鵜鵜と

俗云宇 ○弘景曰、此鳥卵を生ズ、ロニ其雛と吐 ○岐阜長良の鵜飼、六月避暑納涼の為ホ近国より来く見物ス所謂上川七艘下川七艘、合て舟数十四艘、長良の渡ホ小瀬の渡まで三里の間と上川〻云、長良ホ川下三里と下川〻云上川の鮎と上品〻ホ、舟一艘ホ鵜十二羽、鵜遣一人、舳當一人、舟の舳先ホ鉄鉤を下し、篝火と焚、十二の鵜の縄と左の手の指の股ニ〻ち持く、鵜の魚と追ふ事ちく〻ひ、その縄も注ぎ〻次ホとるけ〻し、その時、喜ぶる縄とふまくるとぬきく持つまくるる縄ホのづう解く、帯ニ〻ホ、さて鮎と十ホ呑くる鵜ハ船を〻ふあぐると、つ〻ホの右のもホ〻く魚と吐しめ、又水中へ追入ル〻、この手先のはたらきふつ〻しべとも次第と追ひく、甚ぎちつ〻ホ、鵜縄長さ一丈二尺、鵜の首ホ鈍と入く、腹中ホ入らざるやうホ設く、用の入ること船と如し、月夜の間ハつ〻べ、腰装と著ちかきく笠とかく〻九三四月より〻めて八月三十日と限こす、

五月

馬弓 宮部騎射の条ニ〻、

宇治祭 八日○離宮乃

社八山城国宇治郡宇治の里にあり、祭る所三座、宇治旧記濱千
鳥 應神天皇、菟道稚郎子、仁徳天皇、當社八宇治の北にあり
て、関白頼通公、平等院建立の時、離宮と南に移し平等院
に向ひ、此寺の鎮守とす。神社啓蒙 離宮、祭る所の神
一座、藤原忠文、按ニ忠文八宇治氏ノ名と号ス、母八息長氏の女
なり、承平三年、秀郷貞盛に將門誅伐の功を以恩賞を行ふ
るの日、小野宮左府忠文を以て賞列に入ず、故忠文ふつゝ小野宮元
府を恨み、遂に宇治川に没せ、其靈ものゝ祟をなして、百姓と
斃る、是を以て祭て宇治の離宮と号ス。○西説互ニ異なり、この神
事その始め頼通公に勅して、天下太平の御祈、五月八日未の
刻か九日巳の刻に至りて、この平等院に修ス、太平の御神
事ゝ云、青梅昔の両種と必ス神饌に備ふ、雍州府志 祭の日、
金銀の幣を奉る、供奉の人金銀の先板の諸抄に
幣あるを誤るなり、ふ。 鶉の巣 お夏至と音、
こゝに本草に、さゝと年浪草あり、ふ、誤て春の部に載
月令 反舌毎声、藏器
本草拾遺 百舌一名反舌、
今の鶯なり。○礼記疏ニ反舌と蝦蟇とハ未ダ是非と一ハ、

羅 細布なり、めの細き布、越後縮のごとし。
○すゞ〳〵薄織の絹布をいふ。浮の
花 呉晋本草 水萍一名廉、葉円く小にして、一茎一葉、根水
底に入て、五月白花あり。○凡荇萍の類、其花水面に発、
或ハ白、或ハ黄、花黄に胡瓜越瓜の類なり。
五六月盛し、瓜の花 その跌字の部にこゝに出ず。梅
漬る、梅干、梅剥 梅剥ハ、皮肉ともに剥掛晒乾
しなり、梅酸と子るなり。
浮巣 み部、水鳥の巣の条に注ス、蠸 余雅注 蠸一名守瓜、喜て
守瓜宇利波閑 ○和名抄 瓜の葉を喰ふ虫なり、
蛍に似て、黄色ある虫なり、 うつ蟬 せ部、蟬の条に出ス、 鶯
の附子 貞享式 此式ハ例の當用に今按ふに、鶯の子も
春巣立て、夏飼ハ六月の間に毛と替て冬毛の
ごとくなれば、夏ハ用習ふべし、或ハ引鳥の親に附、或ハ笛と
以て引音を教、誓古ハ夏の間あれば附子ハ
決して夏とよい笛と結びても夏とも

夏 うゐの 六月 打水

もぬるゝ　わゞ　其角

残花

貞享式　此詞ハ古今の論あり、毛頭ども、残の字を其季ゝ　此季中ばゝ　秋ハ残るとつくる道理あゝ、花ハ春を来ゝ、残る夏と定むゝ

兼三夏物

和漢三才画会　赤色肥る梨小さ

蚤六足ありて能跳る、夏日人家の温熱の気より生ず、おのづから牝牡あり、○さしたる夢ハ蚤の痕其角

五月

幟

かの部飾貴の条に出ス

六月

凌霄花

時珍曰紫葳、名凌霄、俗に赤艶ハ

るとゝ紫葳と云、此花赤艶故名く、木に附て上り高数丈、故ハ凌霄と云、年久しきことの藤大なるく抹の如し、春始く枝を生ず、一枝数葉、尖り長くして歯あり、深青色、夏より秋ハ至て花を開く、一枝十余朶、大サ牽牛花の如し、頂に五瓣と

なりて、頽黄色細点あり、秋深く更に赤し、

八月莢を結ぶ、豆の莢のごとし、長サ三寸許

八月

萎

ハ部ハ俗出す

四月

久世祭

中巳但し巳　○山城国乙訓郡久世の神社、上久我の

氏屋二町ばかりあり、菱妻明神と号ス　三代実録　貞観八年八月十四日丙戌、山城国正六位上奥我万代彼神授従五位下、

閑白賀茂詣

中ノ申　公事根源　初度ハ日次とえらミなく此事あり　円融院天禄二年九月廿六日、摂政右大臣謙徳公かも詣のことあり、是摂関の人の賀茂詣のもゝはじめなるべきハ、此事ハ心ゞ賀茂祭のまゝの日なるべきに、主人ハ乗車なく、地下殿上の前駈あり、白妙の御幣、神宝の唐櫃やうの物をもてゆく、琴持菅笠深沓ととのとめゝ、上達部軒とつゝぬ、社頭ハ神拝ハ、葵桂と称宜をもてまゐらせバ冠ハ、東遊求子、駿河舞ハ、あり、○菅笠擔賀茂詣行列の中に、大きなる菅笠を擔ひ渡るとゝ、

國祭

山城国賀茂の祭ゝ

公事根源　三十代欽明天皇の御宇、四月ハ吉日をえらびてゆつうらゝ所見あり、又和銅ハ詔あり、国司ハ国ゝと検察ゝ、ゝゝえらぶハの国祭ハ賀茂の本祭あるべきハ、酉の日の祭ハ公家ハ使を立られ、走馬を献ぜらるゝ相ハるべきこと也、

入梅

賀茂太神ハ山城国の地主神ハ、ゝもゝ也ハ、中の申の日ハ内裡ハの祭ゝ昔物ぐさハ多く書

国ゝ奉る祭ゝ中の酉の日ハ内裡ハの祭ゝ昔物ぐさハ多く書

なるハ中の酉の日也、**灌佛** 仏部仏生会の条に出

字彙 茂ハ艸の豊盛の皃、**草の王** 大和本草 一葉ことふ五つふかき其かるき

なる内に岐わかれ、四月花 **乳柑の花** 和漢三才画会 葉橙ふ似て長く、

俗に草の王と云、○花もまた **沓手鳥** 新撰万葉 郭公鳴立春之山辺庭沓直不輸人

橙ふ似たり、 **哉住濫**、○ことてどりハ時鳥の異名、此鳥前生に沓と作て

責ふ百舌鳥と共に買ふ、價ともらハず故に百舌鳥ハ此

鳥の来るときハ木の下竹の中にかくれ、 **勧農鳥** 杜鵑の一名

出て見えわたる、是古き諺あり、此鳥農業を催さんとめ四五月に来り田とつくるぞと

鳴ふ故ふ名、時すぎぬるぞとのぐすと鳴とそ、故ふ

俱伎羅 契沖の説に、くきらハ時鳥の梵語なりと云

○くきらのくきらふるとて、くきらと云声あり、

時珍曰、按に王安石字説に云、一面の倜と設け物觸る後

鳴くなり、 遍照 **蜘の子**

まるとと誅ス誅義とまるるものゝ故ふ蜘蛛とい〇蠅蛭蟷

蟷蛸 絡新婦の数品ありて皆初夏ふ子と生ス恰も罌粟子の

如し 藻塩草 蜘の子ハ生まれ出て風ふふるまてちりぐくふつ

るよりいつ、 新撰六帖 おもふ世ふうまるたのひてを蜘の子

のちりぐくふこそまくなる

うるちもそ、衣笠内大臣、

五月

薬玉 九月の玉、天暦御記

延喜十三年五月五日丙午、糸所より薬玉を供奉せ

常の如し去年の九月の菜萸と撒て薬玉を以て縣替御

柱の前ふ著る例あり、 枕草紙 五月五日ハ、縫殿より御

薬玉とて、いろ〳〵の糸と組きけてまゐらせれば、御几帳奉

るを中の柱の左右ふ付くり云、 世諺問答 諸病ハ五月ふ

おこる故ふ薬玉と五色の糸とて調へて、ぶら〳〵ふ

ハ悪氣とそらふと申本文侍るなり、 雲州消息 今朝或処

より薬玉一流を給ふ作るふ百草の花を以てし、貫くふ五

色の縷と以て、草虫の形と摸して其花房ふ挿むに芳艶

の美興あり感あり、古人の云續命縷と懸る時ハ人命と益

云、ちの部長命縷の **薬日** 薬草摘 薬狩 世諺問答

糸かよはし見るぐ〳〵、 競馳 五月五日

と藥日といひて、その日一切の藥草をとるなり、荆楚記是昔雜藥と競ひ採夏の小正云、藥と萱て以て毒氣を止除す、

宗祇抄 きそひぐりすると、

萱草花

四五月ふ藥狩とそ云る也

忘草 時珍曰、萱本譜

に作る、護ハ忘あり、萱ふ憂思不能自遣故欲樹此草一玩味以忘憂也、呉人云ふ遼愁と云ふ、其葉蒲蒜の葉の如ふして柔弱あり、新舊相代て四時青翠あり、五月莖を抽んて花をひらく六出四垂朝ふ開暮ふ萎む、秋深ふ至てすなはち盡く其花紅黃紫の三色あり、李九華が延壽書二云、嫩苗を蔬として食へハ風を動し、人をして昏然と醉るがごとくあらしむ、因て忘憂と名く、此も又一說あり、

清輔奥義抄 忘草 萱草とはまつ、兼名苑ふハ忘憂艸とうけつ、

大和本草 諸說を引て本邦の萱草にあらず、然ともを五月莖を抽んで六出四垂とゝるハ、花の形相似たるものあり、一種朝鮮萱草あり、葉冬も枯ず、其花紅黃色あり、時珍の說ふ依る、

雲見草

擧の異名○古事

山遠き軒端ふうゝる雲見草、

栗の花

藝須圖經栗の木高さ二三

丈、葉極めて繁ふ類ず、四月花を開く、青黃色條長ふして胡挑の花ふ似たり、

山梔子の花

時珍曰、梔ハ酒器あり、巵子あるふ象る、故ふ名く、俗ふ梔ふ作る、佛書に其花を稱して薝蔔と云ふ、謝雲通ふ云ふ、林蘭とゝ、葉兒の耳の如く厚くして深緑也、春栄秋萃ふ、夏ふ入て花を開く、酒盃の如し、白き瓣黃の蕊、

車

和漢三才圖會 葉畧濶く對生して車輪の如し、故ふ車百合と云ふ、其花瓣卷轉横ふ垂る、下野日光山、和州大峯の

百合

同上 花ふ黑色のもの絶て少、

黑百合

惟紺色愛すべし、本奥州ふ出、産各異色あり、

桑實

同上 桑ハ蠶と養ふの地多くこれを栽實のこゝるものあり、俗に男桑と云ふ、其桑の葉ハ初青く、日くゝ漸く赤色黑く熟し、味ひ甜く、其木堅實ふして黃白の色、

水雞

同上 竈鳥和名久比奈、鳩の如くふして、頭背翅皆蒼黑の班あり、淡黃赤色を帶眼の上ふ白き條あり、觜蒼くして長く、頷胸の間白くして黑白の班あり、尾短く脚長く、淡黃あり、夜鳴て其ふ連声人の戸を敲くが如し、蓋水辺ニ在て晨と告く故ふ水雞と

名く、本草 多く田沢の畔に居る、夏至の後より夜鳴て秋後即やむ

黒鴨 仙覚万葉抄 黒鴨 一名かるこいふそ、

鴨のたぐひあり、田舎の人は黒鴨といふ 和漢三才図會 軽鴨 全躰黒色頸の後に青色と帯、光あり眼の上に淡黄の條あり、嘴黒くして啄端淡赤く白色にして黒く 黒さうへ白縦の紋一條あり、脚掌とともに赤し、

ええん

梅雨中の空合をいふ、譬ばかきくもりして今と降りうる空のうちに又あるくあるけしきを黒ええんといひ、又に雨ふりあがら折こもりまんとするけしきあると白ええんといふ、夕くもに暮うる空の一きり晴てあるくあるを夕ええんといふ

こゝに あるべし

六月

鞍馬寺竹切 廿日 親長卿記 文明三年

六月廿日、今日鞍馬竹切也、夜に入て護法の儀あり、云々、今に至て今月今日ニ度と修ス、紀事 紀峯延鞍馬寺の主こゝに夏五月護摩を修ス、日中大蛇北の峯より来る、峯延毘沙門の咒を誦ス、蛇おのづから斬て段々となる、此寺の本願人、藤原の伊勢人禁闕に奏して、役夫五十人を發し、件の蛇を静原山に葬る、俗其地を呼んで大虫の墓といふ、今に至て毎年六月廿日、村民藤師堂に集り、大竹を縛て立て、又別に竹二本を堂の中間に縛て横ス、法師廿人、餘白き袴を着し、山刀を佩、疾走に出て、一本の竹を近江と称し、一本の竹を丹波と称し、法師各十人、左右に分て、同時に声を揚、奔走して山刀を以て竹を截る、その疾速なるを、両國の豊凶を占ふ、速なるものを豊と得ることをいふ、しかして後その竹を以、毘沙門堂の前に棄て、又殿ふことを截ることと竹切とのふ、是峯延蛇を斬の遺意なり、又夜に入て、寺僧各毘沙門堂にあつまり、其側に僧達中間に一人を置、各肝膽を凝して、こゝを祈る、件の一人忽に倒れ、卧しらくして蘇生す、是疫鬼を掃ふ法なり、

僧達は寺僧の外下輩あるものとのゝ、

縁起 松尾寺鑑禎和尚、宝亀中に居とつふ、トス雌雄の大蛇あり、鑑禎詩念、一蛇忽ち死す、禎一蛇に謂て曰、此山水乏し、水と施もつて、蛇誓ひて去、俄かにして清泉涌出ス、今の閼伽井是也、寺記

竹切の事、具に蓮花會とのふ、是中興開山峯延和尚、咒法を以て蛇を斬、その遺意なり、夜の護法は開山鑑禎和尚の一蛇と救ひ、護法神とあせし遺意なり、云、

雲の峯 杜詩 奇峯突兀

火雲昇 陶潛詩 夏雲多奇峯 夫木 六月ふもりめしく
えて大きらふあやしき峯の雲のいろう哉、衣笠内大臣、
薫衣香 うの部掛香の条るべし 葛水 天和本草 葛の粉、夏月
冷水に入れ飲べし、
よく渴を解胃を
傷らず功尤多し、 葛の花 蘇頌曰葛ハ春苗を生し
蔓を引蔓一二丈 和漢三才
圖會 花豆の花ふ似て大きく、海月取 崔禹錫食經 海
月一名水母 海月
寧かまと黄色豆の莢の如し、
月の海中ふ在ふ似くり故ふ名く云 滑稽雜談 泥海ふ
生を故ふ備前筑前ふより多く此月取て瓣の葉と多く
割て海月の肉と色み塩と用 傷寒論集成正
ひを只葉と以て淹藏をる也、 霍亂 珍云夫霍亂の病
ハ夏月暑時飲食過度の致を所胃中擾乱上吐下
瀉をる者是也霍と臛と古字通用説文云臛ハ肉羹
也大氏人の食の為ふ傷るゝ所肉食居多故特臛を
舉て一應食物と統る也凡人其嗜欲をる所皆これと
乱とりふ○青藍云俳諧歳時記ふ先板の諸抄香需散霍
乱ふと六月の季に出をといへども今ハ夏ふ入て風流ふ益あり

む今ことのゆへをといへども愚按をるふ先板の諸抄こ
もとと出せる八皆附句去嫌ひの用ひんべきあり、 炭俵集
夕息吹ゝ人も霍
乱の針、其角

四月

山科祭

上ノ巳○社ハ勧修
寺の南の境内往還路傍ハ水の辺ふあり祭る所醍
醐帝の外祖宮路氏夫婦の真神ふて勧修寺家の祖
ふあり、寛平十年より祭はじまりて官幣ありしを今
絶て只神饌と供をるのみ今土人宮路氏の社と八幡
の社と合せて本居神とし九月廿七日こまと祭を是と
勧修寺祭といハ今の世ふ山科祭とりハ北山科諸郷用
神祭あり、九月九日祭礼あり、神体ハ大己貴大王の二神ふして本朝補翼の神也、 八瀬祭 長
○八王子天満宮両社の祭あり、天満宮の宮ハ愛宕郡矢
脊の里ふあり八王子の社ハ天満宮の巽二町ばかりの山腹
ふあり傳へいハ菅家少年の時比叡山法性坊の室ふ入て
學文をその往来休息の處ふ後人社を建て人祭の日大
竹と切てその枝ふ五色の扇挑灯ふと鉤り提て雜しを
ぶら持あるくあり其唱哥俚語方言と以ハ興のつ

矢脊一村九百軒ぞうり、父老或ハ上こる人をの〻ゝ又吾をさーてげらとり〻此俚語も亦他ふ出さるものゝ、

山崎日九使

三日 名勝志八幡宮寺中讃嘆ふ云日の使、四月三日、是一郷万代の勤役なり、山崎より辨備を云、暁陰ふ及て日の使あり、相列て山寄の孤村より来る、儀式京洛の大臣よ同じ、主人冠り紫藤とり付、舞男の巾子ふ櫻と挿む、彼ふ馬ふ騎るなり、二度神庭を迴りて下馬せ一ふ一面ふ御殿ふ相對し、再拜して衣の神と刷ろふ、神事記日の使ハ八幡宮才一の神事也、治暦三年まで猶勅使の義あり、同四年兵乱ふよりて退轉ち、行貴尼屋閑戸の院勅裁と申下し、在地の神人これを勤むるる開交野の土民、御先の役さう、弥陀寺と号ふ白杖を捧て鳥羽木津より出る者、年頭馬長なり、神巫舞人、次第司、藏人司、先行を、色掌人笛と吹鼓とふ、又細男といふ、二ッの人形あり、ふまと武内高良の神、ことそ、此祭も今絶るふ也、○明月記ふ建仁二年四月三日、山寄の民家悉く経営ち、毎年祭礼あり、その道ふ橋と渡ち播磨大路より八幡ふ参ると見ゆ、ハ往昔此祭ふ山崎より八幡の山下まで大河ふ橋と渡ちとり〻今の稿本其遺跡あり、此使と勤ると日の頭と称し、其人と日の長首と云、郷の上首とも其裔と長者衆と云、やまさき郷志山城

山寄祭

八日 摂州府

究めて豪富の輩なるべし

国離宮八幡の寄ふあり、祭る所大山祇の命ふ、延喜式山城国酒解の神社一座、注ニ云亦山寄の神と号、同書山城国と摂津国との境ふ疫神と祭ると云、此社ハ、山州名跡志大神八王神の社、大山寄北の山ふあり、祭る所素盞烏の命の御子、八王子、今土人水居神とも、○俳諧歳時記今日此使ふ童使といふとあり、今式ふ日の使の所ふ記ハ誤也、明月記云建仁二年四月八日午剋、水無瀬殿ふ参上、未の剋出御、この辺の辻祭二社、天王社酒解社御前ど渡さるその中一方頗る田楽ふの供奉副ふ土民ふ此事と営む、云こと是をりて思ふ、矢ふ土人山寄の神と、武塔天神牛頭天皇と合して祭るわれり、

矢數

洛東三十三間堂蓮華王院といふいわゆる得長寿院の辺、同所の池の中社若と観世と、凡此所の矢數毎年四五月永日のうち晴天と候ひてあり、射人堂前ふ居て、今日の昏より翌日の暮ふ至て、通ち所の矢數他ふ超過し

ると天下一とす、

山茗花

和漢三才図會 賣子木 今知佐の木

こゝ處々山中ふかくに高さ七二三大徑一二尺皮黝青白色老るときハ淺褐色中心白く其葉梅嫌木の葉に似たり長く尖りて二すんあり面青く背淡し冬凋こ春生も三四月花をひらく碎花にして小く白く單瓣あり野梅の花に似たり糸稍長く無丈葉と作さゞ但し毎二三攢生のこと實と結ぶ狀小連子の如し初め青く後黑し堅くして肉白色

滑稽雜談 此葉菜類の苔に似れバ名くとゝ云へり

新撰六帖 我こゝく人ものこ

ちふおもふ〜〜白雲ふかき山ちさのこゝ

藪椿

藪椿 薔薇

女貞 山海經云泰山に貞木多しとゝ是ふかし其葉拘骨及冬青に似て冬と凌きて凋まず五月細花を開く青白色九月實ふる

倭名抄 女貞 和名太比乃木 又比女都波木

和漢三才會 女貞木の葉海石榴に似て鋸齒ふし故に姬海石榴と名くとゝ俗に是を藪椿と云ふ然るに野椿の藪に咲ものとて初夏の頃花あるかれとゝ云ふ

「つくゝせ」の説ハ魚簗とゝりゝ夏ものゝ

兼三夏物

魚簗

上り簗と春とゝ下り簗と秋とゝ共ゝ連句にて其季に連る時ハ上下の断りに及ぶ三季に用ふと貞享式に云へり

五月

山田の御田扇

廿八日是ハ伊勢山田太神宮の御田植なり

今式 太神宮の宝前にて神事修行の扇あり是を御田扇と云ふ是と以て田を扇ぐ凡情とゝ思ふも虫を生ずる患なりと云ふ産婦も又この扇を求て相向ふ所の柱に掛ておく産安しとゝ是虫の障ふさゝるべし〇廿八日とい へども日定らず下旬に日をえらぶて是を行ふ當日祢宜數輩御子羅子これを勤む神田ハ高倉山とゝ俗に天の岩戸と いふ所の東の麓豊宮寄にあり件の人々此所に至り御子羅子早苗を植るまねびとゝ思ふ神人後と修ふ太神宮の一の鳥居にて神楽唄をうたふ苗太鼓にて舞ふ長官ハ乘輿祢宜ハ騎馬御子羅子ハ雍樹にて高倉山をもきて鳥居の所に至る素袍を着たる者長さ六尺ばかりの大扇を捧て泰詣の諸人に戴かしむ又一説に凡山といふ所の土人六人女の形とあり伊達染の帷子を着赤き襪とりけ烏帽子といとゝき黑塗の棒とり廻し扇にてあをぎまふ内宮外宮

とゆふ同じ、ちうもども山田の名世ふ高し、其扇と模して桑詣の諸人ふ與ふ内宮八七本骨、外宮八六本骨あり、絹と貝さる馬の画、鯛と鈎る人形の画或八鶴亀ホと画きあるものあり、是と長官宅ホて其日の朝奏るし、

藥草

摘くの部 藥

大和撫子 なの部撫子

の条ふ出、

楊梅 時珍

曰楊梅その形楊子の如くやゝて、味もひ梅ふ似さり、故ふ名ゝ實と結ふ楷の實の如し、五月熟セ、紅白紫あり、紅ハ白に勝ル、紫ハ紅ふ勝る、

魚築打 石を堰木を障て、魚の徙集と顆大ふゝく核細ふあり、

通るものゝ上り築の条ふ委し、

四月

松尾祭 上酉 神社啓蒙

松尾の社ハ山城の国葛野郡ふあり、王都西南を去ること三里余、祭る所の神大山咋神、世二社詣式市杵島姫也云〻 公事根源 乱世以来上ノ酉ノ日云〻、祭式江次第ふ出さり、此祭日吉の神事の如く葵ゝを用、仁明帝兼和四年始て祭るとゝふ、紀事 神輿七基、其内一社、毎年白木と以て新造をこととゝ武御輿とゝふ、祭日神幸畢て後桂川の東ふ捨ル、是日児童再び此神輿と舁ちして後これと砕き破ル、その木片と取て側ふ挿む、これ疫ことらふ児ちとゝ、武御輿民間ふ子ボル宮と称スハ、こゝろハ今日再ひ遊行を猶ふ保ぼゆてるゝ如し、神輿七基、月讀の社、櫟谷の社、三の宮ハ宗像の社、衣手の社、四大神御旅所ハ七ホ朱雀而在、

當宗祭 上酉

〇河内国志紀郡當宗の社ハ、仁和四年四月始て勅請、公事根源 午の日使ゝ川社ホ當宗ハ祖迫き故ふ、人の使両社の祭のゝめふ下向ル、宇多御門の御外祖ホて當宗氏ふるふ、ホて仁和五年四月十四日、祭りをとゝめ行ふ、姓氏録 當宗忌ス八後漢の獻帝より出四世の孫山陽公の後ふ人ニ、

松前渡 南部津軽ふの

商人産物交易の為ふ蝦夷松前へ渡ルとゝハ北海ふ出る、春の間ハ寒気強く波涛穏ふ、故ふ四月ふ出岸し、九月を限ふ帰国ス、

天蔘 和漢三才画會 藤天蔘八按ふ

依てわさると夏こゝ上ると秋こん、山中ふ自ら生ル、今人家ホて栽ると植、其葉蒼黒く拓及び櫻桃の葉ふ似て皺あり、三四月小白花と開く、状梅花ふ

似て小し實と結ふ但し雌雄あり人その嫩葉を取り醬味噌ふ合和てこれを食ふ猫常ふ喜びて食ふ

祭 ふの部神祭の所ふ載せ

五月

松本祭

朔日 淡海志 江州大津

松本村ふ神社あり祭所の神卜平野大明神也人皇十七代仁徳天皇の朝ふ難波の平野と移し奉るとこそ本宮ハ往昔六七丁南の山麓谷ふあるとこの人慶長中今の所ふ移す神輿一基あり今の傍ふ蘇大明神と並祭る

豉 蝦蟆 ひきくらせこ 蟲 團く扁き黒き虫豆ゑどあり水上ふ浮旋つて止まらず筑紫ふて カイモチカキ 江東の俗ゴマ三イリといふ拔るふ是 稻樂まれ〜の訛言ふ人脊純黑く腹ハ淺赤し関東ふて水スマシ 又サウトメと いふ是ふ然るふ得て水をましハ水馬ふと思ふて草色、去ル旬合ふ水馬の題ふ載の花と休ふ野や水をはし、とをさるあり人是 件の取ちひくこと

蔬荊 蘇頌 水中ふ生ず菓蒲葦の葉の如し川て馬ふ抹甚ず肥、春の末白芽を生ず筍の如し即蔬菜也八月花と開く葉の如し子と結ぶ粟ふ合して粥とし食ふ

菽

植 廣韻天豆ハ菽ふ小豆ハ荅ふ 和漢三才圖会天豆大低夏至の十日以前種と下て諸ふ夏至の鳥卵ふハ、既ふ生出る形鳥卵の如くなれば七月花とひらき九月莢と結ハド月ごとと収む

六月

蠅

和漢三才圖会 蠅蒙 一名 醯雞 列子ふ朽壤の上ふ生ず雨ふ困て生じ陽と覩て死も雨雅注ふ飛て磑ひくこと風ふ吹く卷つ〳〵とき八雨ふ吹くとき八風吹んとするとき八旋つて飛て磑ひくが如し一ハ上り一ハ下て舂つくが如きとき八雨ふ吹る云〳〵形蠅ふ似てふく翅身皆灰色背窄其大さ一分ふ過ず

甜瓜 時珍曰甜瓜の味諸瓜より甜し故ふ瓠り甘甜の称を得るなり○王禎曰二三月種と下し五六月花ひらき六七月瓜熟す○美農園ふ菓邵真桑村ふ甜瓜の産美故ふ真桑瓜と名く

花

時珍曰一名象穀一名米囊一名御米其實の形象子の如し其米粟の如し乃ち穀ふ象て供御ふもべし故ふ諸名あり秋種冬生嫩苗蔬ふして食ふ美佳し粟白皆の如く三四月薹と抽で青苞と結ぶ花ひらくとき八

け

四月

罌粟の

苞脱まこ花四瓣大さ佛蓋の如し蘂ハ花中ふあり鬚蘂
こまと畏が化開て三日即ち謝て蘂莖の頭ふあり長さ一
二寸大さ馬鬼鈴の如し上ふ蓋あり下に蕾あつ宛然と
して酒器の如し中ふ白米ありこ極めて細し其花之態當
ふあらぞ白き者紅の者粉紅の者杏黄の者半紅の者半
白の者故ふ麗春といひ賽牡丹といふ又錦被花といふ

蕙 白及

和漢三才會 蕙蘭 紫蕙黄蕙紫蘭即紫蘭

巣ご生ず秋蘭ふ似て潤く薄し色淡言ふし
て縱理あり三四月莖の端ふ白花とひらく香ふし又黄紫の
二種あり云〇按ずるふ和俗蕙と称るもの白及の類ふて
葉大小あり山中ふ生るもの白花黄花あり又盆ふ植て愛
するものふ黄蕙星蕙あり此根菱の如く愛あり蜀本艸ニ白
及の属ふや白及三四月蕾と抽出て紫花を開く參湯
む根菱ふ似て三角あり白色角頭ふ芽ぐと生云〇和俗ふ
紫蘭と称るもの根菱ふ似くるもの
ふし黄蕙星蕙ハ蜀本草の説の如し

兼三夏物

夏籠 夏行

安居 佛者四月十六日より七月十六
日ふ至て九旬の間禁足安居

既ふ夏と結夏といひ既ふ終ると解夏といふ八月十
六日より十月十六日ふ至ると自恣といふ 釈氏西覽 南抄
三云偏ふ夏月約りにもろハ一ふハ無事遊行ハ出世の業
と修もろと妨ぐ二ふハ物の命と損も慈ふ違くこと實
ふ深し三ふハ所為既ふ非故ふ世の謗を招く云 五雜組
四月十五日より天下の僧尼禪刹ふ就て塔推ることと結
夏といふ又こと結制といふ蓋し長雨の辰ふ女て外ふ
出てハ恐らくハ草木虫蟻と傷らん故ふ九十日安居葉
足あり七月十五日ふ至て始て盡く散し去ることと解夏
いふ西域記ふ十六日ふ作と見こて結夏十六日ふ以て始
もろハ印度の法なり中国ハ八月の晦を以て一月こす天竺
八月の滿ると以て一月こす則中国の十六日乃ち初度の
朔日也〇安居 釈氏要覽 南山抄云形心靜攝
と安ことひ要期こふ任ずると居しい八云云

夏鄙

夏書 夏經 夏花

夏行ハ安居也安居ハ王家
故ふ安居の間他の化益と專らふ修行の暇と得て私ふ住こ
等もろ〇夏九旬こハ十日と旬こ九十日あるがゆゑ九旬

といふ在家と志あるは夏と倦し九旬の間飲酒肉閑
と断こゝと夏断こいふ經文と讀誦こゝと夏經といふ、
こゝと書写こゝと夏書こいふ先祖の聖
霊有縁無縁の菩提の為ふする也云云、

五月

削懸の甲

蔓纏輪 けづりかけの甲

元日祇園の削掛と標格こゝ甲のか
さしこゝも是邪気を祓ふ神器ありとて
云云の部飾甲の条と見合せべし、

競渡

塊車 水馬

月令廣義 楚傳云曰競渡ハ越王勾踐ふ起る 歳時記 五月
五日の競渡ハ屈原を拯んとするこゝ以也後世遂ふ戯こゝ
荆楚歳時記 屈原この日を以て汨羅ふ死ふ人舟を以てこれを
拯ハ今の競渡ハこゝと其遺俗也南方競渡のこゝ其舟を
沿めて甦利あらしむこゝと飛鳧といふ文水車水馬こゝふ
將父老土人悲く水ふ瞰こてこゝを見る蓋越人舟を以
て車こゝ檝を以て馬こゝ故ふ鳧車水馬の名あり 和漢三才圖会 唐人未ゞ長嵩ふ寓居して此日ふ逢こゝ
數艘の小舟ふ乗旗幟を立て先を爭ふ排龍々々こゝ
いふ速あるものを以て勝こゝ是競渡あり蓋屈原の為ふ

龍を逐ハ

梟羹

の意ゝ、

梟羹 漢史 五月五日梟の羹を作ふ百官ふ賜ふ其悪
鳥の故小五月五日これを食ふ古ハ梟の羹
梟の炙を重ぜ蓋其族類を滅せんを欲也

獣狩

部駆狩の
条ふ出

六月

解齋御粥

江次第 六月十二月中卯後暁 公事根源 神今食の次のこゝ
御ふ白まゐる御座の大床子ふて墓盤一脚をゐて供也
あゝきゝらけふかる和布の御汁をそへゝ三口食て御
箸をこゝ 云云 神今食をて後齋ある八中こゝのこゝ
解齋の御ゐをを供して

毛蟲

陳藏器曰毛虫繭こ
作る形毳の如こ或
八神齋あるへゝぞとあり、

小雀甕 好て果樹の上ふあゝ人小こゝふ蠶の如し、
身面背上五色の斑毛あり毒あゝて人を刺螫老人こ
欲るもの口中より白汁を吐凝聚て硬く正小雀の卵の如
其実甕を以て覆こゝ中ふあゝて蛹こ成も蠶の繭あるが
如し夏月羽化こ出て蛾こゝふる、

削氷

枕草紙 あてこゝる
子こ葉の間ふ放ス蠶子の如し、 けずりひの

にのまつらふ入ておさらしきかゝまりふ入こゝ云
○水室の水とけづりくぐきたるをいゝかろと、

月 佛生會 八日

浴佛 灌佛 龍華会 花御堂 甘水 佛の産湯 五香水

○九諸寺院灌佛会と修ゝ諸品の花と以て小堂を飾る是を花御堂といゝ其内ふ小き釈迦の像を安置し甘草ホの香水を灌ぐ是を甘茶と云 事文類聚佛運統記 周の昭王二十四年甲寅四月八日中天竺国、淨飯王の妃摩耶氏太子悉達多を生ミ云 浴佛功德經 青淨慧菩薩佛ふ白して言く世尊若佛在世及ひ滅渡未来世の中諸の衆生云何う佛と浴せん佛言く我汝う為ふ浴佛の法を説ん諸の供養の中最殊勝ともし衆の香湯と為り淨器の中ふ置き先方壇を作りて妙牀座を敷き上ふ佛を置き諸の香湯を以て次第ふ灌ぐ是を浴し香水と用ひ畢て後淨水を以て其像を淋洗し人各洗像の水を少しづゝ取て自らの頭上ふ置く初像上ふ水を淋ぐの時ふ此偈を誦して云ゝ我今諸の如来を灌浴ス淨智功德莊嚴五濁の衆生垢を離るゝを願くハ如来の淨法身を證せん云云 ○龍

華会 弥勒下生成仏經 時ふ菩提樹あり名て龍華と云 慈氏弥勒翻して慈氏とりふ大悲尊下ふおいて正覚を成ト云云是ハ龍華樹とりふ木の下少て弥勒始て正覚とゝもゝ給ひ此處ふ三度説法の会あり是を龍華の三会といふ 四月八日ハ釈迦降誕の日なれバ釈尊を浴し奉り、富来弥勒ふ逢奉る結縁ともなれバ、四月八日ともくふ龍華会とりふ

深見草 牡丹の異名 和名抄 和名布加美艸

周茂叔愛蓮説 牡丹花富貴者也 書言故事 多く富貴の家、彫欄丹檻の中ふあり故ふ花富貴ふる者こゝ云ゝ

不如歸 ほとゝぎす

格物論 啼き苦むときハ樹ふ懸つて、謝豹思歸集 ほとゝぎすの音不如歸と云、

蕗 ふき

崔禹錫食經 蕗葵ふ似て圓く廣く其莖嚼ゝべし、

物 風爐茶 茶湯秘傳抄

四月朔日ハ更衣して、ろづ夏ゝまへなる日ゝ三月まて囲爐裏の茶を服し爐とふをぎけゝより風爐と立て茶を愈数奇屋の窓障子やでも簾ふゝよろゝ涼しくなまて

兼三夏

客ともてなし惣じて瓜爐の茶ハ朝茶湯多く用ふるなり
畫とかるとなり瓜爐ハ奈良瓜爐と多く用ふるなり

毛吹草 常の俗稲四月より九月まで用ふ

蚋

和漢三才畫会 蚋子 蚋蟆子 俗ふいゝ布止 夏月山谷中ふあり蚊ふ似てふく脚をまゝと黑色晝ハ一ハ多く出て人と螫腫痛むこと最烈し

蚊子木、蚊

毋草、蚊毋鳥

五雜組 嶺南ふ蚊子木あり葉冬青の如し實枇杷の如し熟するときハ蚊いゝ塞北ふ蚊毋草あり葉の中ふ血蟲ありて化して蚊とかる江東ふ蚊毋鳥あり蚊と吐こと一二升云云

滑稽雜談 和俗蚊毋鳥と呼て佐〻鳥とりふ今聞ふ都々都々と啼ものあり

海蘿干

和漢三才畫会 鹿角菜 和名豆乃赤太 本草ふ東南の海山石崖の間ふ三四寸鐵線の如く鹿角の狀の如し紫黃色土人采て曝し貨海錯とし水を以て洗ひ醋ふ拌すぜれハ脹起して新しきかゝ如し味極て滑りふ美也若久しく漫をときハ化して膠の狀の如し女人以て髪と梳るふ粘あり云云

五月

鳥車

けの部 競渡 粉團を射 天皇遺事 唐の宮中端午の条ふ曰、金盤中ふ釘を纖妙愛をべし乃チ小角弓と以て是と射る粉團ふあるるものハ食ふことを得蓋粉團滑膩ゆして射ゝくし郡中盛ふ此戯とあり、歳時雜書 端午ふ水團と造る又白團と名く或ハ五色の人獸花果の狀と雜ハ最精しきものハ滴粉團と名く或ハ麝香と加ふ又乾團水ふ入ざる者あり、

藤の森祭

五日 神社啓蒙 山城の国紀伊郡深草山の南ふあり祭る所舍人親王、○延喜式ふ載る所の真幡寸の神社三座是之別雷神 槇毒神 後ふ三所の皇子を合せ祭る三所の皇子ハ早良親王伊豫親王井上親王又祭る所三座舍人親王、早良親王、伊豫親王 紀事 是日神輿三基遊行芝家藤野井氏甲冑を著し馬ふ乘て供奉を帰路れのゝく稲荷の社禊門の西並藤の社の馬場ふ於て走馬を祈願ある所の人あるいハ矢を又おのゝく甲冑を著し馬ふ乘て馳駈をること前ふ同じ一説ふ藤の社ハ早良親王を故ふ弓矢神と称ス今日供奉の人甲冑を著をゝこと是蒙古

征伐早良親王歸陳の狂心供奉
甲冑を著せるを此神事ふ始る、

富士垢離

紀事 五月廿五日より六月二日ふ至て富士の行人毎日河辺ふ出て垢離とり〳〵富士權現を遥拜を、是富士垢離ふ初まりしと云へそ間男女行人をこのゝ病を祈福詣ふ初まりしと云へそ間男女行人をこのゝ病を祈福と祭し行人をのゝ處の紙符を願主ふさゞく、又祈願の人こゞら行人ふ交つて垢離と修し酌ふ長と先達と称ス其会する處と富士小屋と称、

藤撫

子ふの部撫子の条ふ出、

六月

富士詣

紀事 六月朔日より廿日ふ

至つて諸国の民人富士山ふ攀登る凡富士山ふ登る四道あり駿遠豆甲是ふり山ふ登るもの其方角ふより、その便ふ隨ふその麓の領主多く人力の及ぶ所八坂路を修せ也四道の麓行人止宿の家あり之れと坊と云ふ山伏先達なり、參詣の人ことと饗導して登山を、昭午坊と出てその夜明るふ及で山上ふ至る凡行程八九里山腹三四の間大木森蔚くこゝより上樹木なし畫八登る小堪ぞ故ふ半夜ふ入て登る土人坂路中間の岩

窟ふ小屋と構へこゝと篠小屋と云がし風烈しき時ぞ
ばらく此室ふ入屋主雪水と以て茶と煎じ之れと飲ぐ、
山上所々ふ炭地炭社あり絶頂ふ池あり周二里余池の中
常ふ烟ありこゝと塩硝硫黄の氣ありあり人登るあり
この池をあつる若凡丙ふ逢ふ〻〻〻

始離ふ及ハそ他邦より来るゆけも近江の上砂に繁て、山上ふ登ると近江の人ふ准じて平安と得るこゝハ 緑記 延暦二十四年記曰、我と浅間大神と早くと平城天皇大銅元年社と立て是を祭る本地大日如来 神社啓蒙 間の社八駿河國不盡郡ふあり 宮記 富士 権現と号す大山祇女木花開耶姫あり

宵草為

螢 月令 季夏腐草為蛍 註云暑湿の氣に得るゝ故ふ腐草ふ為ふ此遊びとふも江戸大坂の者妓女及酒肉と舟遊暑を避ん

風蘭

春雇へ日午ゝう舟を泛浮ふ帰る三の舞最良あり、 春雇類書 一名挂蘭 名花譜曰ふ〻ふて蘭ふ似さう、枝幹短うして勁し、砂土と用ひも竹の籃ふ取てこれと貯へ、露ある処ふ懸て朝夕水と洒くこと此物山石の傍ふ生も取来て接擱の皮と以てこれと包ミこと是と樹丁及び簷の下ふ掛く、凡と好て茂盛も故ふ風蘭と名く花紫蘭ふ似て軟横ふ垂る五六月花と開く微香あり、

振舞水

夏日市井の間ふ瓶とわくして、こゝふ柄杓及び茶碗ホと添往還炎暑ふ苦しむ人こゝ

てこゝと飲しび是と振舞水と云ふ、五元集 振舞水の一下向道、其角

月更衣

公事根源 けふハ衣ごあれ宮中所この御装束掃部寮あらこゝ御殿のかゝびら表生絹ふ胡粉ゐて繪とゝく壁代ふ撮も御畳ふ御服ハ御直衣御もゝ〻の〻あらゝきと敷ゝまゝ御張袴内藏寮より奉る女房のきぬ袷のきぬとも衣ごのむとゝからと衣まゝぶしし裳ハ上蔦薄裳ふ上蔦薄色常の如し、

氷と供

延喜式 主水式云九御氷と供もるハ四月一日ふ起て、九月三十日ふ盡 云氷と貢ぐ處々、同書云山城國葛野郡、憶岡の氷室愛宕郡小野の氷室栗栖野の氷室土坂の氷室堅木原の氷室、同郡石前の氷室大和國山の辺の郡都介の氷室河内國讃良郡讃良の氷室、近江國志賀郡部花の氷室丹波国桑田郡池辺の氷室、此十ヶ所ふり云云

江州八幡祭

中卯 神社啓蒙 法華ゝ峯八幡宮八淡海国蒲生郡八幡村ふ祭る所の神石清水ふ同じ 社記 一条院の御宇勅請

長徳二年放生会と行ふる寺號慶長年中、関白秀次公、
この法花ゥ峯ふ城郭と構ふる時、上の宮を移し下の宮ふ
合せ祭る、其後
御當家御陣所となる、其時今の彩山ふ移さるる、別當願
成就寺、往古聖徳太子開基の寺院、江州ふ四十八ヶ所あり
其四十八の終りふ此きと連給ふ、故ふ願成就寺の名ゥり、
神社の傍ふあるを普門院といふ、成就寺兼帯くやく、
八坊舎五十五ヶ寺まありしを、織田信長の兵火ふうるを悲く
滅亡を、氏子をくく十三ヶ村、外ふ新郷として、舟木上田林の二
ヶ村と加ふ、例祭四月中の卯、夜宮ふ羅あり、上の宮祭両日
下の宮祭両日、その中間一日と御旅祭といふ、化表と楼門
との間ふ於て、九十三間の炬火と立、高さ六七間ぐらい、七
度半の使と合図ふ炬火ふ火と點じ、村々の祭太鼓を、一
三間の炬火を點じ、三社の児三人と拝殿ふ座せしめ、この児
どもをして太鼓を拝殿の辺を拍子躍あり、エイくサ
ヤウと拍子紀事八幡祭の神輿立基、越智川と渡る、
五香水ふの部佛生会り祭ニ出、高野花供昔元亨釈書弘仁年中紀州

ふ遊びて、勝地と相る、高野山ふ登りて金剛峯寺と創を
紀伊国伊都郡高野の峯ふおいて八定の所又曰釈観賢憑酔寺
と云ふ、表性灵集の座識
聖宝の上足なり、延喜二十一年、醍醐帝の夢中ふ、弘法
大師奏して曰、我衣鉢を拂ぬる、願くハ汝くせんと、こうき
ふ、ありて釈法の徒尤き者ふ勅して、紫衣一襲と野山
ふ送る、観賢選ふ中りて山ふ入り、入定の窟と啓くふ、雲
霧隔るを如くして儀容と看ば、観賢礼して曰、少年
り道と修し、梵行玷なし、況て遺法と奉じ、歳月と累ぬる
ふおいてをや、と、黙許をると、須臾やして、真儀漸く見ゆ、
霧歛りて、月の彰るゝが如し、観賢頂礼して仰ぎ瞻るふ、鬚
髪甚だ長ず、便ち剃り落して、衣と換るふ、諸衆こうこと見る
とあさかも、後世疑謗致さんとて、観賢晋議して、石と重し
固く封ふ、○今高野山室亀院の住持、代々此事と預る、八
色の御衣と奉る、是と花供といハ、金堂ふて学侶方の僧衆
師会と行ふ、花を供をるの日と、大師の駒牽公事根源是八四月ふ
御衣とうるる日と、同日のゆをるあるを、
待るるもあり、八月も名ハ同じけれども、心ハ大ふ異なり、天皇式
徳殿ふ幸を、王卿以下床子ふつく、左右の御監御馬の奏

と犯る、馬の頭庭ホ渡り御馬と引渡セ、自馬の節会の如し、近衛兵衛の射手南ホやくり四府騎射の文を奏左右の大将を〻と奏聞セ、近衛少将以下番長以上六人東遊ひと奏セ右近衛納曽利狛犬と奏セ、雅楽蘇芳菲駒形と奏セ、この駒寧ハ来月の騎射の馬、射手人ホと御覧ぜらるもの、良覩の頃よりもめらるホの月の時ハ二十七日、大の月の時ハ二十八日ホ行ハるゝ云〻

木下闇 茂林して暗きとゆふ万葉ホ六本の晩とゝゝり、木晩の暮闇有

尓霍公鳥何処乎家登鳴渡良之

柑類の花 柚金柑蜜柑等へて其頭假字の部ホて見

鯔 和名抄 鯔和名伊師布之 崔禹錫食経 鯔魚性伏ろべ〻、沈して石間ホ在りのく 遊覧志 石首魚

毎歳四月海洋より来る、数里を綿直して其声ハ留の如海人竹筒を以て水底と探り、其声と聞り網を下し流と截て〻

戀〻鳥 拾遺 伊勢の御うゝ

ほとゝきすの異名く

奉ゝさるみ子のゝくゝりて又の年ほとゝきすと聞て、

ホその山ゝえてきゝらんかゝ戀〻きて戀〻きゝ人のうゝと

らゝん」此哥より戀し鳥と異名せ〻ゝゝし、

五月 **五絲** ちの部 長命縷の条ホ出、

今年竹 若竹 時珍曰土中の包筆各時を以て出旬日籜とおとして竹となるゝ云〻是即チ今年竹若竹ゝり、六十年ホ一さひ花咲實を結ふ其竹則枯るゝを綺とゆふ竹實と結ふを籜とゆふゝを篠と云、大ゝるを蕩とゆふり、此乃陰濕の地日ホ晒さゝて起る苔蘚ゝ、石蕊時珍曰、其狀花蕊の如し、○玉柏 弘陶別録 石上ホ生ス松の如し、高さ五六寸花紫あり、○桑花 日華本艸 桑の樹の上ホ生する白鮮也、地錢花の如し、（本邦ホも亦屋上庭園石上樹上ホ多く苔と生す、五月淋雨降時毎ホ繁茂して花の狀の如きものを生ず倭名これと苔の花とゆふ、

苺の花 本草綱目 地衣草 大明日華本艸曰

胡麻蒔 和漢三才圖会 胡ノ三色ありとゆふ夏至半夏生の交ひホ種を下し、六月花と開く、七月實熟セ、最早晩の二種あり、

六月 **氷餅祝** 毛吹草 勝尾寺の氷餅

滑稽雜談 和俗今日一日ふ至りて舊臘雪水ふ製しる扮餅或ハ勝尾或ハ富士山より出る水餅ふを祝ひ食して、今日と呼て氷室の節句とも禁裏堂上ふハ承らず、

御射の御ト

十日

江次第 御射の御ト六月十二月十日此日官奏ある分らず **弘仁式** 神祇官中臣ト部ふと率て六月十二月一日齊とし一日ふ九日トひ畢て十日ふ至と奏す、**公事根源** 神祇官の官人一日より本官ふこもりて是とトふ上卿ふ向ふまわりて内侍ふつきて奏聞す、是ハ主上の玉躰ふ御つきもとうらふひ奏する義ふ人白鳳四年ふ始まりておこなはる、

黄雀風

五雑組 六月中ふ東南の風あるを是と黄雀風とふ、

極暑

梁元帝詩云季夏煩暑流金爍石、

香薷

時珍曰香薷ハ夏月解表の藥冬月の麻黄と用ふるが如し氣虛の者尤多く服べからず今人香薷の元氣と傷るとをもて有病無病ふ拘らず用て藥ふ代て謂らく服して暑を避くと、**五元集** 香薷散犬ぐねぶ川て雲の峯、其角

香薷

宗奭曰圃と作アて香薷と種暑月蔬菜ふ葉ハ茵蔯ふ似て花紫ふして辺ふ連アて穂とあり、

心太

ところてんありとの部ふるべし、

江

四月

えびす草

芍藥の異名なり **御傘** 梶原性善が方安方ふとらるふえびすもくりの誤

えびす草

芍藥と名付くふ云云、**和名抄** 芍藥 和名衣須久須利

烏帽子魚

豆相の海辺鯉先寄らんとするとき小一物流れ来る大さ二尺ばかり形烏帽子ふ似て左右ふ紐の如き物ありその色瑞理紺ふして光澤あり是と鯉の忘ぼうとふ漁者この物の漂流するを期として海上ふ櫓を構へ鯉の寄ると見る是と鯉見とふ西三日もきて獲して大ふ鯉と獲るとき烏帽子魚と名ることなり、

蚕簿

和漢三才画会 蚕箔和名衣豆良趣ハ蚕簿と架も柱なり蚕簿ハ

兼名苑云蚤と養ふ器に其上ふ施し繭と作らしむる者し、**枝蛙** あの部西蛙の条こゝに、

五月

豌豆 和漢三才圖会 花瓣蛾の如し形外白く内ふ淡紫あり中心黒色其實褐色六月是を収め取る、

六月

江戸浅間祭 朔日○江戸浅間の社ハ浅草砂利場の後ふ

あり是を浅草の冨士と云又駒込ゆも同社あり祭る所ゆゑ共首及高田の馬場又鉄炮洲ホゆも同社あり祭る所ゆゑ共駿河ふおゆ〻今日麥藁ゆて龍蛇と作て是を篠ふつけて鬻くゆ此多し、条詣の人是を買ひて土産とす、

江戸天王祭 相傳ふ元禄のもしめ大ふ流疫ゆ、よりて官ふ請奉りて神田明神の社地ふ勧請ある處の、祇園三社の神輿を出して街ふ渡御し奉る、こゝより後毎年祇園会と修す、先大傳馬町御旅所、神輿一基五日出輿八日還輿小舩町御旅所神輿一基十日出輿十二日還輿南傳馬町御旅所神輿一基七日出輿十四日還輿あり、いづれも神輿還幸の時そのゆよりその町々と渡御社人裳束馬上にて、供奉鉾三本氏子是ふ随ふ神輿渡御の町々八一日廃務也或ハ門ふ竹を植る家あり是忌竹の意なるべし其外浅草御蔵前千住品川四ツ谷ホゆも此祭あり中ゆも品川の神輿ハ海汀と渡御も天王祭とハ牛頭天王の祭とい義、祇園会といへども〻て天王祭

とふハ江戸の俗の方言なり、

江戸山王祭 十五日

○神社江戸永田馬場ふあり祭る所近江日吉の神と同じ、別當勧理院僧正神主樹下采女正その外社家數多あり乃官より神領六百石を附せらる當社ゆゆ〻八入間郡川越仙波とふ所ふ行りその地仙臺仙人の住せし古跡なりしと慈覚大師草創ありて星野山無量寺と号し天台の灵地として山王と勧請あるその後尊海僧正中興し三十余院甍をあらべくり人皇百三代後花園院長禄三年太田道灌江戸の城を築くの後文明年中仙波村星野山の山王と勧請して江戸の城護神ともその地今の紅葉山とふ、御當家御在城とあ〻くまふゆらそ城西の見塚ふ移さる明暦四禄の後ふくび溜池の上ゆうつさる是今の社地なり江戸中一の大社神殿巍々として石の鳥居五十三間の

石階松柏枝とつら行て上久くり、祭礼六月十五日官祭し、神田明神と隔年ふ行る凡祭祀ふ預るの町、南ハ芝と限り、西ハ荒町、飯田町と限て、東ハ傳馬町、濱町辺と限て、北ハ内神田と限りとす、神輿三基、祭礼の番組四十余番、各花ごし山鉾の一本練物ふと出て、神輿渡御の町々ハ宵宮より桟敷を張へ、幕を張、毛氈を鋪つらね、軒ふ多くの提灯を釣る、十五日の未明先榊渡る、太鼓是ふ添ふ、其次稚の造り物ある引山その次諫鼓ふ鶏の引山とくさ、其外の番組ハ例年の定めあり、此祭ふ糀町より、朝鮮人来朝の形ふ出立ち、布を造りし大なる象の練物と出て、近年引山の外神幸の道本山と出て、永田馬場より御堀端と歴て糀町御門ふ入上覧所と渡て竹橋より神田橋、鍵倉河岸と過、今ハ竹橋ふ常盤橋へ出る本町壹町目へ出、本石町三町目、小傳馬町、大傳馬町旅籠町一渡る、傘鉾大吹貫幟屋臺引山甲冑の法師ふ、あり、氏子ふ預る處の諸侯も、又警固の武士とくさし、長柄鎗と立つらねて群行し、芳塲町薬師堂（山王別當の別院ふり）の境内ふて、神饌を献じ畢りて、八丁堀日本橋筋を中橋へのらし、夫より本山へ還幸也、

炎天 極暑

の天と

いふ、

四月 手安天神祭 午の日

○江州野洲郡江辺の庄ふあり、永原村、北村三ケ村の氏神く、鎮座年月詳ふらず、明和年中まてふ七百余年ふ

ゝとい ふ又永保年中とゝ ゝ ふ、四百年以前、延久五子年十月十六日永原越前守再建ふ、その後應永廿六亥年六月永原越前守雅行修補ふ、又明應七年四月十四日同氏重秀改め造る、この重秀も越前守ふ仕じ、廿八万石余領ふ京極佐々木の同流ふて、永原ふ住ふ依て本居神とも、四月午の日祭礼、神輿二基渡御あり、例祭正月十日より十三日よて、凡三の午ふ、行あり、巻頭ハ時の地頭の句を定例とも、此所北村季吟出生の地ふ、又平清盛の妾妓王も此地ふ出生ふ、妓王ハ家ふ奉行、判物の大繪図、氏子三ケ村ふ傳来をと、別當實光坊の説ふとも、祭式未詳、

繡毬花 和漢三才画会 粉團木の高さ五七尺、葉ハ箱根楊櫨ふ似て團く、皺文あり、四月花をひらく、初ハ淡青色、後正白ふなる、攢簇て團さ二三寸、一種小粉團とてあり、木の高さ四五尺、葉狹く長し、棣棠の葉ふ似て粉團ふ似て小く白し、大さ半

むかりと もぎぶく

五月

天中節

提要抄 五月五日午の刻と天中の節とをいふ

天南星

蘇頌本草經 天南星は処々の平澤にあり、師と畫かの部艾虎の条をみるべし

つゝ、三月苗を生ず、荷葉に似て其莖高さ一尺以来、葉蒟蒻の如く、両岐相抱く、五月花を開く、地黄に似て黄色、七月實と結び、穂とをなす、石榴の子に似て紅色○時珍曰一名虎掌、葉の形ことごとく似たるゆゑ因てなり、南星とは根圓く白く、形老人星の如くあるゆゑに南星と名く、云云 和名抄虎掌 和名於保保曽美

鐵線花

和漢三才圖会

鐵線花、按ずるに苗宿根より生ず、一莖に三葉、微毛葉の秋に似て小く、莖細く靭甚し、故に鉄線と云ふ、俗称て蔓無く、其葉架に倚て繁衍、四月花を開く、蔓の下に六葉あつて莖を抱く、亦一異あり、其花白色六の瓣平に開て、蘂四く紫色、最艶美、其蘂綻ばゞ天蠶糸を綟て纏と なすに似て、其中に子あり○千葉鐵線は小六の瓣にして白色常の如し、内の瓣中まゝ白色、千葉短く細く酷ひてひらく、青き蘂あり、外の瓣既に落ちゝ内の蘂ひらく、

六月

天滿御祓

廿五日○當社は摂津大坂西成郡天満にあり、祭る所の神天満天神 揚陽群談 社家説に曰、天満宮の權輿は人皇六十二代村上天皇の御宗天暦年中この地いまの大阪の松原に於て一夜に松茂生ずその梢に昊光赫々たりと人々怪みて帝都に告て奏聞を遂く、帝即日勅使を下しこれを時に神託あつて云難波の梅をたゞひ築紫よりこゝに来る菅丞相覺てその由を奏を依て菅丞と此地に鎮らる云云○例祭六月廿五日遂物車楽は水陸ともに渡御して神輿の御旅所に出、往還川舟は數万の提灯群集して船多し、

天貺節

書言故事 今要云宋の真宗祥符四年詔て六月六日を天貺の節とす、

四月

袷

文選秋興賦 卿袷衣 李善注云袷衣無裏 ○九四月朔日を更衣とす此日より袷を用ひ端午に至て布袴を用ふ、

網鳥

ほくぎ その異名を藻塩草 是は時鳥と網を取て明年の夏鳴せんと云心なり

青簾

青葉の簾 藻塩草 青葉の笠とは翡翠の簾 翡翠の簾 笠とて四月朔日新しき笠をとり

くるゝありと云ふ一説ふ加茂の葵と四月朔日翠黛ふ
ゝけらゝ故青葉の笠とゝ云ふ一説ふ夏山の翠ふるを
いふ云ふ○青蘭云元禄年間の匂ふ谷ハ雅乳母々所ふ
青笠をぬしとしるたぐひの作例あまたあれど天子の御笠ノ
とのこゝろふといへる説いとゞめり、

扇と賜扇の拜

旬しとる条ニ

扇の部 仏生会

見る

甘水

ふの部 加茂

べし、

葵祭 葵蔓

かの部

祭の条下

雨蛙

枝蛙 和漢三才画会 背青くして腹白し大なるものは寸半に過ぎ
らるべし、雨ふらんとするとき鳴故ふ雨蛙と名く 大和本草 土
鴨雨蛙とゝふ最も小なり色青く木の枝ふすむ云云是
枝蛙なり、

青ぎし

枕草紙 五月五日のあやめ
条ふ青ざしといふものと人のも
て来ると青きさうすのうと艶ふるまぎりのさふ敷て、
これまぜこしふさふ久ばとてまゐらせさもばこ云云季吟
云青ざしハ青麥ふて調じとる菓子なり、

蜀葵

草葵 タチ葵 此二名亦蜀葵とゝのゝく○特珍曰

春の初め子と種冬月まゝおのづから苗と生ず蝟ふる時
茹ふべし、五六尺ゆて花さく、木槿ふ似て大きく深紅浅
紅紫黒白色單葉 千葉の異ありて、

兼三夏物

扇

雜 五

俎 大明以前摺扇ゆ〜多く團扇と用ふ○扇車扇引
扇すまひ以上増山の井ふ出ゝ○このもとゝ 枕草紙 ことの
のゝ〜ゆう云云河海云蝙幅と見て扇と
作ることゝあるべく、依て夏の扇の名物ゝ

汗衫

釈名 衫ハ袖の
端あらぎゝ云云 昭潭志 立山縣の里婦縷績ふ長せふく
竹と以て衫と為ゝ暑服ふ充ゝ衫ハ小襦〜○按ずるふ和
俗ふいふ襦袢管襦袢

汗巾

長サ一二尺の布の両端と縫ひ孔と用ふ

暑

山堂考索 陽事と用ふる時ハ則日進で北ふ
食進て長し陽勝る故ふ湿と為り暑と為る、

編笠

和漢三才画会 臺笠今莞と編てられと作る竹の
骨と用ひず、呼て編笠とゝ以て暑を禦ぐべし、

洗

鱸 和俗夏月其肉と魚鮮ふ作ゝ洗ひ淨め鼓酒ふ
ふ侵しこゝと食ふこゝと洗ひ鮓とゝふ、

青

鷺 和漢三才圖会 蒼鷺、鷺ニ似て小く、色蒼黑し、以上和名抄 今蒼鷺と称る者鷺ニ似て大く、頭翅皆蒼黑、項冠毛も亦同色、頭上胸ニ至て黑毛斑々たり、翅の端正黑、觜の外黑く内黄、腹白く、脚緑ゐ人毎に水辺と歩て魚と食ふ、飛ぶときハ高く擧て遠く翔る、この内最美、夏月ニ至て貴ばる、

安居 けの部夏蕓の条ニ註す、

青山椒 和漢三才圖会 本草に秦椒蜀椒の二種あり、秦椒ハ其葉對生ス、刺あり、四月細花を生じ、五月實を結ぶ、生ハ青く、熟すれハ紅ゐ、蜀椒ハ釘の如き刺あり、葉硬くして滑ゐ、四月實を結ぶ花ハ小く、但枝の間ニ生ず、其實ハ紅熟せざるときハ青山椒と時珍曰、灰藿、四月苗を生ず、蔬ニ可し、

藜 灰藿の紅心あるものハ莖葉稍大ゐて、嫩きときハ亦食ふべし、老るときハ莖杖ニ為べし、○藜の杖ニ為る日ハ、春ニ入て蚋を刺す、

鮎 若鮎ハ鮎と呼て春ニ入て鮎とむかうゑハ夏より落鮎渋鮎と呼て秋来ます、

五月菖蒲と

獻 和漢三才圖会 仁德天皇三十九年辛亥五月始て菖蒲を献ず、続日本紀 聖武天皇天平十九年五月天皇南苑ニ幸して騎射走馬を觀たまふ、是日太上天皇詔して曰、昔ハ五日の節、常ニ菖蒲を用ひて縵とまことのこころ此事やゝ久、今ハ改て後菖蒲掛ざる者ハ宮中ニ入ことなかれ、

菖蒲の輿 公事根源 六府あやめの輿と南殿の階の東西ニ、四日ハ朝餉の庭ニ是とゝろ、主殿寮所々ニ菖蒲ゑく、○菖蒲の御輿の料木ハ梅ゐ畑ゐて供奉人、今出川家ニ納む、即衛士ニ遣ス、衛士ゑと作る、其法根菖蒲を連ねて棟梁と、細木を以て柱とす、廻ち小殿の形と作て、檜の葉並ニ菖蒲と以殿宇と菅、衛士禁裏ニ献ゐ、

菖蒲 時珍曰、菖蒲ハ蒲の類の昌盛ゐるもの故ニ菖蒲と名く、和漢三才圖会 菖蒲屋の擔ふ、ゑくりのく、或ハ竹の日、菖蒲ニ浴し、或ハ石菖の根と以酒ニ漬し、こゝとと飲ハ邪氣と懷ニ入ゝ、

菖蒲人形 此人形ハ力士の形と模して作る、多く江戸ニ、元禄のころ、そハ市中と賣ゐ、反古集 端午の部

ふ「五月雨や傘に付くる小人形、其角」とあり、

菖蒲

今八十軒店尾張町其外便りよきと衛を美ど賣と

沼沢江池まことふ下ったくちて引心と寄おもめ〇出

引こと草末との露や五月雨ふまきくる北野のあやめ

資任

菖蒲の鬘　菖蒲を献と之る　**菖蒲**

条下とうぶ

の案　延喜式　典薬寮式三云五月五日菖蒲生菰黒木

の案四脚苧六両黒葛四竹を進ず省輔以下

寮頭ことふ執る人進み訖りて　**菖蒲の枕**　続浴

即退出せ輔曲ったこれと奏す。

やめぐとひと夜ぐろとの枕ぐふむすびもこそめ夢のこし

かさ」前中納言雅具　後水尾院當時年中行事　あやめの枕

落ちむ一對ひ御枕ったふあり。こすやうは極鵜調進を御

枕は句當の内侍ったうとすく其様あやめと九ゲ五六すど

かったふ切て五すむったふあとときこと紙ひ　**菖蒲湯**

ねりあそ結びて両方の小口ふさ〜くとむ云

同年中行事　五月五日の条三云けふはさったふの御湯まゐる

ふべのさったふの御枕一對とうすやったふつしあったる竈殿紙

ひねりを引ったって御湯ふ入る　大戴礼　五月五日蘭と

多くを人沐浴せ、云云是菖蒲と以菊の菓ふ代るあり。　**菖蒲**

蒲の占　三潮草　女兒の戯ふあやめを結び唱へこりくお

もふと軒のたるあふとったったんうあったったったったぶ

の糸」如此りひて一事と祈る願ふ所成るもの　**菖蒲浴**

は蜘蛛あ川て網と菖蒲のう〜ふ曳く云云

衣　京師の俗端午ふ菖蒲浴衣同帷子と與ふること必

家々ふありとて官家ふは菖蒲重と朝服あ花

田萌黄のう〜根菖蒲とふ表白裏紅又櫻衣とふ表

紫裏薄藤又菖蒲重紅梅を用ったったったったんど五月五

日着ったる処の常の浴衣帷子と菖蒲浴衣　**菖蒲酒**

菖蒲帷子とりふのこて掌李の色と用ったふ非ず

荆楚歳時記　端午ふ菖蒲の、山の澗中ふ生る一寸九節

の者と以て或は鏤ったり或は屑ったって酒ふ浸め以温疫と辟

く。　本草　石菖蒲一切の悪と除く端午の日菖蒲と

切く酒ふ漬てったと飲む或は雄黄と少しだったう如ふ

棟と佩　**棟葺**　證類本草　五月五日俗人棟の葉と取

てったと佩まは悪氣と逐ふ〇時

珍曰茶ぎるふ羅願尓雅翼ふ云楝の葉と以て物を練べ設ふんと楝と名く其子小鈴の如し熟する時ハ黄色金鈴と名く形と象るく

増山の井 今も片田舎ゆゑ端午にあくちの葉と軒ゆゑ所侍り今せんだんの木といふものなるか

有無日 廿五日

公事根源 これハ村上天皇の御宇忌の日なり申ハ廢務日宮中ふあるべし

いのらさるもとゞも政をなすなと侍らぬ又急事なとあるとし餓ふ政事ありさそいうはしの日と申く

楝の花

蘊頌々曰楝木の高さ丈餘葉密ゆゑて槐の如く長し三四月開花花紅紫色芬香庭ニ満つ

花彙 石茱萸その樹高大數抱ふ及ぶ葉厚く光り夏月花者枝ふ満つ色淡紫觀るふ堪えり一朶數萼數百群とゆゑ頗る芬芳あり長き實と結ぶ桃葉珊瑚の如し穗數十顆枝の間ふ垂糸す生ハ青く熟すれハ黄色味甘し種田さ實の者ハ味苦し川練子是なり日本古未罪ハと梟首ふ此木と用ふ故ふ他材ふ用ひぞ倭俗誤て旃檀とよぶ旃檀ハ檀香ゝ又樗の字と用ふ

枕草紙 木のさまハあくるとゝ

いうちの花ゝをかしけれもうとくおそくまふ咲くう

かの つぞ五月五日

紫陽花 四絶花

韻語陽秋 唐の白賢手ふ山花あく色紫ふあるとをの〳〵、氣香〳〵、穠麗愛まべ〳〵人其名と知る者ゝし白樂天ゝと過て標となるゝ其名と紫陽とく

和漢三才會 其莖叢生も莖葉綉毬の葉ふ似て五月花をひらく云云此花もまくてまゝとの花ふ似て淡碧色一名四葩の花

天木 あぢさゐのそれのようちハおとりて、そこられのめのまさけでりハ後類

朝菊

花彙 花苦苦菊 荒本草ニ云人家園圃ふ好事の者多く栽苗冬と經て長生す高四五尺莖細く柔ふして蔓延する如し葉苦菜ふ似て光沢ゆゑ青色山て淡碧と帶ぶ初生莖の梢と抱葉毎ふ抽でく葉と穿形の如四五月葉の間ふ紫碧花と開き初て綻る時野菊のごと朝ふひらき夕ふ萎む

あざゝ

池沢の中ふ生ぜ葉も花も萍蓬草ふ似て別ゝあざゝハ莖河骨より長く水中ふ横さそりてよりとく葉ハ水面ふうゝび水上ふ上らぬ花の形色ハうゝゐふ似くり五六月水面ふ黄花と開く行葉と

和漢三才會 中古栗と云ふも近世漆もるハ誤ゝ

栗蒔

あきくと訓

とちゝぞ大低粘るものを材とそ粘ら

ざるものと粟とも穂大やうて毛長く粒粗きものと粟とも穂小やうて毛短く粒細きものを粟とも苗とも葉ハ似て種類凡て數十青赤黄白黑の諸色あり早中晩あり三月種るものを上時とも五月熟す四月種るものを中時とも七月熟す五月種るもの

青梅

姥しさハ葉ゞれ梅のごろ〻ゑ、杜國○梅とぶりゝひと下時とも八月熟す

本草綱目 杏ハ葉円くして尖あり、二月紅花をひらく、沙苑のごとく黄ゝて酢と帶るものと梅木とも青らして黄と帶るものと奈杏とも大さ梨の如く黄ゝて橘の如きと金杏と也、○和名ゝらゝ、

杏子

俗あんず、

荒布苅

和漢三才図会 本草綱目ゝ海藻ゝ似ゝうと按ずゝ昆布ゝ似て狹く黑色長さゝの四五尺縱の皺文あり柔ゝ韌て株あり堅實ゝて乾けバ小刀の欄とする其葉煮食ふべし

鱶

大和本草 東南の海ゝ生るゝもの形肥大ゝう夏秋肉多く味美ゝり冬春美ゝ也又室鰺島鰺あり味劣る

六月

芦の神輿

つの部津島祭の条下ゝゝゝ、

熱田祭

神社尾張国年魚市郡、江嵜、松姫島千竈の郷ゝあり、正殿五座第一天照大神、才二素盞嗚尊、才三日本武尊、第四宮貴媛命、日本武皇妃、才五建稲種命、宮貴媛の兄大宮司の祖神、右五座西ゝう次て是どうそゝ、○上用殿ハ神鮒草薙の宝劔ゝあり、又熱田七社とゝハ大宮ハ劔宮高藏宮大福田宮日割宮氷上宮、源大夫宮是〻、此外摂社末社一百余座ゝあり、當社ハ人皇十二代景行天皇の御宇鎮座〻其後天智の御時、故有て皇都ゝ移奉ゝ〻ゝ十九年と經て天武天皇朱鳥元年ゝゝゝ當國ゝ還座ゝゝ其砌ハ例祭勅使下向有て官幣と奉ゝ、抑當社の神事年中數度ゝあり、まつ正月十一日辰刻、踏哥の神事大福田の社ゝり始て政所、大宮ハ劔又大福田ゝて終る、此社ハ倉稲魂と祀る、故ゝ五穀豊登と祈る神事ゝあり、舞人十二人、烏帽子一人、笛一人、陪一人、各懸山吹と挿頭ゝて、同十四日ハ歩射の式、十五日ハ歩射の的、廿二日ハ両宮の歩射会、二月初巳午未の日祈年祭、○同月初未の日午刻、御田神社の供御、此日烏喰の神事ゝあり、俗ゝ烏祭と云、是ハ神事ゝ、ゝゝゝゝまらさる前ゝ、大宮祭文殿の前ゝて、祝座の長外ゝ一人平餅とゝて烏と呼ぶ、此餅と烏のくもざるゝちハ神事と

えしめ給ふ○五月五日八神輿鎮皇樓門上へ神幸古賀ヶ山一棚○
○六月九日山鉾祭礼あり、熱田八ヶ村よりこれを行ふ
同月晦日夏越の祓あり、鈴の社前の川岸おいてこれを修す又
○七月七日大宮の大掃除、十一月初寅卯辰の日新嘗祭、十月
廿九日両宮外院煤掃ひあり、此外諸社の供御八月々数度これ有今要を拾て略記、

愛宕の千日詣

廿四日 神社落葉 丹波国桑田郡、水雄の北にあり、祭る神二座伊弉並尊、火産霊神 神祇拾遺 愛宕権現端の御前、軻遇突命、奥の御前、伊舎那美尊 紀事 六月廿日四日愛宕詣、是平日の千度に当るとして、俗これを千日詣といふ、寺僧六坊也、この日参詣の人に酒食を饗せ、こと坊著くらふ、火札と買て帰路、榛の枝と求め粽を付、こと肩にして帰る、榛の枝は竈の上に挿むなくすると、其家火災を免るとて、九六坊国毎に擅越あり、貴賤を擇ず、毎年札を贈て、贄を贈るこの使を勤るもと中泉といふ、この山嶮峨の西にあり、延喜式に載る所、丹波の桑田郡に属す、今は山城の國にあり、本殿祭るところ愛宕権現垂跡本地勝軍地蔵菩薩、是則慶俊法師再考勧請也

る所あり、当社もしもは城北の麓に奉ふ、光仁天皇元年今の地にうつす、

荒和祓

夏の部

越の祓の条下に見べし、

麻の葉流

祓草 軍中行事 夏引の麻の大ぬさ、ところ〳〵にてかくの〳〵つくるのみにあらず、大蔵卿○麻の葉と切て幣とす、るゆゑにふるくまる川に流もあり、祓草といふも麻のこと、麻の葉ゆてもて

暑日

字景欽文 暑は煮なり、熱して物とする故に名く、六月の季なり、暑と煮ぬ、暑日と煮がごとし、○暑き日と也、

青嵐

夏木立の梢の緑と吹あらしをいふ、也一説六月土用中の空に一点の雲なく、青くこゝる天気に東風のくくしたると青東風といふ、無類の天気に是を青嵐といふ、

赤草

麁文曰赤草一名山酸漿、高さ七八寸ばかり、一茎一葉、葉吾の如くにして薄く小さし、夏日其茎葉真紅なる、其苗山沢にあり、故に山酸漿と名く、立花と好る人、夏日これを愛して花瓶に挿む、

青田

社詩 六月青稲 多千畦碧泉乱と作る、意やゝ風景にるべし、

藍苅

和漢三才画会 四月苗と植て九七十日ばかり

にいまゝ穂とあくゝる時、晴且ふ露ふ乗して抜採り、曝し乾もこ云云按ずるふ抜採るも乾稀ゆして苅る者多

麻、同苧 櫻麻 和漢三才圖会 苧麻大麻ことゝ云皮を剥て絲ゝとして通して苧と称す苧麻と以て真苧とも、羽州最上の産と佳し奈良瀑布紵ハ宿根土中ふ在て、春ふ至て自生を、栽種ることゝ獨ひご、荊楊の間、歳ふ三ゝひ苅る諸国これを種て歳ふ三ゝひ苅る便其皮を剥取竹と以て其表と刮る、厚き所、おのづゝ脱し裏の筋の如きものを得て布と緝も、○蘇頌曰苗の高さ七八尺葉楮の葉の如くして面青く背白く短毛あり、夏秋の間細き穂青き花を著く、○櫻麻、櫻花のさくころ栽る故の名とも又麻の花の櫻ふ似る故とも云云麻苧と夏ゝ二番川と秋とを、**青蕃椒** もゝ○麻苧と夏ゝ二番川と秋とを、**青鬼灯** 青しとゝひて夏季とも、**青瓜** 時珍ゝ青くゝ〜くゝ秋の部ふ註を、色瓜といふる是ゝ江戸ふて云ことゝ本田瓜とゝふ九貴瓜ふ似ゝ長大ちゝ、**阿古陀瓜** 阿古陀、寇も南瓜ふ似て今人好まゝ此瓜京所ふ多し味美ゝ其蔓長く葉蜀葵ニ似て花黄ゝ、**麻**

地酒 諸国名物記 豊後国の製ゝ云云 和漢三才尚会 南都浅茅酒云云 毛吹草 豊後国麻地草云云又朝生酒と書、或ハ土ゝとゝ云酒方の書ニ云麻地酒、豊後国ふゝ出、其造法糯米粳米等分ふ合製して冬月寒水と用て是と釀し、土中ふ埋め草茅の類と以て是と覆ふゝ冬春と經て夏月土用ふ至て則土中ふゝとゝと出をふ既ふ熟せゝとゝて二ゝの名あゝ、夏月の飲ゝ〜賞翫も、**洗飯** すの部水飯云云 紀事六月の条ニ出、**雪** 早すゝ時八民間請雨の法と修ゝ是ゝ雨乞とゝ民人鉦とゝち太鼓と鳴らゝて踊躍或ハ笠と戴き蓑と著雨中の莊とて是と祝し、諸神と祈ゝ云云、**秋隣、秋近し、秋と待** いづれも別義ちゝ〜

さ 四月

下帯 御湯殿記 五月五日より女房上下帷子といろゝふ深て著し附帯あゝ是ハ洞中の御事ゝ九俗ふも地白帷子下帯と用ふ又四月ゝゝ用ふ、**山王祭** 申の日、但ニッあれバ

二の　近江国日枝の神社ハ滋賀郡坂本ふ有、祭神大己貴尊
申、　こ所謂上の七社ハ大宮大国主命　十一面観音二の宮麻多羅神
及ひ金比羅神　こなり天台山青龍寺の鎮守ふ准を　法師聖真如来
子ハ幡大菩薩、阿弥陀八王子灌頂大法王子千手観音　こなり補陀洛
山と表す、客人の宮、白山明神の昊尊、去来諾の大神、山王の
行化と助け、北陸と出てこの山ふ来現ある故ふ客人の宮と
いふ　十一面十禅子ハ地蔵の應化、大師此山と開きて成就の後上
定心院と創む、殿山東の堂ふあり十禅師と置てまつる、九人と
えらひ得て一人と欽く安慮と得て、数ふ満て、十禅師の才
器と撰ん〳〵て忽然と〳〵てこ、又ふ社とその所ふ建て
祭供をこなひと十禅師といふ　普賢中の七社、牛御子ハ大威徳大
行事八田比沙門、早尾ハ不動、氣比ハ聖観音、下の王子ハ虚空蔵
王子の宮の珠聖女ハ如意輪ふり、下の七社小禅師ハ弥勒龍樹
西王子ハ愛染、新行事ハ吉祥天、岩滝ハ毘沙門天、山末ハ尸利支天
叡の宮ハ不動、竈殿ハ大日、以上廿一社あり、〇三月十八日山王祭
の神とその所ふ於て、伐取て、四月三日ふ至て、西教寺の側
の松の木ふ寄せ、けて又山王の社前ふ置、夜ふ入て諸人こなと
とり、大津の四の宮ふ立ツ祭の日神幸の時大津より大宮

の拝殿ふ返し入奉る〇申の日江州東坂本の山王祭ハ、午
の刻過て、田楽法師、獅子舞、比叡辻の人並ニ衆徒前駆して
神輿と迎へ七社の神輿山と下る時、前後とゆらそひ競ひ
すゝそて舟ふのせ〳〵む、山門の僧徒桟敷と構へ翠簾とそ
て是とそ、こなと横桟敷といふ田楽法師ふこの前ふ於て
芸とふをこの日京の山王町より供物と吉の社ふ献も前日
天台の當座主の御室ふ至てこなと加持し、翌日東坂本ふ至
りて供を、又江州膳所の地人御供と献で祭の日縛船二艘湖
上ふ浮め、音楽と奏〳〵て、件の供物と献備を是と御供船と
いふこの船ふ乗るもの、多くハ猿皮と着て猿の假面と被る、
猿ハ元来日吉の使令こなとの、中、六社の神輿へハ、依りふ供
をそなふ絵〳〵て後、湖水ふ徹つ大宮一社の神供ハ、神輿の前ふ
置ふとその後神輿、船と陸地ふ寄せ、神馬相ひ〳〵へ得こ輿
中の神騎こなるふと、本社ふ入るこなといふ、七社の空輿ハ、坂本の
地人こなと昇て、神輿屋へ入る〳〵、今日山門ふ属そる所の供
人其こ盛威とふるひ、神幸と警固を、俗諺ふ山王祭ふ礙る
ものあれ、寒の語ハ、今日のこなこなとこれ人と害もるふ及
ふの語ハ、祭ての前夜いまゞハ八王子の神輿と祭ら応急

ふ山坂と下りて、七社の神輿各本社七ヶ所の拜殿ふ居う、
抑山王祭ハ七ヶ年詣てぞ〜てハ盡く見つくしぞ〜とのくと、
古老傳へていふ九月中の申の日、八王子三宮の両神輿とハ
三子の山上拜殿ふ舁きそ、四月末の日ふ至て件の三社
ど神輿ふ迁〜奉ると、午の神事とい八八王子拜殿ハ元来
山嶺ふ造りて出して階下遥ふ低し、神輿半ハ拜殿ふ向り、半ハ
拜殿の檻干と越て外ふ出し、神輿の先の方の棒ふ柱どうそ
相図と待て柱と拔とれハ、神輿そうしまふ落つ、その下ふ神輿
舁数十人並居て中ふて請取直ちふ山坂と下を、誠ふ生死とと
の一時ふ究ひこまハ八瀬の土人頼て役まる所ありこと也と神
輿落こらハ下し終りて、両社と二の宮の拜殿ふ安置を、二の
宮の神輿と拜殿ふ迁し奉るとハ、近年未の日の晩とかる
十禪師の神輿も又同〜、未の日三の宮、十禪師、四社の神輿
と大政所ふ入し奉る、同時警固の式あり、大宮聖真子客人
の宮ハ大宮の拜殿ふうつし奉る、（此間ハけ日ハ事を公人各白素絹
紫の剥めき五條袈裟と以頭をつゝこ太刀と佩、その余数十
輩甲冑と着〜、鎗長刀と持てその所と警固し、神前ふ武
器と立つらねて、終夜警固の勢ひとかゝて各下山を、此日京

祇園の社より、御供と捧け来りて酉の刻献備をこれと未の
御供といふ、暮ふ及て宵宮落〜といふとあり、政所四社の神
輿と石垣の際へ出し石壇の下より柱ふて、神輿の先の方ハ棒
端と持せ置て、こまとも又合図と待て四社一同ふ落さんと設け
おくと、神事の役人その所々ふ来集りて、時刻ふ至まで御ふ舞
大政所ふ来りて、二の社三の宮と次第に舞て退く、次ハ田楽法師
装束ふ菅笠と被て、藝と施し、神輿と拜をこの時公人頭取
在言さしたさてものう仕れといふ、田楽笠とぬぎ立烏帽子
と着てうさハ舞ふとの舞の扇と擧ると相図ふ神輿と落を
四社の神輿皆中ふてうけとり、先とひらをひと走る収納所の前、
亂の宮ふて前後とかふ相摘ひ是より次第の如く、神輿と並へ
大宮の拜殿へ迁幸七社合せ奉る、当日申の日山門の大衆裁
数人の義あり、公人甲冑少〜衆徒と警固を桟敷の前
ふおゝ〜御ふ舞田楽あり、是ハ宵宮ふ勅使御参向当日まで
御滞留勅使ハの郷舞の遺意といふ、皇七十代後三條院延
久四年四月廿三日始て祭の官幣と立るこのよしぜ二社注式ふ
出、或ハ六十四代圓融院貞元二年四月廿六日、始て上卿弁外記
文諸司と遣はさることといへり、〇九神馬の催し、一二番の鐘

を應じて、恭詣の輩石の鳥居へ来て集る、三塔の公人人數とけらてる、末の剋だうふ四の宮より榊と渡す、戒成東龍濱成、玄官、唐裝束にて各馬上、七度半の使をして榊と渡す、此間も長け五里、暑に、社家春日祭といふことあり、社家の拍掌と待て、大宮前の麻と動るをと合圖として、神輿各先とけらそひつ、舁出す、前後の勝負石の鳥居をそよあり、こ神輿ハ飛ぶが如くハッ柳ふいてるこ、ふおいて神輿と船ふ乗せ奉るも又先後とけらそふこの神輿船ハ湖辺七浦より毎年こゝゆこと出す、是より辛崎の社ふて、神供の義ハつゝ七社神輿の駕輿丁例年潔齋精進してこゝゆこ動ず今日の勝負の手柄と褒美して禄と賜ふとあり、谷々勝手よりこれと出す、日次紀事ふ七社唐崎より、神馬ふて陸地還幸こいふ誤なり、日吉鎮座記祭儀三月の祭礼ハ琴の御館大樫木と以て、神幸の祝詞と奏し、唐崎ふて先盟の如く恒世ろ裔栗の御供料と奉る、神輿と出し祭ること八、桓武天皇延暦十年とこゝ、御舟祭始るといい延元年中供水以後の例こゝ七社の神輿、御供と献るこ各七膳、献供の式畢て神輿舁る輩ハ唐崎へ上て、陸地と本社へ帰る、西ハ高野矢倉修学寺、佛

格寺、田中、山中の人東ハ大津志賀、河野坂本、苗鹿雄琴、仰木、乾母、真野ホの土人也、神輿舟ハ若宮の濱へ着岸、是より上今濱といふ所の土人、神輿と舁き炬火挑灯ふて本社へ還御あり、翌酉の日廊の神事といふ者大坂より来て、神楽と奏し終て、

後神輿と榊取 かの部神祭 吉日撰ひ

終るあり、 榊取の条ふ注す、 三枝祭 捻木抜ふ所

○大和國添上郡率川の河波神社の祭、或説ふ率川と三枝を別社、率川の社の南ふ三枝卿子の社あり、諸神記ふ件の社ハ右大臣是公の建立ありこるふ、よりて南家の苗裔この祭と行ふ、又一説ふ三枝の花を折て酒樽ふ、ゝ、ぎる故ふ三枝の祭こ、申とゝ、顕邪の説ふ三枝ハ、ら、ち、あ、き、ゝ、り、ま、廣ゝ、ゝ、ハ祝ゝ、ん、ゝ、こ、公事根源是公の建立と申口傳あれど、今こゝる書ハ、、、

愛宕山といふ蓋故あるか、この日一基の神輿ふ冠らせる金屋八愛宕山より下も此金屋下ると期として神幸と催す一基ハ野山大明神と申て、野宮より迂幸と云ふ、ぶまの土人本居神とも、この祭ふ土人嫁と姑女の如く藝とからくせ、句掬ふ於て舞しむ近年引山或ハ傘鉾と出る、

櫻の實

和漢三才画会清明の前後花とひらき實と結ふ大小大豆むくり、生ハ青く熟すれバ赤黒し仁あり、小兒好でこれと食ふ味ひ甘美らく魚毒を解ふ俗ふ此子と櫻坊といふ、

五月

さ月は玉くの部 葉玉の条ふ出、

五月の鏡

異聞集 唐の天室中揚州より、水心鏡と進る背ふ盤龍あり、五月揚子江心ふ於てこれを鑄る背龍頃る異ちう、後旱もこれと祈れバ則雨ふる、

捜神記 金錫の性ハ一ふり、五月丙子日午時鑄ると陽燧ともいふ、十一月壬子の日子時鑄ると陰燧ともいふ、○時珍高臺録を引て云ふ陽燧一名陽符、火と日ふとる、陰燧一名陰符、水と月ふとる蓋銅と以てこれと造る、これと火水の鏡といふ、

五雑組 唐より以前ふ揚州より鏡と貢も、五月五日と以揚子江心の水と取ることと鑄る凡鏡ハ他ふし水清冽ふるもバ則佳ちうこと、

左近の真手番

の日

公事根源 五月三日ハ左近の荒手番、四日ハ右近の真手番、五日ハ左近の真手番、六日ハ右近の真手番、七日ハ左近の馬場ふて騎射のことありしあゆ、射手ちもハ大將の中さむむること云云此日随身褐の尻と折て着る故ひさうの日といふ、荒手番も同しさまあゆら、真手番正月ちもバ、五月五日とひさうの日といふ、ひさうハ引折の略、

河海抄 左近の馬場ハ一条西洞院右近の馬場ハ一条大宮在、

最勝講

四ヶの大寺 東大 興福 延暦 園城 最勝講の聽えあるとそれらてすくし、

証義講師聽衆をもあり、最勝王經と清涼殿ふて講ぜらるこ、

元亨釈書 永延皇帝一条寛弘六年六月十九名德と宮中ふ延て最勝王經と講論をること五日、立て式ることを、先代或行ひ或ハ止む、今よりを後例とふるこ、

五月雨

梅雨 入梅 和訓義解 黴雨 黴栗花穴 さくぶると

さつき雨降ふの暑ふ、○梅雨 埤雅 四五月の中梅黄み落んとする時水潤土溽して柱礎こゝふ汚蒸鬱こて

雨ふるゝをと梅雨といふ、故ふ三月雨ふることを迎梅といふ、五月雨ふることを送梅といふ、○入梅 四時纂要 閏人立夏の後、庚日ふ逢ふと入梅とも、芒種の後、壬日ふ逢ふと出梅とも、雨とゝもに、耕耨ふうつし、○黴雨 紀事 立春後、百三十五日、大概黴雨ともに、諸物黴腐る、此節陸地處々ふ水うちつも涌出る、俗ふ津井穴といふ、○墜栗花穴 紀事 摂州大田郡丹生山田の庄、原の村、ナオ天の祠のもとに、毎年水うちつゞき涌て期と怨ふ、是則中將姫の嫁自瀑前と祭さるの所、墜栗花左衛門といふ、かの世々ふ家ありと云云、

榊の花

和漢三才画会 坂樹 日本紀 賢木 本朝式 龍眼木 演語抄

和名佐加岐、正字未詳、按ずるふ本朝神社必用の木、ふい浮屠の木密と用ふるがごとし、葉小さく色深青やして香ふ〳〵、四時周まゝ、小白花とひらき、實と結、生ハ青く熟ハ紅ふり、日本紀ふ八百萬の神ゝ天の香久山の坂樹と取て天の窟戸の事を祈ゝ、以来、神の縁木となり、云云

柘榴の花

醫確類書 石榴 種蒔多し、千葉深紅やして實と結ぶものと宝珠

早苗、早少女

たの部田植の条下見るべし、

と名く、單葉のものと火榴と名く、甚ごとく花と多ら平葉のものハ一種白花とひらく、白榴と名く、黄花とひらく、黄榴といふ、博物志 漢の張騫西域ふ使を通ふ林安石國の榴の種と得て歸る、故ふ安石榴とも名づく、

さるとりの花

ふ多く生ず、葉ハ柳ふ似て刺あり、流紫の花史 杜鵑 又石叢花と名く、此花杜鵑の鳴ときに英と多ふ、

俗かめらぐ、

五月躑躅

故ふ名く、和漢三才画会 山躑躅 山石榴 杜鵑花 和名阿伊豆豆之、今云さつき、本草綱目ふ云、處々山谷ふあり、高きこの四五尺、低きのハ一二尺、春苗と生じ、葉の色浅緑、枝小ふして花繁し、一枝數蕚、二月始めて花とひらき、蓮華躑躅の如し、やして、石榴の花の如し、紅紫五出千葉ものあり、安ずるふ品類、三百余種ふ至る、四月もじめて開き、五月と盛ふ、俗ふ五月ふ称ず、摂州須ノ一の谷、ゆり二の谷、擢現山ふ至て凡三四里だゝり、遠州秋葉山の麓下、乾川の両辺もまた三四里だゝり、躑躅杜鵑花甚だ多し、夏月ふハ満山錦のごとし、

鷺撫子

部撫子 早の条ごとし、

松茸 和漢三才画会 松茸八八九月の交に盛とし他月
にもあれ五月出るものを俗に早松茸と名く
其味香美

蠻子 和漢三才画会 俗名抄云蠻子和名
佐之酒醋の上にとぶ小虫なり按
可ちのらもぞ
もぞろ小将酒醋腐肉の中に初め蛆と生じ羽化して小蠅と
なる身黑く羽黄色大さ一分に過ぎず其眼鏡と以て
視るに蠅と異なることなし然るに蠅の子
なるべきもの一類二種卵生化生異へともに

五月闇
李流愁森歌云乗破苔異未休滴臘光透長庭沙色恨
無長鋏一千仮割断頑雲看晴碧 藏玉 ここに三の晴間を
云へる空より色月こそ月

頭昭

上六月

西園寺殿妙音講 十六日 紀事 六月十六日十七日西園寺家妙音講
と修せらるる今日種々の珍果と家の妙音
天へ供ぜ堂上並に楽人相集りて管絃と催す又西園寺
家の外琵琶と弾ずるの家又此式あり近世敬ありて十六
日此と修す 体源抄 妙音院相國師長公妙音天と四条
の北室町の東に造らるる毎月十八日妙音講を

と行ふ云〻〇妙音天八弁才天〻

座頭の涼 十九日 紀事 六月十九日盲人納涼会ありと見
と涼とり〻人在京の検校及勾當上首一人清聚菴に会す
心經と轉讀ぜ頭人検校饗應と設け六波の中聲者四
人と撰ぶて平家と談ぜ暑氣甚〻く座席狹く故に撥
撥の外勾當上首其以下並に遠方の人来会せるに及ぶ
其外八粗二月十

座摩丸御祓 廿二日 社説 摂州西成郡の総社
六日の式に同〻
坐広太神宮八十五代神功皇后三韓より歸陳しまつる時
神武天皇の古例にあつて御船難波の岸浮見石の邊に
寄せ神璽安鎮の為齋〻たまふの地なり神功皇后十
年虎子難波大江の岸田蓑の島に鎮座浮見石八今の御旅所
祭る所生井の神福井の神細長井の神右の三津平の神に
竈の神名波比祇の神河須波の神二座と加へて五座なり神名傳
例祭六月廿二日夏越の大祓あり神輿御旅所に渡御あり鎮
座の旧跡八軒屋の南石町にあり今猶鎮座石あり俗にこと
神功皇后の憩息石とも人此辺とをぐて渡辺大江の岸とも
今の天神橋一名渡辺橋とも人大江の岸にあるに故に名く南八

城内ふ屬さ、北ハ免餓野、南北と田蓑の島こゝ〳〵ふゝ〳〵江口の辺まで、當社の境内ふして、末社あまこゝゆ、天正年中、賀江の側ふ迄〳〵ぬく、延喜式 坐しの社○祭礼當日氏子の市民種々の変り物と出まし、社司、西横川の川上ふ床を搆へ、氏子の形代と流し、禊と修す。

小蠅声戸神

神代巻 然まこも彼地多ふ蛍火光く神、及び蠅声邪神あり、復草木咸能言語あり、奥伐抄 さゝ〳〵あるとゝいそこ、譬ハ夏のゝへのちゝみゝこゝるせうふ、ゆのきこ神のゆのようまゝりこゝとゝらへゝゆゝゝ、

三伏

陰陽書 夏至ゆ三の庚と初伏こゝ、四の庚と中伏こゝ、立秋の後、初の庚と末伏こゝ、是と三伏こゝ〳〵、

さらし井

いの部井戸替の条下ふ出、

鯖鈎

時珍曰青魚亦鯖ふ作る色と以て名こゝる、大なるものと鱠魚こゝ〳〵、和漢三才画会 能登の海上ふ四月多し、數丈浪の為ふ漂ふ所と、鈎せゞ釣せゞして亦獲べし、

鷺草

和漢三才画會 奥州處々ふ鷺草あり、春苗と生ゞ麥の嫩苗の如し、高さ尺ゞゝ、六月莖を抽んで花と開く、正白色形鷺の如〳〵故ふ名く、連鷺草

とゝる一種あり、高さ五六寸、葉畧大〳〵、万年青の嫩葉ふ似、花白色鷺千有餘群飛ふ似こゝ、

櫻麻

あの部麻の条こゝ〳〵、

豆豆

和漢三才画会 十八豆、豆長大なる者本草ふ相混じて其莢長きゆの二尺ふ至ゝとゝふ者是あり、夏至の前ふ種と下ゝ蔓長く籬ふ延其莢尺余ゝその子九十八ゝりゝゆ故ふ俗呼で十八豆とゝく、六七月莢の嫩ものと煮て食ふ味甘美赤白の二種有

四月

擬階の奏

公事根源 四月七日こゝ〳〵八二月の列見の時の成選の短冊と、二省ゝゝゝ

木輕虛、皮の色粗白し、故ふ白桐と名く、○梧桐一名青如狼狸、○宗奭曰梧桐四月嫩葉小花を開く、蕚花の如し、[和名抄]大和本草 梧桐又青桐といふ、古人詩歌ふ詠ぜしハ是なり、世ふ白桐多く、梧桐ハ稀ふ[和名抄]梧桐者三月花紫ふ琴瑟ふ作るふ堪へるゆえ是なり、

金柑の花

時珍曰真樹橘ふ似て甚ふ高大ふらず、五月白花をひらく、

枳殼の花

時珍曰木橘の如くやゝ小く、高さ五七尺葉橙の如く刺多し、春白花を生ず、

鴨足草

一名ゆきのした、[ゆの部]べし、

木芍藥

芽の長名之、[賈魏花譜]天室中禁中初めて木芍藥と重んず、四本を得たり、紅紫浅紅通白興慶池の東沈香亭ふ移し植と云云○時珍曰牡丹ハ其花芍藥ふ似て宿幹木ふ似たり、

羊蹄花

羊蹄根 時珍曰羊蹄ハ葉の長さ尺餘、牛の舌の形ふ似たり、夏ふ入て莖と起し花と開く實と結ふ夏至節枯る、羊蹄ハ根を以て名ふ、根長蘆菔ふ似て莖赤し、[和劃義解]俗志の如又さしくとり、夏ふ至て小黄花をひらく、其根大黄ふ似たり○按大黄とハ者是なり、莖花ともふ黄赤の二種あり、其實枝ちゝのゝ振ア動其その音きゝくとハ、

剖葦鳥

蘆原雀 蘆鷺 [和漢三才圖会]蘆虎兼名苑 蘆原雀 葭剖 蘆鷺 俗称 蛙ごろふ 葭剖 狀倭の鶯ふ似て大さ雀の如し青灰の斑色長き尾田沢芦葦の中ふ在て好んで葦中の虫と食ふ其鳴声喧く亮〻云云故ふ此名あり、

兼三夏物

切麥

ひの部冷麥の条ふ出ず、

木布

[紀事]夏日奈良瀑布八講布、高宮布、木布の類を賣る云云麻布、葛布、藤布ふのいまゝ瀑さるゝと生布とハ木布とハ生布ふ同し、

五月

儀方を書

[五雜組]五月五日すゝむるの紙ふ儀方の字を書ごまを家の四方ふ粘つけて其年蚊蠅と退く、

競駈

くの部藥日の条ふ出ず

騎射

[年中行事歌合]五月五日豐楽院ふて昔ハ騎射と身御覽じけるあり、是を馬弓とハふ天子群臣みちのやめのくらを冠ふかけて節會の儀式あり〻〻続命縷とハひけるとハ、ふ、ものとそ〻へれ

祇園の神輿洗

晦日 紀事 五月晦日、祇園の社ふ詣で各扶の輿を愛で火災を拔ゝを茅枝といふ夜ふ入て神輿洗あり凡其式神輿三基所謂素盞烏命、大政所と号す、西ハ稲田姫少將井と号す東、龍王女今御前と号す、大政所今御前の神輿二基ハ神輿屋より南門を出て石の鳥居より松林を通ぎ一基ハ神輿屋より直ふ拜殿ふ入る少將井の神輿祇園町より目病の地藏堂の前を過て、鴨川の辺ふ曝し、いふ〳〵河水ふ神輿を灌て三基を洗ふ〳〵を神輿洗といへり、今その義を〳〵ふいへども、旧きを稱ぶるなり後再び祇園町より西樓門ふ入り、二基の神輿と共ふ拜殿ふ安置をその供奉四条芝居の役者竿の先ふ提灯を張外面ふ各姓名とふ〳〵高く是を擧く、祇園の町々家毎ふ高く提灯を張る、又六月十四日祭礼終りて後神輿三輿社頭ふ在ま、同〳〵十八日の夜、二基の神輿ハ直ふ神輿屋ふ入ま、少將井の神輿ハ今夜の式の如し、凡神輿三基黄衣の法師三人各常ふ〳〵と預りて主宰ま、

金銀花

ふの部忍冬の条ふ見るべし、

胡瓜

時珍曰胡瓜張騫西域小使〳〵そ種を得、故ふ胡瓜と名く、按ずるふ、拾遺録ニ云、隋の大業四年諱を避て胡瓜を改て黄瓜とす、正月二月種を下し三月苗を生ず、蔓を引て葉多瓜のごとく、四五月黄瓜をひらき瓜を結ぶ、

玉簪

和漢三才圖会 此者葉円く潤くして末稿の擂干の形ふ似る、故ふ俗呼てぎぼうしといふ、五月花を開く 本草 時珍曰玉簪一名白鶴仙、共に花の象を以て名と命ま、人家栽て花草と攻二月苗を生して最とふ高さ尺ばかり、柔ある莖白茲の如し、其葉の大さ掌の如し、團くして尖あり、葉上の紋車前の葉の如し、青白色、頗橋蓋六七月莖を抽んづ莖の上ふ細葉あり、中ふ花発十数枝と出す、長さ二三寸、本小ふ末大ありいまだ開ざる時、白玉の搔頭簪の形の如し、開く時微綻ぶ、

柜蒔

和漢三才圖会 殘ひふ四出、中ふ黄なる蕊と吐き頗香し、〳〵ハ餅として毎ふ食ふ、今ハ唯磨末とし團子餅として賤民用ふ

六月

祇園會

七日、 神社啓蒙 二十二社註式ニ云、皇六十四代円融院天十四日、 禄元年六月十四日、御霊会と始め今歳ありこれと

行ハ[紀事]先七日の朝、巳の刻、大鉾を六本各四条通りと東洞院の西ヘ出ス事と渡るとして、六本の鉾各称号あり、其中長刀鉾閻ととるヘ及ぶこと毎年魁首たり、この鉾四条通ヘ東の方の先ヘ行かうて、此鉾行ざる時、次の鉾過ることあることなし、函谷鉾を第二とも洲濱鉾或ハ放下鉾と称ス、ともかふ西の方の終ヘ行かつ故ヘこの三本閻とと、ヘ及ぶもこの間ヘ鶏鉾菊水鉾月鉾三本船鉾一本並ヘ大神山飛天神山古手山太子山山伏山孟宗山琴破山白楽天山郭巨山芦苅山蟷蜉山笠鉾山二本花盗人山木賊苅山岩戸山舟鉾以上十七本、九鉾一本後山三本連行もきのふ六角堂ヘおいて取ところの閻の次第のごとし、相傳ヘ長刀鉾の長刀ハ三条宗近ヘ作ること民間疇と患ふるものこと、ときハ病愈とい九鉾毎ヘ長さ十余尺余下ヘ車輪二丸と施し、左右ヘ大縄とつけて数十人こと引、その年役ヘ従ヘ小児その上ヘ乗り首ヘ宝冠をいくつき腰ヘ羯鼓と繫ぎ躍ることまま、左右侍立の小童、團扇を以てこと揮揚ス笛鉦大鼓ヘの物ヘてこと拍ス九鉾毎ヘ一本一箇ずつ、しろとりのくこの大ふる物車ヘのせてこと引京極を下り、五条松原通より各本所ヘ還る、神輿旅所ヘ至て神と假宮ヘ遷ス、四日巳の刻ヘ山渡る第一辨慶山その次鈴鹿山観音山八幡山役行者山黒主山浄明山鯉山以上八本昨日ヘ所の閻の次第ヘ因てこと渡ス、第九鷹野山第十船鉾閻ととくヘ及ぶ此鉾三条通西の終ヘ行かうとく、西ハ三条より東ハ京極を歴四条通ヘを過て各本所ヘ還る、同日午の刻ヘ山三社の神を神輿ヘ移し旅所ヘ出ス、四条通ヘの西を歴て大宮通御供町ヘ至て三社の神輿を安置し、御供を献ス終て後東の方三条通ヘと過京極と歴、四条通ヘより本山ヘ入る、両日前後の祭式古例あまたあり、略之

十五日[諸神根元抄]天延三年四融院の御宇六月十五日始て走馬を奉らる、勅楽東遊御幣ホの使左少将藤原理兼左右御馬立足あり、左右近衛の官人供奉、この後中絶ス、崇徳院天治以後毎年相續ス、[慈覚大師伝]四融院天延二年甲戌感心院と以て師ヘ附ス、[三十二社註式]天延二年中祇園の社ヘ以て日吉の末社と成ル、この臨時祭ハ慈覚

祇園臨時の祭

大師寺餅の豆年もゞめて行ふる今猶祇園宮慶の傍ふ大師の尊像を置、北野九度詣

九日 神社考 北野の聖廟ハ天慶三年七月十六日右京七条坊の婢文子ふ託して右京の馬場ふ捧んと欲ふ其女甚ふ賤して営業をなるすあるを家の側ふ祠を天暦元年六月九日始て北野ふ移ふ 滑稽雑談 富士ふ至て毎歳今日九度詣と称して南門の外弁慶松の邊ハ東向観音の堂前ふ詣ふ神前ふて往返九度して神拝を畢り是聖廟此地ふ遷座の日なるよ

日ふ九度八九日の義を用ふる也、木耳取 時珍曰木耳朽木の上ふ生ず枝葉なく濕熱の氣ふ生る所ふ木耳木蟻と云ふ○按ずるふ此物多く梅雨の前後ふ生ず六月ふ至て木耳堅て備ふ此時取

麒麟草 漢名未詳高さ尺ばかり莖葉景天ふ似て小く其葉浅緑ふして鋸齒ならし、莖の端ふ花を生ず花ふまた景天ふ似て色黄ふ

ふり、夏ふ秋ふ至て其花猶あり景天の別種ふ

金瓜 摂州兎原郡田辺村小路於ふ多ふ此物を出ふ其色黄金の如し 銀瓜 参州の産其色白銀の如し

ゆ

四月 雪見草 卯の花の異名なり 藏王お見草名ふ雪ふ雪ふ紬なれ〜雪てけ物まるを、 鴨足草 本草綱目 螺厲 虎耳草 陰湿の處ふ生ず人亦石山の上ふ栽高さ五六寸細き毛あり一莖一葉葉蓋の狀の如し葉の大さ銭の狀の如し初生小葵の葉及虎耳の形ふ似ふり夏ふ花をひらく淡紅色

兼三夏物 内衣 和名鈔 温室玉藻浴の法七物其七ツも内衣ふ云ふ和名田加多比良 論語註明衣ハ布を以て沐浴の衣とす○今ハ夏月平服を所の木布なり以て也ふ云

五月 百合 時珍曰百合の根衆瓣と以て合成ふ或ハ云百合病を治ふ故ふ名く其葉短く濶く微竹の葉ふ似て白花四垂の者百合ふ○ 百合 畏百合 袂百合 黒百合 博多百合 車百合 透百合 鹿の子百合ふの数品あり各其頭字の部ふわかち入べし、

六月 夕祓 ふの部夏祓 白雨 ばたづゆ

月令 此月土潤溽暑大雨時行 漢字和訓 五色線三五七条の雨、こゝと錦雨といふ 呼今 白雨と書ことハ天満の森由已法橋、山谷詩ふありと申されしうむ、尤、執筆の時書始し文字之 離騒註 凍雨ハ夏天の暴雨、

夕顔

和漢三才畜会 彼岸の中ふ種と下し、立夏前後ふ種と越、五六月正白花と咲らく、日午ハ凋ミ暮ふ盛ん故ふ夕顔と称も、實と結ぶ早晩の二種あり、○夕顔や秋いろ〳〵のふらべうめく 義

め 四月

冥途の鳥

三魂と縛めて闇の柄下ふ至る ふ二の鳥 棲掌る一と無常鳥と名づく、二と拔目鳥と名づく我汝ゞ舊里ふ化して、鷓鴣鳥とあり、怪語を示して別都頓宜壽と鳴ん我汝ゞ舊里ふ化して烏鳥とあり、怪語を示して阿和薩迦とあん、三 俗名抄 鷓鴣和名 保度々 木須

三夏物

めふ見ぬ鳥

毛吹草 和州南都飯無○世俗まと夏月ことを賞するく其製多しとゝも、京の六條南都の製

飯

諸歌未考

鮓

不限夏

み 四月

水屋の能

四日、五日 紀事 南都あり

水屋川の南ふ水屋の社あり、祭る所の神二座、素盞烏尊稲田姫あり、云〻此祭ハ伏見院の御宇、疫病流行ふよりて始めて行りる、いゝ〳〵ハ神楽ホあり、今ハ申楽四番あり、地人能藝と施もと、四日五日三あり、

御形の日

の条ゝるべし、

三月過鳥

もの異名

朗恒抄 四月十月六月ぞうあもハ、つきすぎるこゝ○さみくまの雲間と鳴てもどるくゝ良のゝつきもこ鳥、

都草

大伴黒主、

大和本草 細草、四月黄花と咲、葉小ふして三ツふわるる仙臺荻の如く、花の形豌豆の花ふ似て色よして小ふ、實ハ莢ありて両々相對も、

蜜柑花

本草綱目 樹の高さ丈餘其葉両頭ふ大り、緑色ふ〜して面光る四月小花と咲、色白〜して甚ど香し、大和本草 其花と花橘と古哥ゝよ〻て、

兼三夏物

短夜

明安一月令廣義 夏至の節晝六十一刻三十分夜三十八刻三十分○古今 夏の夜の字うとましほとゝぎすもなく一声ふ明る志のめ、貫之、

○寐入らぬふ飯焚家と明安き、冬松、

水鰊

和漢三才画会

惠曾魚正字未詳、按ずるふ鰊ふ類して、灰色ふ黄と帶、頭畧蝮蛇の如し、鱗硬く鬣短し、下ふ碧の線文三條あり、大サ五六寸より尺半ふ至る、系切齒 水鰊 水鱧 此節と賞を、ひらきて潮ふひゝ上夜と越て生捕〻用ひ又朝ふ漬うると其儘用ると、畿内ふて切流し清流〻とゝ水鰊とゝふ、

水鱧

和漢三才

鼠会 海鰻 慈鰻鱧 狗魚 和名波無、俗ニ波毛、唐音の略ふ、俗ふ鱧の字と用ふるい甚ご非あり、系切齒 五月の頃八潮も自然と多〻此時磯辺へよると網ふて取るゝと水鱧とゝふ、又一説ふ鰊鱧の両種と大坂より大和へ送るふ桶の水と港へ魚を漬る大和川と舟ふて〻ふの大和の土人鰊と牙一ふ賞し鯛より勝れりとも彼水ふ浸し大和へ送る

蚯蚓出

月令 孟夏月 螻蟈鳴 蚯蚓出 本草綱目

土龍 地龍子 歌女ふの諸名あり○時珍曰術家ニ云蚓雲と起をゞ〻文陰晴ご知る故ふ土龍、地龍子の名あり、其鳴ゝと長吟、

海松

崔禹錫食經 水松狀松の如くふ故ニ哥女とゝふ、

うみまつ

て葉ふ〻、土佐日記 おゝつのれ〻ふハ子の日うつまれ〻ら〻ぐうゝ松とゞふ〻のまゝ〻ものと、源氏葵の巻 れゝあつふきゝ千ひろの底のうるふきのゆひ、ゆくゝもゝ名ハうゝのゝうゝもゝ、源氏

五月 さつ

すまし

通俗志 糸切歯 年浪草 ホゝづもゝ〻ハ水馬虫ゝとゝす、わくゝ世見 おハ蚊虫の事

ゝゝと青藍按ずるふ今も關東ふそい蚊虫とゝづすゝし、ゝゝつゞわくゝゝゝの説ふもゝうゝゝん、猶まの部蚊虫の条、すの部水馬虫の条、たゝひふゝのゝ〻〻ゝゝるゞ〻〻、

水鳥の巣

浮巣

字彙 鳥穴ふあると巣とゝひ、水ふあると巣とゝふ、本朝食鑑 菰の集解ふ云菰の葉、蒲葦ふ類して蔓茂

十一夏月水鳥此中ふ宿しゝく以て乳を、

六月 御手洗詣

十九日よ

て晦日まで、山城国愛宕郡、糾或ハ只洲ふ作る下鴨糾の納涼　の社ことと糾の宮といふ蓋地名よりて是を称ふ社の東ふ御手洗川あり、その水清冷ふて溢を流る是祓と修る七瀬の一ふ諸人此水に臨て暑を避く、紀事下鴨の社司、川合の社の前住吉の東の川辺ふおいて六月祓を修ふ十九日より晦日ふ至りて諸人叅詣し、納涼の遊びとなりて、林間ふ假ふ茶店を設け酒食及び和多加の鮎、鯉のさゝ身、鰻の樺焼、真菜瓜、林檎、木の果を賣、或ハ竹串を以小團子数を貫き焼てこれを賣る是を御手洗團子といふ、

御祓

神代巻諸の神ゝ罪と素盞烏尊ふ帰て拝之ふ千坐の置戸を以て、遂ふ促徵髮を抜ちむるふ至て以て其罪を贖ふ云ゝ亦曰其手足の爪を抜て之を贖ふ已ふして竟ふ逐降ると云ゝ故ふ夏祓とこそ云ふ

御祓川

御祓とそる川、古より七瀬あり、拾芥抄川合、耳敬川、東の瀧、松ヶ崎、石影、西の瀧、大井川、

道饗祭

晦日　公事根源是ハ疫神の祭り毎年ふ必行ハるべきことゝ近ごろハ絶て侍るふ也、鬼魅の他方ゝ京路ふ入ざらん為ふ路上ふ供物とそなへて祭るゝ鎮火道饗の祭と四角四境の祭と申ゝ

水うけ合

通俗志ふこゝとといぐさす是を卑賤の者、夏日炎暑ふ堪ず水練のまねびして大勢集て、其真ふ乗じ左右ふまゝ、まして互ふ水をあびせかけて、勝負を爭ふといふ、

名

荷筯

蘓頌曰蓮荷春初て葉を生じ、甘蕉ふ似ること、根姜芽ふ似ること、其葉冬枯る根莖となること、其性蕩と好む、木の下ふ在て生るもの花美ふ、

水芙蓉

貞享式此名ハ新撰ふハ芙蓉と

和漢とかふ秋の部ふ入ることゝ也、水芙蓉といふ時ハ蓮ふハ蓮の一名とす、倭ふハ和らげて水芙蓉と讀ぞとも、芙蓉ふ水を結びくるゝ、酌るといふ詞とそへてハ決ゝこと夏ゝ用ふべきふゝ、秋の芙蓉ハ陸ふ咲て渭てらぬ物なるハ云云　猿蓑集伊美蓉の花のもらくゝとちるゝ、ちるゝと云言とそへて夏の句ともらゝ、證句とそべし、

水葵

つくゝうせゝ　木名荅又鳧葵とも水鏡ともいふ葉ハ蓴ふ似て夏黄花をゆらく又白花のあれあり、

水中ふ生立て潔し人家近き池ふも生ぜるを依て見られる人稀ゝ、こちぎと水葵とおほえうる輩ゝ浮薔ハ秋ふ入碧花ふり混ぞべらべ、

四月 白重

桃花紫葉 白重表裏

白堂平絹更衣の時上下ふこまと著、

薔薇 時珍曰薔薇 此草蔓柔ふ藩き墻ふ依て授ゝ生ず故ふ墻薔と名く、其莖棘刺多く、其子簇ゝ生じ、営星の如し故ふ営賓と名く、又曰春嫩き蕊と抽んで既ふ長ずるときハ叢と成す、蔓ふ似て莖硬く刺多くふき葉尖て薄く細なる齒あり四五月花さく、四出黄心白色粉紅の二色あり、實と結ひ簇て成る生ハ青く熟ればあり人家ふ栽玩ふ中の莖組葉大ふ延長ずること數丈花ゆ又厚く大ふ白黄紅紫の數色百葉ハ出六出のかのごとし、

大和本草 野薔薇花白く単ゝ、野ふ多し、

新樹 この部若葉の条ふ出す、

元帝纂要 夏草

茂草 と茂草といひ木を蔚林茂林といふ、

椶櫚の花 時珍曰三月木端莖中ふ於て數の黄苞と出ス苞中に綴子

ありて列とをなし、乃花と孕めるを狀魚腹の孕子ゞ如し是と椶魚亦椶笋と云、漸く長じ苞と出すときハ花穗と成も黄白色實と結び累々として大さ豆のごとし、

芍藥 蘇頌曰芍藥春芽と生じ、叢とをなす莖の上ふ三枝五葉、牡丹ふ似て狹く長く一二又夏のそゞめ花とひらく、紅白紫の數種あり、子と結ふ牡丹の子ふ似て小ゝ秋時根と採る、○時珍曰芍藥ハ婥約の如し婥約ハ美好きゝ貞血草花の容婥約ゝ故ふ名とも、○董子曰芍藥一名將離別んとする時ゝを贈る、○花の宰相、えびす藥、えびす草、貞好草、亦の異名あり其頭假字の部ふわゝゝて註しゝ、

和漢三才圖会 扇是公云 胡蝶

胡蝶花 花あり四月花とひらゝ狀鳶尾の花ふ似て小し灰白色黄の紋あり實と結ぶず一種小著莪あり小ふして長六七寸石菖の葉の輩のごゝ花もまた小し、浅紫畧菖蒲の花ふ似て小く美し愛ゝべし、

白及 けの部慧の条ふ註せ、

羊蹄根 きの部羊蹄花の条ゝ註す、

四手花

田長 ほとゝぎすの異名あり、或書にいふ此鳥蠶業と催さんとゝめ四五月のころ来る田を作らざ則作る時過ぎれハ熟せずと啼 五五田長の名是ふるし

○越谷吾山いハ九諸鳥皆三指只杜鵑のみ四指あり、その樹上ふ宿るゝときハ二指前ふ向ひ二指後ふむけ四手の田長ハ是をもて名つく或ハ死出とふものハ非なり 古今

いくさくの田をつくれどうほとゝぎすいまだの田長と朝れくこふ 藤原敏行

蜀魂 ほとゝぎすの異名

あり 蜀王本紀 望帝其臣鼈靈が妻と淫して乃ち位を禪ずして去ぬ時ふ子規ふ入ハ故ふ蜀人杜鵑の帝と見て望帝と悲む

謝豹 五雜組 蟲ゝ蓋を以て死す人とされバ足を以て面を覆ふ羞る狀のごとし此虫杜鵑の声を聞バ則死す故ふ

賤鳥 ほとゝぎすの異名あり、杜鵑を又謝豹といふ

○名ふものゝ山里ふあく

ちづ鳥ハ卯花だち

鹿の袋角 和漢三才圖会 鹿茸 俗ふいふ袋角 蓐学

草の生る良俗ふ以て蓐茵の字とす鹿の角初て生ず、未開らざる蓐に相似くり故ふ然て長さ二三寸尖ら

ず堅ならず本草云鼻中ふて嗅べからざるが如し白虫ありこと

とを視れども見えず人の鼻ふ入て頻とせしが如く及

兼三夏物

新茶 古茶 紀事 此月茶を製して諸方の

人壺を携へ新茶を領納し然後ふ壺を山谷清命の地

ふ寄て盛暑土用の暑濕を避く洛外愛宕山宜とす、九

茶を製するふ前後の次第あり故ふ摘茶の時焙炉の

時擇茶の時こゝ〇古茶とも新茶ふ對ていふ名新古

とも夏

紙帳 紙をもて作るる蚊帳ふり、

季とも、貪しき者是をもて蚊を避く

紙帳

賣 用捨箱 飛鳥川 云むし夏近くなれバ紙帳を

冬ふふるまぶとんくし 紙衾 ありしの人物と高ふ

今ハそくふ 云 此飛鳥川ハ享保出生の老人の筆記ふ

まバ元文寛保の頃までハ此高人来てもふるべし、〇 向の岡

年刻宝八夕立やあるゝ中 毛吹草 越中の松皮鮨俗

ふと紙帳賣、立墨 **地鯖** 地の鮨とゝ龍ふ似くる故

鹽烏賊 南越志 其性烏と嘗こ自ら水上ふ浮ふ飛

烏是と見て死せりとゝまこと承れ乃ち

取て水ふ入るゝと食ふ因て烏賊と名づくいハゝろハ
烏と賊害へバ

夏くさ

夏李ふ用ふるハ遠土山中
もゝの海濱ふ遠き田舍のことゝ江戸大坂ハ繁花ふ
ハ生烏賊春四五月ふ至て最中ありて塩烏賊と用
ふるこ

本朝食鑑 早きものハ三四月熟し、
ふ、

新麥

晚きものハ五六月熟す是新麥の候
ま

和名抄 蓴 和名沼奈波 **潛確類書** 水中ふ生
り、

蓴菜

ぬなハ
す葉鳥蓼ふ似て水上ふ浮ぶ花黃白子
葉色三月より八月ふ至て莖細く釵の股の如し黃赤色
短長水ふ隨て深淺あり名づけて蓴菜といハ嚼ふ甚
ア、味甘く寒あり十月漸〳〵

紫蘇 時珍曰蘇ハ紫ふ似ふ音酥舒
粗硬し十一月蔕泥中にあり、
暢ふ藝の性舒暢ふて氣と行ア血と
和ることと蘇といハ紫と云ハ白蘇と名ク、

蟭螟

蟭螟の
巢とくふ虫ありといハ

傳燈錄 仰山洪恩禪師ふ問ふ如
何ゝて見性を得ん師の云ことゝハ蟭螟虫の蚊の睫ふ
ありて巢と
作るがごとし、

五月

續命縷、朱索、條

達ちの部長命縷のちゝ
條下ゝるゝ〳〵、

菖蒲刀

黑川道祐曰端午ふ
菖蒲刀といハ其形の相似ゝるを以て菖物ふ准へてこれ
用ふる處の木刀或ハ
と称兒輩腰間ふ横ゝへ端午石戰の戲の後ふ多くこの
刀を以て相戰ふこれを菖蒲切といハ菖蒲と
勝負と和音相近し一戰勝負の義寓ゝる、

神水

金門記 重五の日午の時雨ある時急ふ一竿の竹を破
ゝバ竹節の間ふ必神水あり瀝と取て藥の肝と以ゝ
れバ心腹の積聚を治ゝ、

紀暦撮要

新宮祭

今日雨ふふときハ來年大ふ熟ゝ、
三井寺の山中ふ於てゝゝと親ゝ祭ゝ所神新羅明神
ゝ、

元亨釋書 新羅明神ハ天安二年日珍師 智證大師 船ふ乘
て唐より帰ゝ洋中忽ふ老翁船船ふ現て曰我ハ是新羅國
の神〳〵誓て師の教法を護持し慈氏の下生ふ至ゝ語ゝて
こえぬ、〇三井寺山下の土人ゝゝと新宮祭といふ〇大
津所々祭多き故ふこれを關祭と號ゝこゝもつゝ者あり關
祭と称ゝるゝハ貴船明神の祭ゝり貴船の祭關明
神の祭ゝゝふ達坂山ゝありと其說迄ふ異ゝ攝考ふ〇

賑給 公事根源 こゝハいやしき民ふ米塩ふごと給ふ京中の餘理小路と分て撿非違使承て是を引米塩の勘文ふこ申て是を給ふ天皇陳ふつきて是を侍るこ、欽明天皇の御宇ようもて所る貧窮の者給ふこと、禮記月令ゆも侍るふも、西宮記 東の手八番名 諸寺北の手八右近の馬場西の手八右兵衛の馬場

鳥毛と草 はの部羽接 **麥門冬の花** 鳥の糸ニ註ス

大和本草 葉厚く五月ふ莖立て頭ふ穗の如く下長く連てさる紫花をひらきて實ある秋熟ス

毛の花 大和本草 鋪線菊小木ようて最生ス四月花をひらくゆつまり開きて盛久し真紅あり淡紅あり愛ス

越瓜 時珍曰越瓜地と べし葉ハまくうりふ似たり漢名未詳 以名くるあり俗ふ稍瓜と名つく南人菜花と呼ぶ三月種を下し苗を生じ地ふ就て蔓と引青葉黃花夏秋の間ふ

新茄和 世人茄子の料和豆豆の料和といい實を結ぶ へり其形狀料ふ似たる故名とそもそもきもんきもんこと五音相通ふり、

白ごえ くの部黑ごえの条ふ註ス、

六月

勝曼叅 朔日 元亨釈書 推古天皇十四年秋七月太子聖御ふ對して勝曼經と講ず

太子曰吾昔勝曼夫人ようる時釈迦世尊此經と說ふ故ふ吾よくく此經を講ず講已て蓮花と雨いそ大サ三尺ようる義疏と制裁して世ふ傳ふ○當寺勝曼院の号太子此道場ふ於て又此經と講じようる故ふ寺号ふ摂州四天王寺の西門西北百歩ばかりようる本尊愛染明王毎年六月朔日開帳こゝと愛染叅上云、

食 江次第 六月十日神今食其式 暑ス 行幸あるとき八中和院ふて行ひ行幸あるときハ神祇官ふ於て行ふる 公事根源 神今食年ふ両度ありる、

志渡寺祭 十五日ある贄州十七日迄 寒河郡補陀洛山清光院志度寺宗 眞言 緣記 本尊十一面觀世音是補陀洛界觀音の御直作ようとい本尊ふ御衣木ハ継躰天皇十一年近江國高島郡三尾崎山白蓮華谷ふり流出湖水ふ漂ふこと七十年崇峻天皇御宇湖

水より又宇治川に流出山城國淀の津に出ること二ケ月、夫より海中に流出漂蕩すること數十年、推古天皇三十三年、當浦の高嶋と云小島の磯辺に流寄る蘭丸菊智法と云ふ者、彼木に瑞光あるを見て引うけ、旬月を經て觀音大士童子と化現し、十一面の尊像を刻まれ暮に一子の刻に開眼等せりと終に一寺を說ふ、此この堂に藤原小比等淡海公當浦の海人と契と結び給へ不背の珠と龍宮城へ立返しまつられ海人の死躰を葬し所を故に志渡寺と号へ、死渡寺と云へ、天武天皇十二年辛巳その暮に精舍を建立し、死渡道場と名つく、抑志渡祭は彦前大臣、天平九年丁丑四月十七日薨ぜ彦前公當浦に下り給ふ時、庶民に慈悲をこうに王子の故に庶民その恩沢を報ぜん為、六月十五日より十七日まで三日夜の間、海人の墓に於て水祭をなす、此日諸人交易して市をなすなり、祭とは人彦前大臣の薨去は四月なれども農業の障ある故に六月に祭る、今日國主警固の季夏土潤ひ溽暑し、注云義あり

溽暑 月令

溽は濕なり、七の氣潤ひ故に蒸鬱

として濕暑となる

清水 說文

岩間に出ると雫と云ふ、滴を清徹る水、石間に流るる

御傘清水は雜に結ぶと云へり夏之堰なり夏之五貞享式清水はひもぐと云へる詞とて、古抄に夏と云ふ水の清涼と称せり、其詞に及ばざれば、堰結ふの詞に及ぶも清水とぐうと夏季とせり、例の蕉門の新風なるを

白梵天

和州田村の梵天祇所種南都に移る

醬油造 和漢三才

醬油、倭名比之保末邪の俗油の字を加ふ、醬油は本草に載る豆油なり

ひ

四月

翡翠の簾

簾の條注、あの部青

平野祭

此祭今絶たり、祭る神五座なり、北野天神の西にあり、貞觀元年十月九日始て祭祀あり、寛弘元年四月十日臨時の祭あり、

廣瀬祭、龍田祭

四日○廣瀬の社は大和國廣瀬郡河合村にあり、○龍田の社は同國平群郡龍田にあり、公事根源

祭の日は廢務あり、年に二度行らる、使は前日より大

忌風神の祭といふ是なり、[増山の井]廣瀬ハ大忌の神、龍田ハ風神なり、風水の難を除き豊年の祈ふ公ことの祭ふ公ことの

日吉祭 山王祭なり、さの部こゝをみよ、

美人草 [名花譜]花四辨色艷麗栗ふ類して小なり[古文前集]曾子固の虞美人草の詩の題注ふ云項王亡滅して虞姫自刎ぬ其墓の上の草と人呼て美人草といふと同く詩ふ云青血化為原上草○一種虞美人草といふ者あり異種

兼三夏物

單物 [釈名]衣の裏ふさと單衣といふ

日傘 夏日日と照く傘ハ白紙或ハ青紙を以ていとこと張在の油と用ひ

冷麥 [青箱雜記]湯餅温麺こんん麺と以食べまこと煎ると皆湯餅といふ[貞享式]冷麥冷汁この二品ハ京家の式日ふ多くハ秋の季とあせるハ察るふ冷の字の惑ふ也夏ハ涼を好み秋ハ冷を悪ふ天地自然の道理なり此等ハ夏と決べし

冷汁 煮冷

夏月羮を調和して其器ふ冷水ふ浸し氷の[illegible]冷冷汁といふ

干鱈 和漢三才[商会]風海鱈、海鱈ハ頭相聯て白鯊ふ作り形行板の如きなり夏秋ふと賞も越く刻く酒醤ふ和して膾ふ

干河豚 [同上]名護屋鯨ふ代ふ

蛭 [同上]蛭ハ水中の濕ニして白點あり辣鬣ふく腹白し味美ふらも惟皮を剥てふと乾し皮鮓と名づく夏月臘して是と食ス生ずるこまと海帶昆布と久しく雨水ふ浸すときハ共ふ化して蛭ふなる惟石灰食塩と忌し試ふ塩と蛭ふ點れば盤縮て死ス

蟾蜍 燕頌曰蟾蜍多く人家の下の濕處ふ在り形大きく背上ふ疣磊多くし行ふ極めて遲く緩く跳躍ふ鳴

抱朴子 蟾蜍千歳頭上ふ角あり腹の下の丹書を肉芝と名づくこれ山精と食ふ人ふこれを食ふと得れば仙となる術家取用いて霧を起し雨を祈り兵を解け縛を解く今我ある者蟾を聚て蠱ふ[illegible]指使ふきく

晝寢 [笈日記]壁をこゝろへ

蚤蝨 翁、支考評曰此句ハいふ面やと翁の申されしハ是ハ只残暑とこそ承了候へ

蚊屋の釣手ゐどやらまゝ人ゐながら習の人べきことをゐの
ひゐ人こゝ入ゐらんと申侍るハ此謎ハ支考ふこゝろれこう
して笑ひてのこ
さてぬゐ〜〜〜〜

五月

辟兵繒 うの部長命縷の条こゝ見〜〜〜

鬬百草 と 劉公嘉話 唐の中宗の朝安樂公主端午ふ百草と鬬ハ〜む其物の廣きこと欲し
地驛してこゝと取らゝむ又他の為ふ得られんこゝを恐
て其餘こゝと剪弄〇歐陽公鬬草詩云共鬬今朝勝
盈檐百草香

ひとつゝ丸日 さの部左道の真手番の条ふ注も

未央 柳 園史 金然桃その莖幹三三尺叢生て其葉柳ふ
似て梅雨ふゝる時黄花とひらく桃ふ似て葉長くして
て金糸 時珍曰山丹其葉長くして狹く尖
ゐ如し

姫百合 柳の葉の如し紅花六瓣四垂
ゐ如し

菱の花 時珍曰菱一名
ざゝる者山丹ふゝ四月花と 蔆其葉支散
開く根少ふして瓣少ふし

故ふ字支ふ從ふその角稜峭し故ふこゝと菱しい〜三
月莫こゝ生して迎ひ葉水上ふ浮こゝ扁中して尖あゝ光而鏡

の如し葉の下の莖ふ股あゝ蝦股のこゝ一莖一葉兩こゝ相
差ひて蝶の翅の如し五月ふ白花こゝひらく日ふ背こゝ晝
合一宵凋む月ふ

穆蒔 時珍曰穆八乃 粘こゝの
隨こゝて轉移こゝ、

枇杷 廣志 枇杷八冬こゝ華こゝ實黄ふして鷄子の如
種、ふこゝ也ハ杏の如し味甜く酢〜〜一
書ふ云其本隱密婆娑こゝて愛こゝし西時凋こゝ葉
驢耳の形こゝふ毛あゝ盛冬こゝ白花とひらく三四月ふ至こゝ
實こゝふ、毬こゝ作して黄梅の如〜〜、

六月

氷室 日本紀 仁德天皇六十二年五月額田の大中彦皇子闘鷄
ふ獵こゝ時ふ皇子山上ふ望て野中こゝ贍王ふ物あゝ其
形靈の如し仍て使者こゝ遣ハ〜て視せ〜む曩こゝ来て日
窟ふゝ因て闘鷄稲置大山主こゝ呼んでこゝこゝ問こゝ曰其野
中ふあゝハ何の窟こゝ答こゝて曰氷室あゝ中臣皇子こゝ氷こゝ
將来こゝて御所ふ献こゝ天皇こゝこゝ歡こゝ是こゝ以後毎ふ
季冬ふ當て必氷こゝ藏め、春令の始ふ至て氷こゝ散こゝ

氷室御調 公事根源 三水司四月一日

ようり九月の月蠶まで、是とりてまつる、**氷のおもの** 氷水 氷のむろと八熱月なれども、御膳水と用ふるといふ氷水と、源氏物語ものこそとり、註云氷水と云 枕草紙 いとしくわつきひる中ふいくるわざとさん、扇の風もぬるひ、こぶふ手とひらひてゝ〇室の氷のとけるとひふと云、

氷室の雪 氷室の雪とハ氷室よりかこひこる雪といふ、**氷室の櫻** 青藍接まるふ氷室作る山のいと寒きまゝハ季夏の暑氣をうけて漸く咲いでこる櫻といふべし、 千載集 小野の氷室山のこふ義孝の櫻うゑける時「下さゆる氷室の山のおもてざくらきえのこりあるる雪うとゝこゝる 仲正 奥の細道 芭蕉翁紀行 六月九日湯殿山小登りまてこる条小云、腰のけてえびーやそらくほと三尺もうのある櫻のつぼと半ひらくるあり、降つむ雪の下に埋ゝて、春と忘まぬ花のこゝろ哉 曲水 と櫻ふ云るゆ

氷室守 六月 氷室守、蓼太

一夜酒 公事根源 一夜酒とけふつく、氷室守ハ供ものゝ一夜とへ

くる竹葉のさけ、ハ一夜ざけと申、又こぶみけとも申、 ひまさけ 司事 本草綱目 竹葉酒ハ諸の風熱病を治し心を清くし意を暢淡竹の葉の煎汁を常の如く酒と釀て飲む、

延喜式 醴酒ハ米四升藥二升酒三升を和合して釀し造る醴九升を得、此を以率ゝて日ふ造ること一度、六月朔日起て七月三十日ふ尽く、日ふ供ものゝ六升

鎮火祭 公事根源 部氏の人火をうちて宮城の四つのまゝ少こ祭るとあり火災をふせぐんあるとゝ此祭礼の間秘術多く侍る

日盛 杜甫苦熱行 日祝融南来鞭ゝ罷火旗閃閃燒天紅 日輪當午凝不去萬國如在紅爐中

雲雀鷹鳥 ねの部練雲雀の条ふ出つ、

火蛾 和漢三才圖会 燈蛾燭蛾俗云火取虫 按るふ蝶の小なる者と蛾とゝ其種類ふ多く蠶の羽化ものゝ蛾と蚕蛾ゝ燈蛾多く雀の蠶ゝ出ゝ大三五六歩黄蝶ふ似て色拙渴くものゝ夏の夜燈燭とゝゝ時ハ火と奪ゝんとゝりもるゝごとく、數回ゝて終ふ燈中ふ投ゝ死す、故ふ愚人色欲貪欲の為ふ、身命を抛つ以て燈蛾ふ譬ふ、

百日紅 格物論 紫薇 花伶 百日花

と名づく樹身光滑之高さ丈餘花瓣紫皺蹙葉蔓赤き莖葉相對て四五月始て花さく開謝接續して六七月に至べし

三才畫会 紫薇俗ハ百日紅と名く其皮と懸くるときハ自ら動故怕痒花と名く

大和本草 紫薇花ニ以て百日紅と名文猿滑と号

鼓子花

時珍曰其花瓣とゝのさゞ狀軍中に吹所の鼓子のごとし故ハ旋花鼓子の名あり

和漢三才畫会 此花牽牛花の如くして紫紅色日午に盛んなり且暮ハ萎む故ハ俗牽牛花と以朝顏と称るなり葵して

未草

本草ニ時珍曰関公路北戸録云睡蓮あり蓮草のなびこと其葉荷の如くして大なり其花葉ハ布て載重夏の昼ふ當て花をひらく夜ハ萎て水ハ入書ニ示ことを出す

○和俗ひつじ草と称も上の説のごとく木の

射干

時珍曰蘆蠹數種あり名狀一ならず江湖ハ多し

ふきくかの

瓠花

時珍曰其實二類各色あり並ハ正二月と以て部こゝ

種と下も苗を生ず蔓と引て延縁も其葉冬ハ枯

似て稍四方にて柔毛あり嫩きときハ食ふべし故ハ詩ニ云

瓠葉采采之事ハ之五六月白花をひらく實を結ぶこと白色六小長短各數種あり大なる者ハ種蒔して小なる者ハ

瓢摶ハ多く要用とし千水ハ浮ふ

莧

和漢三才畫会 莧蓋ハ六月細花をひらき穂となり子扁して光り黑く鶏頭子ハ似て微圓く皺あり

ハ似て三四月に生葉と採て蔬とす赤莧ハ莖葉赤紫色高さ

の三四尺畧雁来紅ハ似て美し五色莧ハ十葉錦ハ似て

共ハ庭園に種て愛べし

蔓纏輪 称莧此二種ハ夏季に葉茂

瓜

和漢三才畫会 姫瓜ハ俗称巣瓜五六月小く瓜と生ず大さ二寸ばかり圓して淺青色味苦く食ふべからず熟

るときハ稍く黃微甘くして又くの食ふ堪ず

雍州府志 九條の田間ハ出ず大さ梨のごとく其色至て白し故ハ姫と以て

名ると称し玄兒の瓜と求て少し莖ことなり白粉と其面ハ

傳墨と以て髪髪眉目口鼻ニ畫き水引と以て其莖ニ結

ひ提携て玩具とす

續猿蓑集 姫瓜や神ハ入てもゐもうとも至暁

將酒造

特珍曰大豆の醬酒按ずるハ劉熙の釈名ハ云醬酒ハ將ニ以て食物の毒と制す

將の暴惡と平らぐ如し

○製法畧之

引飯

飯の糸出

冷水賣

江戸の街頭ふ手桶一荷とおろし炎暑ふ冷水とうる

孟夏旬

扇と賜扇の祥

年中行事歌合 夏冬季あらこまる

始ふ臣下ふ御酒とさゝび政とさゝに

ふ子ゝ之旬とハまつらぎの政よのそゝ玉ふ〻旬ふさゝめく

の義ゆり内裏あゝらしく造らるゝ初ふ南殿ゝて行ゝ

ゝるゝ一とハ新所の旬と申ふ也此四月の旬ふハ内侍扇と

ゝゝ上達部ふたゝ〻ひさゝこつきて諸取作法ふ有也

杜本祭

上の申 ○河内國安宿郡國分村祭る神二座齋大人神經津主の命ふして香取

太照神是ふ〻

公事根源 杜本祭四月上申日〻神社河内

國ふあゝ午の日使ゝ仁和五年四月ふ祭初る 河内志 杜本の

神社ハいゝ〻人古市郡勅ゝ谷村ふゆゝ式ふ安宿郡ふ屬ゝと

あゝ〻ゝ中一向ゝの所ゝ〻ゝ〻ゝ云〻勅ゝ谷村と國分村と領つゝき

の故ゝ也或人云国分村火の谷ゝ申ゝゝゝゝ当時杜本の宮と

唱ゝ来ゝ〻ゝ古代ハ杜本千軒ゝて坊舎千軒ゝて勅使参向

ゝゝゝ申傳ゝ〻ゝその近辺土中ゝ〻ゝ古瓦と折々堀出

ゝゝゝゝ

大和本草 莖の長さ尺ばかり葉八百合のごとくして狹し四五月に花をひらく紅白色花連なりて小し莖に十餘つらなりひらく藥種の

五月 ものもとし園に植て賞翫も云粽草と

藻苅、藻舟、藻の花 時珍曰藻は水草の文あり證類本考、

るゆ社潔淨澡浴をつゞまし故に藻と藻とい二種あり葉の長さ二三寸、兩ざ相對を即馬藻と葉無わしく絲及び臭の鰓の狀の如くわりて節々に連て生ず即水蘊なり俗に鰓草と名づく 和漢三才圖会 時藻 水蘊 和毛

毛一日毛波海人船に乘て出て繩を以て腰に繫ぎ水に没てこれを苅取て田に投給を養へ、

餅梅 名義未詳梅子は梅雨の時熟す其肉黄熟して更に萃なり波多きもの疑らくは是と餅搗といふべく色和俗果穀の類の粘るものを呼で餅とす此をいふか、

揉瓜 越瓜胡瓜とも縱に切劈横に割て塩を攀てこれを洗ひ水と去て醋に和して食ふこれを揉瓜といふ、

廿 四月 千團子 十六日

○一本に千誕子に作る、江州三井寺の鬼子母神へ今日諸人參詣をこの神一千の子ゆるとして孕ることを願ふ餅一千と供ゆるく故に千團子といふ、

石蘚 一名いもゝのね 團子とい

抱朴子曰或人共とさくるの道と問ふ答曰

赤靈符 五月 五月五日と以て赤靈符と作り心前に著、

兩翼啄長くして腋の下にあり或は以爲口あり腸と以て鳴者なり種類多し枚舉もるに遑あらず畧之○空蟬をこの蟬とのいふ又ものけくるとのいふと古方のとも多し、

蟬 初蟬 格物 空蟬 論蟬

石竹 葉の部撫子の条に詳す、

梅檀の花 棟の部

石菖 時珍曰石菖水石の間に生ず葉に劍脊あり瘦根密節高サ尺余の

るゆ凡は石菖蒲を人家砂を以てこれを栽ること一年春に至て剪洗ふ愈前ガバ愈細ふるゝ高サ四五寸葉韮の如く根匙の柄の如し、麤き者亦石菖蒲に甚しきこと記は根の長サ三三分葉の長さ寸ばかりなること錢蒲といふ其ふり薇ばかるふ、羅仙神隱書に云石菖蒲一盆と几上に置夜の間書を視る時燈を以て目を害もるの患なし、

六月

施米 公事根源 施米東山西山北山などいふ所の山寺ふ侍るたつきなき法師どらふ米塩と施こゝゝ事多し五日賑給六月施米ハ三月貧窮孤獨の者ふ米とたまふ月ごとに誠ふありがたきことなり

蟬の諸声 多く鳴らうとい〻ふ 玉吟 鳴立てとやもとゝかこも不隠ふこの雨ふりそゝぐさせゝのか絡まる 後柏原院

蟬時雨 蟬の多く鳴立るとゝ〻接ぎるふ蟬の鳴声の多くゝしまゝきと時雨ふあぐらへこいふあぐべし

蟬の脱 脱ハ虫の皮と解とゝ〻 是と蟬退 枯蟬といふ、

せゝご〻 鱠 部沖 とのゝ鱠の条 三注も、

四月 住吉卯の祭

初卯 紀事 四月 卯の日摂州住吉祭相傳ふ卯の日此地ふ垂跡ありとこの神奥一基瑞籬の外ふ三の門ふ至りて辻車を神主及祝宜各卯杖を持ちて草刈草といふ、○祭の日竹馬煎餅を鬻く者多し、

菅の宮祭 中午 神社啓蒙 小津の神社近江國野州郡ふ在祭所の神三座所謂大宮二宮三宮是なり、○神躰ハ宇賀魂〻此と世小菅の宮 くの部閑白賀茂祭と称も、

菅笠擔 詣の条ふ注も、

篠の子 和漢三才圖会 篠ハ小竹、叢生して草の如し俗ふ笹の字を用ふ凡篠ふ數種あり、馬篠 兒篠 焼兼篠 五枚篠 此等の筍皆篠の子なり又一種 長間竹 俗ふ奈伊行といふ 長間筍 篠筍 諸州とりふあり味ひ苦く多くして軟く微あり、多く食ふふ耐も、

兼三夏物

涼し 風土記 仲夏長風扇暑注云此節東南の風常ふあり俗ふ黄雀長風と名づく、

鮎 和漢三才圖会 鮎を釀る法塩少し糝しこれを厭ふこと一二日ふして熟る○宇治九地鮎 ちゝ 一夜鮎 飯鮎 月夜ホの鮎あり其頭字の部ふとりて註す、

雀鮎 毛吹草 摂州福島の雀鮎是江鮒といふ 奥ふあり、その大さ雀ゝどあり、奥の腹ふ飯を多く入るゝ膨ふて雀の形ふ似たり依て名とも、

馬齒莧 倭名抄 馬莧 和名宇萬比留○時珍曰馬齒莧其葉比並して馬の齒の如し園野ふこれを生ず六七月細花とひやきふく光る實と結ぶ 和漢才

[和会] 其性剛強にして倒樽の間に懸るゆゑに經て牺牲を景天草の強がごとし、[大和本草] 此草と軒にかくれば馬蛇を内に入らしめずと云云、

五月

住吉の御田植

廿八日 [摂陽群談] 摂州住吉神田を植るに以て神事を行ふ、相傳へ神功皇后三韓を征したまふ、歸陣のとき、長門國より植女をめして五穀農業のことを世に廣くもちゐ、その季乳字の遊女とかゝぬこゝをもふりて遊女今に早乙女といへり [紀事追加] 泉州堺乳守の妓女のうち、約束するところの春分年季明けうる女三人来りてこゝに植、今日神殿を植てのち妓院の暇を出すといふ云云 住吉の御田は古きを思ひもとめて、紅染の千早に似ることを著し、赤き袴ふ市女笠といふ、是古代の姿の殘るゝ今ハ

水馬虫

漢名水黽 わくくせむし

たゝ植る真似をするのみ、其身細長く五六分むくりの黒き虫、長さ四足ひろく、身は水ふつゝ水上と駈るゝ馬のごとし、依て水馬と名つ、畿内西土ゆゑ塩賣江東の兒童シヲニシホとゝ號ス、其臭地黄煎の臭之関東ケンポツ紫草アメカタとゝ

ホウ○其色黑赤にして鰹節に似たり、故に鰹虫とゝ一説に此虫味甘く、餳に似たり、故に餳賣○今江戸の方言にアメボウとゝ

忍冬花

忍冬に同じ 部 [ゝ] べし、

透百合

[漢三才] 面会白黄紅の數種あり、上に向いてひらく、

末摘花

[ゝの部紅花] 辨鮮明にして美く奥州より出づ、藍の条に注す、

李子

[八閩通志] 食貨の部云李其品一ならず、白李赤李も、黄と名づく實清く脆し、五六月熟す、臙脂李は皮肉共に紅あり、味甘く夏熟す、琥珀李は皮紅にして肉黄く味微渋し、秋熟す、

六月

吉の御祓

同火替 摂州住吉の社僧御祓を修する、晦日 [紀事] 六月小[ゝ]ハ二十九日を用ひ、大なれば晦日を用ふ、當日毎年神輿を舁の輩住吉の松原に宿し、朝に浜に垢離をとり、今朝神輿一基を宮前に寄せ社僧祝詞を誦して神をうつし、ゝして後社司六七十員騎馬にて奉供す、既にして神輿堵の御旅所にいたる、是より先社僧六七輩素絹を著し、茶磨笠をいただき、騎馬にて神に先ぶして堵にいたる、即神を旅所に迎へて又祝詞を誦す、

夜ふ入神輿住吉ふ還幸堺の市民手毎ふ炬を点してこれを
とむらふ迎送相連りて白晝の如しこれと火替といふこと
の日大和國神妙寺山の土ところて神輿ふそゆこれと堺
の宿院神事、あるひハ名越の後よりこハ荒和の後といふ、

菅貫ちの部茅の輪 **納涼** 夕まぐみ 橋もぐみ 山家集 夕みあぶ

の條ふ註を、
あさ石ふのかりゝ野波 五元集 具角 **涼臺** 開元遺事 長安の富人暑伏
千人の手を攔干や橋もぐみ
の中おくふ林亭の内ふ於て畫柱と植錦と以て結い涼棚
ともを、座具と設け、名妓と召て、同ゝ座せしめ、迎ふ相避暑
會とを、

すゞしき玉 秘蔵抄 そらもまでていさごとてらも月の色とまでしき玉の影ゝと
ぞらる 朗詠 燕昭王招涼之珠當沙月兮 **菅刈** 和漢三才
自得○すゞしき玉ハ燕の招涼珠といふ、
編会 菅本綱ふ載も、蓋荊三稜の偶ひ有て根異なり、齋
と蚊帳釣草との異がとゝ、接もるふ菅の葉ハ茅ふ似滑
澤ゆて莖ふ白粉あり、云云○今云菅ハ葉ふ鋸脊あり、
硬く韌も莖の本白し、別ふ一莖と抽んで穂と出も、六月

葉と殆て乾せバ白色、笠ふ縫ひて美あり、 **蟶** 時珍曰其狀蜀の如し大さ
身短く節促て足長く毛
あり、樹根及び巢土の中ふ生ずるもの水黄内黒旦ち茅
屋の上ふ生ずるもの外白内黯皆湿熱の氣薫蒸て化
生ス、夏より秋ふ入、 **水飯** 洗飯 源氏物語 常夏巻ニおの
蛇ア蟬とちるる、
すゞしんぞやうぐふさうぐきてぐくらふ云云○毒花
云、干飯ふどの類水つけ○或御説ものをんとそ、ゆめ
云飯とあり、こそ、
たちひて食ふ物ゝ

追加 い 五月 **天仙菓** 月令博物筌新別 の山中ふあり、花ふ
くゝて実を結ふ枇杷ふ似
てふさゝふ児好んで喰ふ、

は 四月 **樊噲草** 大和 本草 品和 是亦俗の名つけし處あり葉ふ
藤の葉ふ似てまゝあり黄花さく、

ち 四月 **茶筅草** 麥の事を茶筅草とらふ、
穂の形を見立てるを、

五月 朝

露草 系切歯 下學集ニ銭朝愛草ト出ル、一名銀銭花ト云ハ花の形揩ニ似テ小く色白く青くして底ニ黒紅のきわひあり、葉ハ三出五出ニして西瓜の葉ニ似タリ、高さ二尺ばかり朝ニ開きタ方萎む、**草石蚕** 異名ト甘露子、土蛹、滴露、地瓜子といへり、五月根ト堀煮テ喰フ、味百合の如く、根老蚕の如し、故ニ名づく

る 四月 **盧陀草** 月令博物 筌及び四季部類示ス、ことと四月の部ニ出ル、是ハヘンルウダ、唯ルウダ、いハ、秋のもじめ花ときき、秋の季ことみる 大和本草 ヘンルウダ近来紅夷ト云来る、是紅夷ルウダなり、葉ハ細ク、そ茎の末ニ木のごとく三四月黄花をひらく、四出ス、一片の間おのく一蓋と出テ花の心ニ實あり、岩梨の実ニ似タリ、夏実のるそ年子ともけハ来年花咲実ス、その葉茎根おのく拾ぜこの草一常のルウダ多の性ハ似て、性猶そぐれとくハ常のルウダより悪臭甚し

そ 四月 **車前草の花** 秋の部ニ注ス

た 四月 **橙の花** 喜祝ニ用ると以て正月の部ニも載せ、ここの條ニ注ス

ね 四月 **鼠もちの花** 藪椿と いふ、

な 五月 **刀豆の花** 秋の部ニ注ス

む 六月 **葎茂る** 和漢三才 圖会 本綱ニ葎 故堰、道の旁ニ生ス二月苗と生ス、茎ニ細き刺あり、葉節ニ對ヘて生ス、一葉五尖微蒐森ニ似て細き歯あり、八九月細き紫花を開く、子と結ぶ、

う 続虚栗 甲斐山中山賤のかくれの閑る葎ハ芭蕉

く 五月 **茼蒿の花** 秋のうの部茼蒿の実の条下ニ注ス

や 四月 **草下毛** 大和本草 木ニも下毛あり、花ハ相似タリ、初夏細き紅花を発く、一朶ニ群ル開くこと、敗醤の如し、○**苦草** 此詞 四季部類 ようそうり、青藍梅ぞるニ苦草ハ若草の誤り、くきハ〻きくの欠畫せるもろ〻そ爰ニ贅ス

初学の惑ひを解く、但し苦草ハはの部ハ注しもれたるを見るべし、

や 五月

蛇狀子 本草啓蒙 蛇床子、古説ヤブシラミと充つ、自司ヤブシラミ即竊衣、尔雅竊衣、注三芹ハ似て食ハべし、子の大さ麥の如し、

六月 金龜子 大和本草

兩々相合しもあり、人の衣ハ着く、北戸錄曰甲蟲也、五六月草蔓ハ生ず、南人收て以粉ハ養ハ、本草蟲名蝨の附錄ハのせ、婦人白粉の器中ハ入れ、雄ハ綠色光あり、雌ハ灰色光あり、形狀ハ飛蛾ハ似て長し、翼あり、額ハ兩角あり、長し、六足あり、俗王虫といふ、

あ 四月 **青木の花** 花紫黑色ハ

ハ桃の葉ハて大あり、實と結ぶ、ハ青く熟して美あり、葉もまたあり、紅あり、故ハ漢名桃葉珊瑚といふ、

五月 あつめ汁 五日 そら豆、燒豆腐、干雜ちぐさ、なくの物と汁ハ燒て食ふべし、とあるの汁

六月 蘆茂 細き芦間ハ紹巴、

さ 兼三

夏物曝 きの部木布の条下ハ注す、

ゆ 六月 **水粉** 水の珍ハ、麥とあづきとを、水飛して制、

し 五月 ろ、暑中砂糖ハ和し、冷水ハ浸し飲べき、

神曲製 本草 主治、水穀宿食癥結積滯を化、

時珍曰、葉氏水雲錄云、五月五日或ハ六月六日、或ハ三伏の日、白麪百、菁蒿の葉汁三升、赤小豆の末杏仁泥各三升、蒼耳の葉の汁、野蓼の葉の汁、各三汁を用ひて麪豆杏仁と和して餅ハ作り、麻の葉或ハ楮の葉ハ包み、醬醬黃を造る法の如し、黃ばむる衣の生ずるを待て晒し、

す 六月 **蕺菜の花** 花四葉ありて白し、葉の臭れと収む、

茂して後ハ除きのけ、篤信翁曰駿州甲州の山中の村民、くだこの根と掘て、飯の上ハおきむして食ふ、甘しとしいふ、

ひ 六月 **日向葵** 大和本草 一名西番

云向日葵も漢名ハ、葉大ハ莖高し、六月ハ花ハ頂上ハ只一苞のみ、日ハつきてめぐる、花あらざる最下品、

只日ふつきくゆふるゝと賞まるめゝ

猿蓑 日の道や葵傾く五月雨芭蕉

四月 錦

葵 大和本草 冬葵ハ似て別し冬葵ハ葉ハ岐あり

五ツ葉とゝのふ錦葵ハ葉円ふして岐ふ錦葵ゝ

其花紅紫白斑色あり四五月ふ開く銭の大さの如し

実をうゑて翌年茎高らぬ花さく三年とゝまる

茎高く枝多

くして悪し 千日紅 花鏡 木の高さ二三尺茎

深紫色と開く花千瓣細碎円整ふして毬のごとし

枝の末ふ生ず冬ふ至て葉萎む

婦 採て鬢ふ簪

ま 最能久ふ耐ふ

増補歳時記草夏之部終